
恋姫転生伝

ボーズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫転生伝

【ZPDF】

N90270

【作者名】

ボーズ

【あらすじ】

不運で死んだ少年が恋姫の世界に転生して恋と友情ととお話しー！

1話 始まり（前書き）

いつもボーズです。メインで書いていた小説のアイデアが全く出でて来ないので気分転換としても一つ書こうと思います。

これからもボーズをよろしくお願ひします。

1話 始まり

「何はどうだ？」

俺は今辺り一面が真っ白な所にいる。

果てしなく続いている世界。否、本当はすぐそこからは壁みたいな物があり果てしなくあるように見えているだけかもしれない。

俺は一体ここで何をしているんだ？ 取り合はず俺の名前だ。

俺は吉田 和喜。

高校生だ。名前は大丈夫…なら今日の朝からの行動を思い返して見よ。

AM7:00 起床

AM8:00 登校

PM4:00 下校

ここまで今まで通りだよなあ。

やつこえれば下校途中の今日の俺はとにかく運に見放されてたよな…

財布は落とすし、水を掛けられるし、自転車を避けた拍子にオバサンとぶつかって卵が頭に落ちて来るわで最悪な一日だな…その後何かあつた気がするけど思い出せん…何があつたんだっだけ？

「おおー！そんな所に居たのか探したぞー！」

俺が一日の出来事を思ひ出しつづけると上から頭に輪をつけた長い髪を蓄えたいかにも神様ですとこつオーラを出してまわっている爺さん が降りてきた。

「あなたは誰ですか？」

俺は「もーともな質問でその爺さんに話しかけた。

「儂か？見ての通り神様じゃが！」

期待通りの答えありがとひびきこます。

「何故俺はこんな所にいるんですか？」

俺は取り合えず何故俺がここにいるのかを聞いてみた。なんとかなく解っているがもしもの時があつた時の為に聞いておくことは大事じゃないかな？

「お前さんが何故こんな所にいるのかだつて？簡単な事じや。お前さんは死んだからじやよ。」

あー…やっぱりですか…

何となく予想は出来てた事だけど本当に死んでたなんてな…

「なんじや？驚かんのか？お前さんは死んだんじやぞ？」

「いやー何となく解つてましたんで、それよりも色々と抜け落ちている記憶的な物があるんですけど、特に俺が死んだ辺りのやつとか？」

「やっぱり聞きたいじやん？自分の死因つてやつを。でも何か聞かない方が良いような気もするんだけどな、人間だもん聞かないで後悔するより聞いて後悔した方が良いって言つよね？だから俺は聞きますよー自分の死因つてやつを！」

「後悔してもしらんぞ？だが記憶を戻す事はお勧めできん。お前さんが思い出したら精神的に墮ちるぞ？だからこの映像だけを見るん

じゅ。「

そう言つて神様（自称）はどこからかモニターを取り出し、俺が死んだであらう時間帯の映像を流し始めた。

「だから言つたろうに。まだ映像で良かつた物じや。これをお前さんの記憶に埋め込んだら精神崩壊しかねんぞ。だから僕がその時の記憶だけ抜き取つたんじや。」

そう俺は今絶賛落ち込み中だ。理由は簡単。俺の死因だ。こんなのが見せられたら誰だつて凹むだろう…？ただ凹むだけだつてのもその時の記憶を抜いてくれているおかげかも知れないが…。

俺の死因はちよび高所作業をしている工事現場の下を通りかかったときに吊してある鉄骨のワイヤーが切れ、俺を目掛けて10本の鉄骨が落ちて来たのだ。勿論即死でしたよ…ミンチになつて今に至るかんじだ。

「俺はこれからどうなるのですか？」

もう死んだのなら輪廻の輪に入つて次の生への準備に入るはずなんだが一向にそんな事が起ころる雰囲気がしない。

「ふむ… 本来は全ての生命が死したら輪廻の輪に入るはずなんじゃが、お前さんはまだ輪廻の輪に入る事は出来ないのじや。寿命を向かえきつていなないお前さんはこのまま違う世界に行つてもうづ。特別転生じや。記憶も全部残したまま送るぞい。」

俺はこのまま記憶を保持したまま転生できるのか。何か変な感じだ。何処に転生するんだ？

「俺は一体どんな所に転生するんですか？」

「転生先か？ お前さんの鞄の中にはあつたゲームの世界じや何か大変そうな世界そじやからお前さんの身体能力はこの世界最強になるよつに設定したぞい。では行くぞ！ そーれ！」

そつ言いながら神様は俺の足元に穴を開けていた。すつじい落ちそうなんですけど… と考えつつも世界最強の能力かと楽しみにしている自分もいた。

こうして俺は転生と言う形で人生の第2ラウンドを開始することになつた。

1話 始まり（後書き）

感想お待ちしています。

2話 誕生やじて成長（前書き）

頑張りまくのよひしへです。

ちよつと遅こかな。

2話 誕生そして成長

神様から「転生」というこれまで摩訶不思議な体験をした俺。俺は今母親の胎内にいるようだ。

俺が今から生まれるこの世界は神様が鞄の中にあつたゲームだとか何とか言つてたよな。確かあれは【真・恋姫無双】でやつだよな？友達から進められて買つたってのに一度もプレーすることなく死んじやつたしな、内容分かんねーや。

まあ今からこの世界に生まれるんだからリアルでゲームの世界をプレー出来るんだから大いに楽しもうじゃないか！何か早くこの世界を満喫したくなってきたな、早く生まれたいな。

そんな事を考へてゐるうちに俺はこの世界にしつかりと誕生した。

「やつたー・よつやく生まれたぞー！」

俺を取り上げたである初老の女性が俺を抱いている。

「よくやつたー・よく頑張つたなあ茉莉」

若い男性が喜びながら若い女性を撫でている。どうやらこの一人が俺の両親のようだ。ちょっと若すぎない？見た感じは二十歳にも行つてないような感じもするんだが… ていうか俺よりも下？

そうかまず俺が生まれた時点では肉体は0歳なのか…精神年齢が高いだけなのか。納得。

まあそんなこんなで転生完了した模様です。

そして誕生して5年の月日が経ち俺は5歳となりました。それまでの経緯はお察し下さい。授乳プレーはえらく耐えられないモノだった。という事だけ伝えておきたい。

ここが本当に恋姫の世界か半信半疑だったが、生前の友人が話していた恋姫のキャラには真名と言つ別の名前があるとかなんたら言つていた覚えがあった。

そして俺が産まれた時、両親が付けてくれた名前が、名を李翻字が
畠薹と名付けられ真名が和喜と言つ事になった。真名が生前の名前と一緒なのが嬉しい限りだ。

5歳になると同時に始まつたのが俺の教育だった。

両親共に昔はある城に仕えていたらしく、父が勉強、母が武術を教える事となつた。

この世界は、文武共に女性が優秀だという事も分かった。生前の俺の世界とは全く違う状況にかなり驚いたが此処ではこれが当たり前のようでいたつて普通に生活している。

教育が始まった俺は、すぐに習った物事を覚えて行き、勉学では多少のミスはあるも、歳以上の事を出来るとうになっていた。

更に両親を一番驚かせたのが武術だった。母親は剣、弓、槍などのあらゆる武器を使え、俺にはどれが合つか試した所、俺も全ての武器を基本的な形まではすぐに出来た。

周りの人達からは神童やら天才など言われているがこいつは頭脳は一応学生だし、武術等は神様がくれたチート的な能力だから俺本来の能力ではない。だがこれは俺の身体で起こっている事なのでやはりこれも俺の能力なのだと思つておこつ。

話は変わるが生前はありとあらゆる物が便利な時代だった。電気があり、コンビニがあつたりと便利な時代からやつて来た俺はその時の考え方もまだ抜け切れていない。何が言いたいのかと言つと、とにかく不便で仕方が無い。

娯楽も何も無ければ、テレビもゲームも無い。腹が空けばコンビニに行けば良かつたが此処では一から作らなければならない。しかも

いつも食材があるとも限らないので食べる時間は決まってくる。

夜になれば明かりも少ないので直ぐに寝るしかない。結局する」と
にも無いので朝は勉強、昼から畠仕事をしてその後は日が暮れるまで武術を磨くしかなくなる。ずっとそんな生活を更に5年ほど過ごしていったため文武共にかなりのレベルまで上がったに違いない。

俺は10歳になり、初めて母親との模擬戦をすることになった。

「じゃあ和喜、何処からでもかかって来なさい！」

母さんから開始の合図があると同時に俺は思いつきり踏み込み間合いを詰めて切り掛かる。だが母さんはそれを読んでいたのかあっさりと避けて俺を引き離す。

今俺が使っているのは剣の形をした木で出来た木刀もどきだ。ある程度の武器は普通に使いこなすが一番しつくつとくるのがこの剣のタイプだった。

どれほど打ち合ったのかは分からないが、最初は軽くあしらわれていたが、次第に俺の攻撃のキレが良くなつて行つたのかは謎だが、母さんの顔が次第に真剣になつていった。俺の成長スピードはかなり早いみたいだ。だがそれでも母さんには一撃を入れる事は出来なかつた。

「なら和喜。次の打ち合いで終わりにしましょう。」

母さんが今日は終わりと言つてるので俺は今日一番の集中をして剣を構えた。

俺が剣を構えたと同時に母さんの顔が今まで以上に真剣な物になつた。母さんから出でている武人のオーラ的な物がかなり凄い。

俺はそんな母さんに物おじせずに、思いつきり踏み込み間合いを詰めた。今までに無い勢いで母さんの懷に入つた。母さんはかなり驚いた顔を一瞬出したが直ぐに戻り俺は一瞬で地面にたたき落とされた。気を失う前に見た母さんの顔はかなり焦つっていたのは覚えてい る。

（茉莉Side）

私が今日は最後だと言うと構えた和喜の雰囲気がさつきとは全然違つた。このまま手加減したら確実に危ないこの子の雰囲気はそんな事を思えた。自然に私も集中してしまつ。

構えた和喜が踏み込み間合いを詰めてきた。速い！

とても10歳の動きとは思えないほどだつた。私としたことが油断したのか懐にいつの間にか入られていた。このままじゃ危ない。私はいつの間にか和喜を打ち落としていた。やつてしまつた。急いで無事か確認する本気で打ち込んでしまつた為に安否が不安だつた。どうやら気を失つているだけだつたようで安心した。（それにしてこの子の最後の動きはただ者じゃなかつたわね…まさに武人としての動きだつたわ。間違いなく和喜は将来大物になるはずだわ。）

そんな息子の将来を思いながら伸びてゐる息子の頭を撫でた。

母さんと模擬戦を始めて、4年の月日が経った。俺はとうとう母さんに勝てるようになつていた。

「和喜。とうとう私を越えたわね。母としては嬉しいけど武人としては悔しいわね。」

母さんが笑いながら俺を撫でている。

「いえいえ。まだ俺にはまだ教えてもらひい事が沢山あるよ。」

俺は本当にそう思つていた。もつと色々知りたい勉強したい。両親には多くの事を教えてもらつたがまだまだ多いはず。

「そうねえ、なら今度この辺りに最近出でるつていう山賊の退治に行きましょうか。あなたには命と言つもの知つてもらいたいからね。」

「マジで? いくら強くなつても超現代っ子だつた俺はそんな事出来ないつて!」

「あれだろ? 退治=殺人だろ? 無理無理! 俺には出来ません!」

「無理だつて！怖いよー。」

本音ですかー。マジで無理です。

「何言つてんの？あなたはこれよりも更に上に行く人間よー。此処で自分を決めたらダメよ！良いから着いて来なさいー！」

「うつて俺は母さんと一緒に山賊退治に行くことになつた。マジで嫌だ…

2話 誕生そして成長（後書き）

感想お待ちしています！

3話 退治やして…（前書き）

更新です！

はいやつて来ました山賊と思われるアジトに…スゲー嫌なんだけど…家でただ鍛えたり勉強するだけでいいよ…ここ最近は母さんと鍛えてばつかだつたし父さんがスッゲー寂しそうにしてたもん。てか初めて村から出たし。

「今日は取り合えず和喜は見てるだけで良いからね。今世の中がどんな状況かを見てもらいたいから…」

そういつた母さんの顔はかなり寂しそうだった。これはいくら山賊でも今から同じ人間を退治するという辛さからの表情なのか俺には分からなかつた。

そういつて母さんは俺を安全そつな木の上えと登り登り良く見てるよう言ひ残し山賊のアジトに単身で入つて行つた。

母さんは山賊を広い所に誘いだし、俺が見る事が出来る所まで來ると山賊と対峙した。

「おいおいー女一人で俺達を退治するだつて?言つとくが俺達は簡単にはやられないぜ?行け!野郎共この女にたつぱりと俺達の恐ろしさを思い知らせてやるぜ!」

山賊の頭がそつまうと部下の奴らが母さんに向かって行つた。
死亡フラグをポコポコ立て…

「周囲の民を脅かす山賊共よ…私が成敗してやるわ。これ參る…」

そつ言い山賊の集団に突っ込んでいった。

そこからは一方的だつた。母さんは山賊達をそつまうつまに血祭りにしていった。目の前で起じる人が人を殺す状況。

母さんが武器を振れば首が飛び、突けば身体に穴が空く。

いくらこの山賊達が今までどれほどの人達の命を奪つて來たかは知らないが、争い事があまり起きない平和な世界から來た俺にはかなり刺激が強いもので、吐き気が込み上げてくる。

目を離そつとしても何故か母さんの戦いに見入つてしまひ。まるで舞つているかのようだつた。

そしてあつという間に山賊の集団は屍の山とかしていた。やべーよ
…母さんマジでパネエッス…怖えよ。

そして前から気になつてたんですけどね?母さんがずつと使つている武器なんですか?何で…何で…

日本刀使つてんだよおおおおおおおおおおおおおおおお…!
明かに時代が違ひ過ぎるだろーがよ!日本刀が出てくるのは確か1000年位後のはずだろ?母さんは何処で手に入れたんだよ?

ついそんな事を思つてしまつた為、山賊の屍の事なんて頭から抜けてしまつた。

「和喜むつこいわよ。出でひつしゃー。」

母さんの声と共に俺は木の上から降り、母さんの武器ひとつこて聞く
ことにした。

「母さん前から聞いたと思つてたんだけどその剣は何処で手に入れ
たの?」

「マジで気になります。その日本刀、かなりかつてこし…ぶつかけ
け欲しい…くれないかなあの日本刀。」

「あら?」の刀の事?これはね。お父さんのお兄さんのお師匠さん
から貰つた物なのよ。何か海を渡つた島にある國の武器?りしひわよ。」

「間違いないやつぱり日本からの物だ。でも時間軸がおかしくれる…
なんだよこの世界は…」

「それよつも、山賊退治はびつ思つた?」

母さんが急に真剣な顔になつて聞いて來たので自然に俺も真剣にな
る。

「どう?」と言われてもまだ俺には何故退治しないといけないのか
つて思つよ…同じ人間なんだから話し合いでもいいんじゃないかつ
て思つよ…。」

甘い考えだつていう事も解る、奇麗事だつてのも理解している。争
い事が無い世界の田線でしかまだ物を見れないから言える言葉であ

るつて事も解つていいから」何せそんな事が言えるのだ。

「ふふつ。和喜は優しいのね。母さんはその考えは嫌いじゃないわよ。人が死なない事は良いことなのよ。でもね…こんな世の中だからこそ和喜の考えを捨てなければいけない時もあるの。覚えていてさよつだい。」

母さんは俺の頭を撫でながら呟つた。家に帰り俺は、今日の出来事を思い返してみた。

母さんは見ていなさいと言つた。これはいつか俺も賊退治をする時が来るということなのだろう。その時俺は、本当に人を殺す事が出来るのだろうか？出来るわけねーだろ！絶対無理！いくら母さんより強いといつても模擬戦だしね。それとこれは全く別物なのさ！もつ考えるの面倒だし寝るかな。平和が一番。

そう思いながら俺は眠りについた。

それから10日ほど経つた時、母さんから肉が食べたいと言われ、俺は熊狩りに来ていた。昔は母さんと来ていたが最近は一人で良く来ている。

今日もなかなか良型な熊を捕まえて上機嫌で帰宅している。熊を担いで村を田指してると、前方から砂塵を上げて向かってくる。

何かと思い、とりあえず木の上に登り様子を見る事にした。木の上から向かって来る者達を良く見るとどうやら賊の方々のよう

で、何やらスッキリとした顔をしていた。

「このまま通過して行くと思いきや、あろうことか、賊の方々は俺が隠れている木の近くで立ち止まり、休憩を始めたのだった。
俺…降りられないじやん…と思ひながら取り合えずそのままやり過ごす事にした。

「へへへッアーキー もつき襲つた村はなかなか良い女がいやしたね！」

「何？コイツ等村を襲つて来ただと？しかもレ〇ブもしてきた？何たる外道…

「ちよつと待てよっ」 いつ等が来た道は確か…俺の村がある所じやないのか？

「まあな！あの女にはこの前の借りがたつぷりとあつたからな。村の者を人質にとればこいつちの物だ。可愛い声で鳴きやがつて。」

「今の言葉で俺は確信した。間違いない。俺の村だ！」

俺は急いで村に向かつた。

村に着いてみるとそれは悲惨な物だった。家は壊され、作物も燃やされ、村人は血を流して倒れている。女人にいつたつては、誰ひとりと服を脱がされた状態だった。

俺は吐きそうになりながらも自分の家を目指した。

やはり俺の家も跡形も無く壊されていた。家のすぐ側に倒れている人がいた。見たくない光景が頭を過ぎる。そこにいたのは血まみれで倒れている俺の両親だった。母さんも服を脱がされていた。

「父さん…母さん…」

俺は一人に呼び掛けた。父さんはすでに息が無くなっていた。怒りが込み上げて来る。

「う…和喜な…の?…良かつた…お前は…無事だ…たのね…」

母さんはかういじて息があつたが、かなり顔色が悪い。

「うの…前の…山賊が…この村に…襲つて来て…見ての通り…男は…殺され…女は…犯された…わ…抵抗…したのだけど…人質を…取られて…何も…出来なかつたわ…」

母さんは瀕死の状態から俺にこの惨劇を教えてくれている。俺の身体の奥から込み上げて来る物が大きくなる。

「あなたに…これ…を…渡す…わ…」

そう言つて、渡された物はいつも使つてゐる母さんの刀だった。

「何言つてゐるんだよ母さん…今から治療すれば絶対に助かるよ…」

本当は分かつてゐる。母さんも命の灯が消えかかっている事に…でも認めたくなかった…いなくなるなんて考えた事もなかつた両親。それがいきなり無くなつてしまつ。

「ふふ…ありがとう…母さん…もつ…ダメみたい…もし…都に行く…よつだつたら…お父さんの…お兄さんに…伝えといて…最後に…和喜…愛してゐるわ…」

そう言つて、俺の頬を撫でていた母さんの手が地面に落[下]した。

ブツチソッ！

俺の中で何かが切れた。

「うおおおおおつーあーいつら絶対に許さねえーー！」

俺はそう叫び、母さんをゆっくりと寝かせ、刀を握り締め、さつきの道を戻った。

3話 退治やしない…（後書き）

感想お待ちしています！

4話 復讐の修羅 旅立ち（前書き）

更新です。

4話 復讐の修羅 旅立ち

許せねえ……許せねえ……村の旨を……何よりも俺の大切な両親を……ここまで怒りが溢れるのは初めてだ……。

「ロシテヤル ロシテヤル

奴らが行つた方向はこっちで間違いないはず。さつきは此処で奴らを見たんだ、このまま真っ直ぐ行つてみよう……

今に見てろよ……血祭りに上げてやんよ！

しばらくすると集落らしき所が見えてきた。ここに間違いない。そここにいる見張りを見たことがあるな。

俺は首も無く後ろから忍び寄り、見張りを始末した。不思議だな……初めて人を殺めたというのに何故か落ち着いている。おかしい位に冷静な俺はそのまま集落に入つて行つた。

奴らは何処だ？何処にいる？集落の中を歩いてこくづかこ、奥の方に大きな建物がある事に気付いた。

見張りが多いな……もう後戻りは出来ないんだ。正面から行こう。

俺は堂々と建物に近づいた。

「何だ？テメーは？ここはお前みたいなガキが来るとこりじゃねーぞ！早く帰つて母ちゃんの【ザクッ】グハ！？」

建物の見張りを切り捨てた。このゲスが…

「何が母ちゃんだ？あああ？その母ちゃんはテメー等に殺されたんだぞ！」

俺はそう言いながら死体を入り口に蹴り込んだ。

さあ殺戮ショーの始まりだ！

（賊Side）

「へつへつへ。あの女から受けた屈辱はたっぷりと返してやつたぜ！それにしてもあの女は良い身体してやがったなあ。」

「そうですぜ！お頭。あの村の女達は粒ぞろいでしたからねえ！全く殺すのが勿体ない位でしたぜ！」

そう盛り上がりながら酒を煽つていく山賊達。彼等は村を襲い、男を殺し、女を犯し、その後に殺すというまさに外道という言葉が相応しい事をしていた。

「オマケに沢山金品を溜め込んでたからなあ！テメー等、今日は好きだけ飲め！俺が許す！」

頭がそういう、手下達は次々と酒を胃に流し込む。

「あああ？」

突如外から聞こえてくる叫び声、中にいる賊にも聞こえていたようだった。

「何か外が騒がしいな… ちょっと見てこいー。」

頭が戸の近くにいた仲間に指示をだす。手下が立とうとしたその時。

ズガアーン！

勢いよく破られる戸。破られた戸に張り付いていたのは、見張りに付けていた仲間だった。一体何事かと武器を持ちいつでも襲えるようしている。

そこから現れたのはまだ若い少年だった。普通ならば賊達は大笑いするのだが、今は笑う者など一人もいなかつたのだ。

血の付いた刀を持ち、体に返り血を浴びながら、うつすらと笑みを浮かべながら歩いてくる少年に誰もが恐怖したのだった。

少年を見た瞬間、賊の者達はまつ先に思つたであろう。

『田を離したら確実に殺される』と。

（Side ends）

（和喜）

俺は斬り殺した賊を蹴り飛ばし、戸を破り中に入った。中では100人位の賊がいた。

みい～つけた…村の仇、家族の仇。始末してやる…

ここにいる賊共は生きる価値はない。

「小僧…これはお前の仕業か？」

賊の頭らしい奴が聞いてくる。

「だから何だ？俺はさつきお前等が襲つた村の生き残りだって言つたら分かるか？」

「へつ！だから復讐に來たつて言つのか？笑わせてくれるなあ！ガキ一人で何ができる？」

頭が笑いながら言つている。それに釣られて手下も笑い出す。何から今まで不快だ。

「お前達に問いたい。何故村を襲う?」

「何故かって?人を殺すのが面白いからだよー。」

この一言で俺は更に怒りが込み上げてきた。

こいつらは人の皮を被つたなにがだ!..

「話は終わりか?ならお前もさっきの村の連中の所に送つてやるぜ!」

頭のその声と共に、手下達が武器を取る。俺が言つのは難だが、一人相手に多人数とは大人気ない。

「一瞬で片付けてやるからな!掛け野郎共!..」

頭の怒声と共に、向かつてくる賊達。

「上等だコラアー!村人の怨みを受けやがれ!」

俺も向かつてくる賊に向かつていく。

母さん……俺に力を貸してくれ……

刀を振るう。一度振れば首が飛び、また振れば血が飛び交う。俺の一方的な殺戮だった。

「ひいい……化け物があつに、逃げ、げふう」

逃げようとする者も一切の容赦無しに殺していく。

手下は始末した。残すは頭だけになった。

俺はゆっくりとそいつに近付いて行つた。頭は既に戦意喪失したのか、後ずさりしている。

「お、お願ひだ…もう山賊は辞める。誰も殺さない…命だけは助けてくれ…」

「うとう命乞いを始めやがつた。見にくい姿だ…

「お前…今までそう言つてきた人達をどうしたんだ?自分だけ助かろうと思つた馬鹿が…じゃあな!」

そう言つて俺は賊の頭を切り裂いた。

これで終わつた…

本当にこれで良かつたのか?俺は今復讐^レに捕われて人を殺して行つた…正気に戻つて見た賊達の屍。急に出て来た罪悪感、どつちにしたつて俺は人を殺したんだ…母さん…俺はどうすればいい?

『ならその命を背負いなさい。これからは貴方がその人達の分を生きて行きなさい。』

母さんの声が聞こえたような気がした。俺は急いで村に帰つた。

村に戻り、俺はいち早く両親の所に向かつた。

動かない両親に近付いて俺は決めたことを報告した。

「父さん、母さん、俺決めたよ…こんな世の中を変えたい…世の中を見て回りたい！」

俺がそう言つと一人とも少し笑つっていたような気がした。

次の日、俺は村人全ての人に墓を作つた。

最後に父さんと母さんを墓に入れた。これで本当にお別れだね…さ
ようなら。

二人とも空で見ていて下さい。それでは行つてきます！

ひつして俺は世の中を見て回り、荒れた世を変えていく旅に出た。

4話 復讐の修羅 旅立ち（後書き）

感想お待ちしています！

5話 こぞ義勇軍（前書き）

投稿します！

いよいよキャラ登場！

旅に出てもう一年位たつた。俺も17歳になり、前世では死んだ歳。
ちょつとトライウマなんだよね。

村を出ての一年で感じたのは、日々に増えていく賊共、それと同時に飢餓や疫病などの被害も多くなつてきている。
聞いていた都の衰退や、地方の大守が私腹を肥やす為に搾り取られる税金などが主な原因だろう。腐つてんな…

いくら世界を変えたいと言つても一人では限界がある…。ここは何処かの軍に入つて行くしかねーのかな?
でも余り田を付けられたくないしなあ。

ここは前世でも有名な劉備、孫策、操曹かな…ども顔知らないし、前世では一度もプレーせずに死んじゃったから内容もわからんないし。

そういえば最近変な噂を聞くよつになつた。

どうやら天の御使いがうんたらかんたらで乱世を静めるとか?しか
も近くに流星が落ちたらしい。

だから何?俺には関係ないしなあ…そんなこんなを考えているつい
に、俺は幽洲に入つて行つた。

幽洲に入つて感じた事は、ここの大守は無能なんかじゃないとい
ふことが分かつた。

取り合えずその辺にいた人に話を聞いてみた。

ここを納めているのは公孫贊という人物だった。やはり今まで見た大守の中で一番国として機能している。もっと様子を見て行こうかな。

でもその前に飯でも食べるか。

腹ごしらえのために入った飯店。取り合えず色々注文する。ちなみに金には困つてないぞ？それなりに持つてるから。

俺が飯を食べていると、向の机に女3人と男一人が腰をかけた。

あの女達どうかで見たことあんだけやなあ…思い出せない…それよりも男だ！こつちは男の一人旅だつてのにそつちはハーレムですか？前世でもここでもモテない俺はいつたい何なんだよ？凹むぞ？

「とりあえず此処まで来ただけどこれからどうするの？」

男が何か言つていたので少し耳を傾ける。何かすつごい氣になるし。

「えへつと…取り合えず何処かの軍に入つて行けばいいんじやないかな？」

ピンクの髪をした女が言つている。俺と同じ考え方じゃないか。

「でもいきなり俺達見たいな奴らが、軍に入れて下さいつて言つても入れてくれるのかな？」

男がもつともな意見を言つている。確かにそうだな。と、一人で納得する俺。

「その点は大丈夫でしょう。此処を納めている、公孫贊と言つ者が

兵を欲しがつてゐるといひの女将に聞きましたので。」

次はサイドポーーの女が言つた。うわ…気が強そ。それよりも良いこと聞いたぞ。大守が兵を募集してゐるのか。これはチャンスじゃね?

「ならそこへ言つて鈴々達を雇つてもいいのだー。」

元気いっぴいの女の子が言つてゐる。いい子だ。おいらやんがアメリカをあげよう。まあこれは冗談だとして、書は急げだ!俺はすぐに勘定を済ませて、店を出た。

兵に志願するとしても一般公募はまとめてするはずだしな。その時はさつきの連中と会うだろ。と、思いながら道を歩いていると、何やら人だかりが出来ていた。俺もそこに行き、どんな事が書いてあるか見てみた。

えーと何なに?

「賊の討伐にあたり、義勇兵募集かあ。」

誰が募集してんだ?おーー今噂の公孫贊じゃないかー。これはラッキー!

何たるタイミング!俺運が良いんじゃね?と、はしゃいでいる連中を突かれた。

「兄ちゃん字が読めるのかい?ちょっと代わりに読んでくれねえか?俺、字が読めねえからよ。」

と後ろにいた男から言われたので、その辺にいる人もお願いします的な顔をしてたから、皆に聞こえるように読んでもらった。

すると皆は志願するぞ！と凄い気合いを入れていた。若干引いてしまつた自分がいるが、この人達も自分の力で腐つた世の中を変えたいと思つてゐるのかと思つと良い気分になつた。

そして数日がたち、公孫贊が、兵を募集に指定した日になつた。勿論俺も参加している。

受付を終えて、俺はこの前見た女達を探した。居るはずと思い探ししても何処にもいない。結局来なかつたのかと思ひながら、整列するようにと言われて並んでいた。

しばらくすると、城門の上に将軍らしき人が出て來た。

「我が名は公孫贊！今日は集まつてもうつた皆に感謝するー・今からお前達を指揮する將軍を紹介する！」

あの人公孫贊か…何か地味だな。

と思つてゐると、他の將軍が出て來た。

俺は目を疑つた。

出て來たのは、この前飯店で向かいの席にいた女だつた。

えつ？いつの間に將軍になつてんの？この前はそこに兵として雇つて貰おうとか言つてなかつたけ？

「我が名は關羽！皆のもの！我等を脅かす賊共をこのまま野放しにして良いのか？我等は立ち上がり、賊共を成敗するのだ！」

關羽の声と共に、どんどん上がつていく志氣。えらいじつちや。

「そして我々には頼もしい味方がいる！我々には天の御使いが付いている！」の戦も必ず勝ちに導いてくれるであろう！」

【つねおおおおつーー】

天にも届かぬうなほどの声、うめき声ーー！

しかし俺はこの演説を余り聞いていなかつた。理由は、俺の正面の城門に立っている水色の女がずっと俺を見てるんだもの……怖ええ。俺……何か口をつけられるような事したのかな？と思ひながら俺は義勇兵となつた。

5話 こぞ義勇軍（後書き）

感想お待ちしています！

6 話 いつも趙雲隊副将李鑑ですか。（記書せ）

投稿！

6話 ひつも趙雲隊副将李讎です。

城門の前で集まり、直ぐに出陣。

おいおい…いきなり戦とかヤバいでしょ？戦とかしたこと無い人が沢山いるし…でもこいつ等の顔を見るとそんな事もどうでも良くな。兵達の顔は怯えとかは一切無い。これ程まで賊を退治したいと、いう気持ちが伝わってくる。

俺は趙雲将軍の隊に入った。武器のほうも、支給された弓を使う事にした。配られている時に、腰の得物は使わないのかと聞かれたが、母の形見だから使いたくないと適当な事を言つたら、そうか。といつて行つてしまつた。

ここに暴れて目を付けられたくないないしな。公孫贊の所では、あまり使えたくないしな。

地味だし。取り合えず劉備の人柄を見てみたいし、ここに俺を見抜ける人物がいたら良いと思うが、趙雲将軍がなんか感付いているっぽいんだよな。

そんな事を思つていると、前方が騒がしい。一体何があつたのかと気になつていてが直ぐに収まつた。てっきりもう賊との交戦が始まつたんじゃないかと思う位だつた。本当に何なんだよ…前方の兵が羨ましいです。

そんなこんなで賊を迎撃つ場所に到着した。

ここは昔、川があつたらしく、それが干上がつて出来た谷らしい。ここで賊を打つという作戦だ。

関羽の隊が囮になつて、張飛の隊と挟み撃ちにして、趙雲将軍の隊

が「」の雨を降らせて終了という作戦らしい。作戦を指揮している人は帽子を被つた二人の小さい女の子だった。
何時から居たの?」の2人?

そんな事より、そろそろ関羽の囮部隊が帰つて来るはずなんだが……

「趙雲様!囮に出ていた関羽様が多くの賊を引き連れて帰つてまいりました!」

様子を見に行つた兵が趙雲将軍に伝えて來た。

おっ!來た來た。砂塵を上げながら関羽達が帰つて來た。しつかりと賊を連れて來ている。

うつわあ……賊の奴らめつさキレてんじゃん。なにしたんだ?あいつ……
そろそろいいんじゃね?賊ももつすぐ細くなつてきている所に來たし。

「全員弓を構えろ!十分に引きつけて…………放てえ!」

趙雲将軍の声と共に、放たれた矢。次々と刺さり倒れて行く。混乱した賊は、戻りうと反転するが、詰まつて動けない。

言いてえ、マジで言いたい。今の状況にうつてつけのあの有名な言葉がある。言つていいか?言つぞこのヤロー――

「フハハハハツ!見ろ!まるで人がゴミのよつだ!」

言つてやつた…言つてしまつた。すっげえ気持ち良い何か夢が叶つたつて感じだ。

「ヤこの者…ちょっといいか？」

ん？突如、趙雲将軍から呼ばれた俺。何なんだ？

「なんでしょ、う？」

「今からお主を副将に任命する。私は今から下に行き、賊共を始末してくる。ここに指揮は任せたぞ！」

そう言つて趙雲将軍は降りて行つてしまつた。

え？ちよつとここの人何言つてんの？血口の中すきだろー。俺ここに任せるとか！

かと言つてもここではすること無いしな。見学でいいだろ。

「討ち方止め！後は下の者に任せろ！」

俺がそつと叫びながら一斉に止めた。ちょっと気持ち良かつたのは秘密だ。

下を見てみると、次々と賊が打ち取られて行く。

おおつ！将軍暴れりますなあ！良い暴れっぷりで。

そろそろ終わるな。

こつして俺達の初陣は勝利で飾る事が出来た。被害も最小限で済んだ。

良かつた良かつた。公孫贊の城に帰り、俺達兵士は兵用の宿舎で身体を休めている。

と言いつつも今日は勝利の宴の真っ最中。無礼講じやーーでも俺は飲んでないよ。

未成年だもん。

食べるだけでテンションがハイな俺はめつきはしゃいだ。

「おい李讎。趙雲様が呼んでるぞ。」

何だよ？人がせっかく食べてんのに呼んだ奴は。食い物の恨みは恐ろしいという言葉を知らんのか？

「何だ。兵士Aか。ビリじた？」

名前とかどうでもいい。だつて覚えて無いもん。覚える氣ないし。

「兵士Aって…俺にはちやんと珍り」はいストップーこれ以上言つなお前の名前は卑猥だ。で？何だつて？

あつぶねーこいつの名前は悪影響だつたて事忘れてた。

「うーん…まあいいや。趙雲様がお前の事を呼んでいたからな。ただそれだけだ。」

なんと将軍が、一体何だ？俺何かしでかしたのか？

「断る！…つてのは冗談でありがと。行つて来る。」

そう言つて俺は外で待つ将軍の元へ行った。無論俺の愛刀を持つて。

宿舎の外に行くと、将軍もまた、武器を持って待っていた。

「これはこれは趙雲將軍、武器を持って只の一兵士に過ぎない自分に何の御用で？」

「社交辞令つてやつ？本心は大体解つていい。

「ふふう。お主にやう呼ばれるのは光榮ですが、武器を持った一兵士の李翻殿。」

「何を言つておられるので？これは母の形見だと言つたではないですか。それよりも宴はいいので？」

「あ、どう出る？将軍。

「なに。酒が入つてしまえば今から始まる宴が出来ないではないか。だからお主も飲まなかつたのであるうへ、李翻殿。」

やつぱりの入面白い。一目で見抜く洞察力いいねえ。

「ならこの辺りで宴を始めますか？」

と言つて、俺は刀を抜き構える。それと同時に将軍も構えた。

「つむ。今宵は良い宴になりそうだ。それよりもお主はその腰の物は形見だと言つておつたではないか？」

「な～に。あなたはこれを抜かせるに値するって事ですよ。」

「やべえ。早く戦いたい。俺の武人としての血が騒ぐ。」

「ふふつ。光栄だな。では参るー！」

そう言い将軍が向かってき、槍で突いてきた。なかなかのスピードじゃないか。だが甘い！

俺はそれを刀で流し、斬りかかる。将軍もそれを読んだのか体勢を低くして避ける。悪くない。

そして互いに攻撃のスピードを速くしている。しばらく討ちあいが続いていたが、将軍のスピードが落ちて来た。ここだな。俺は少し力を入れて、将軍の槍を打ち落とす。

「勝負ありですね。」

俺の刀が将軍の喉元に向いている。

「そのようだ。ある程度は行けるとゆっておったがここまで差があるとは。」

「恐縮です。それよりも俺の事をどこからお見抜きで？。」

一応聞いておこいつ。まあ解つているが。

「なあに。あの城門でお主を見ていた時から解つていたぞ。だからこそ副将を任せたのだ」「

さこですか。やつは最初っからかあ～。この人の下に付いて正解だ

つたな。

「では李翻殿、私の軍に入つたものも何かの縁、私の真名を受け取つてもらいたい。我が真名は星と申す。そして私にはそのような口調は止めないか？」

「え？ マジで真名預けんの？ 将軍が良いのか？ まあ本人が言つてんだし良いか。しかもタメ口OKとか。いいの？」

「ありがとうございます。では俺の真名も受け取つてください。我が真名は和壽。趙雲隊の副将としてあなたに仕えましょ。」

「こりして俺は正式に趙雲隊の副将として仕えることになったが、さつきから星が腕を絡めて来ている。ちょっとおおー…柔らかいものがめつを当たつてますつて！」

「やつれき敬語は止めるよつたのであるつー。もつ並れたのか？」

「いやいや、一応形式だからね。てゆーか何で腕絡めんのか？」

マジ理性限界つす！俺の中の俺が田覓めそうだ。

「惚れた男にくつ付いてはいけないと和壽は言つのか？」

今何て言つた？ほ、惚れただと？トドメ刺さないでください…俺のライフはゼロになりました…俺幸せです！

「冗談はいって。こんな俺の何処に惚れる要素があるのさ？」

絶対からかつてるだけだろ。これはかなりショックだぞ！

「一田惚れつてやつだが。和喜は私が惚れるのはいけないのか？」
星さんそんな目で見ないで。俺もあなたに惚れそうです。すっげー
心臓バクバク言つてんだけど。どうする俺！

「全然歓迎ですっ！！！」

やつちまつたああ一本音出でしもつた。穴があつたら入りてえ！！。

「では私の部屋に行くとするか。」

「え？ ちよつと伺するんですか？」

期待するよ？俺！

「決まつていいるであらう。男と女の嗜みだが。」

俺：男になつてきます。そして俺は星の部屋で大人の階段を昇つた。

翌朝、起きた時の星はめちゃくちゃ可愛かつた。

6 話 もちも趙雲隊副将李鑑であ。 (後書き)

感想お待ちしております！

7話 黃巾党撲滅運動（前書き）

更新です！

初陣からの義勇軍と公孫賛の軍は、凄まじい勢いで勝利を納めていた。特に、関羽、張飛、そして俺の星こと趙雲は、かなり有名になっていた。

俺はといふと、副将らしくなるべく目立たないようにしていた。ここで目立つてしまつたら、大事なマイバーの星と離れてしまつではないか。

今日も攻めてきた賊を退治した所だ。最近何気に気になつていていたが、賊達は体の何処かに黄色い布を巻いていいる事に気付いた。

何だつたけ？これ？

時間が経つと中国史も忘れてしまつではないか…

マジで何だろ…

思い出した！たしか黄巾党つて言つやつじやないか。確か大規模なデモ集団の超過激派か何かだつたね。でも鳥合の衆だから手応えないけど。万単位で来られたら厳しいかな。

最近は黄巾を巻いた人ばかりしかウロウロしてないしね。流行してんのかな？奴らは口々に何か歌いながら進軍してくるし。宗教団体的な感じだよ…気持ち悪い。

数日がたち、俺達兵士は城門に集められた。

「都より、黄巾党の討伐令が下つた。これより黄巾党を退治すべく出陣する。」

公孫賛の号令と共に、鳴り響く兵士の声、士気は十分に上がっている。それにしても毎回ウルセーーいつか鼓膜破れるぞ？ 気合入り過ぎるのもどうかと思つぞ？

「では出陣！」

公孫賛の声と共に、俺達は黄巾党を滅ぼしに出発した。ちなみに俺は、趙雲隊の全員に正式な副将として認められている。俺が「今日から副将だからヨロシク」って言つたら皆から「え？ 今更何言つてんの？ 知つてるよー」的な目で見てたからな…。

しかも星との一戦を何気に見ていたらしくから誰ひとりとして文句を言つ奴はいなかつた。そこから俺に弟子入りしたいと言つ奴が何人か出て來た。

更にそいつらは俺が個別に鍛え上げたいと思っていた奴らだつたら星に許可を得て、俺の直下の部下、暗躍専門の特殊部隊 忍5（ファイブ）を組織した。無論、劉備や御使い、その他の武将には秘密にしている。知られたらまずいじゃん？

「李翻様。」

その声と共に、現れた忍者ルックが現れた。

おつー様子を見に行かせた忍5の一人が帰ってきたな。忍者ルックなのはするなら形からでしょ？ という俺の考えだ。

「どうだつた？」

部下にこの先には何があるのか聞いてみた。

「はつ。この先5里ほど先に行くと、約5千の黄巾党が陣を張っています。この軍では何も問題無いかと…」

確かにその位だつたら心配無いな。この事は公孫賛か御使いの近郊があいつ等に知らせるだろ。

「それよりも気になる事が一つ。」

なんですか？まだ何かあるの？

「その陣を張つている黄巾党の西側に約4万ほどの黄巾党がいました。しかも何者かが交戦中の事。」

ほう…单騎で4万と向き合つなんて凄いな！是非ともお田に掛かりたいね。

こつちは星達に任せておけばカタがつくだろ。三国志で多対一で戦えるのはあいつしかいないだろつ。

人中に呂布ありと言われた、飛将軍 呂奉先。
その無双ぶりを生でみてえ。
その前に星に許可貰わんとな…

「趙雲將軍。俺、ちょっと単独していいか？」

結構砕けて話しているが、仕事とプライベートはキッチリと分けている。

出陣の時は普通の名、何もない時は真名で呼んでいる。この事は星も承諾済みだ。

「なぜだ？副将という者が単独とは…」

ですよねー。将軍の反応は間違つてないです。ハイ。

「いやいやちよつと氣になる事があつて…俺の部下がこの先に5千の黄巾党がいるって言つてるからどんな物か見ときたくつてな。」

「何?この先にいるだと?これは氣を引き締めないといけないな。」

分かつた。ならば李翻は先に行き、確かめてくれ。」

星さんあざーす!俺がそこに行かないと分かつて行かせてくれるる
なんて、好きだぜコノヤロー!

「では行つてくる。」

そう言つて俺はただ一人軍から抜けて行つた。4万の黄巾党の元へ。

森を抜けて行くと、徐々に黄巾党の死体が増えてきた。近いな。そろそろ木の上から行くかな。そう思い、木の上へと行くと、すぐに黄巾党の大群が見えてきた。おーやつてるやつてる…マジで一人で戦つてんじゃん!

そこで無双ヨロシクしてたのは、紅い髪に背中に入れ墨がある女だつた。

彼女が一振りすれば、人が飛ぶわ飛ぶわでなんかシユールな感じ…

でもそろそろ体力的にキツくないか?結構肩で息してるし。加勢に行くかな。

取り合えず後ろから無差別に黄巾党の奴らを斬つていぐ。後ろからは卑怯だつて?シラネ!あの女の助太刀優先だい!

見えてきた、見えてきた!ん?俺に気付いたみたいだな。彼女の目

は俺を見ているのに、黄巾党を斬る事は一切止めない。貴女の武力はオート機能ですか？でも危ないよー死体だけで足場悪いんだからさ。

そう思つていた矢先に、女は死体を踏んでしまい、体勢が崩れる。これはマズイ！俺は急いで女の周辺の黄巾党を一掃して女に駆け寄つた。

「あつぶねー！俺を見てないでちゃんと足元見てなきゃいけないでしょ？」

そう言つて俺は女を支えた。

「…………」

え？無視ですか？それはちょっと傷付きますよ……俺のガラスのハートは木つ端みじんです。

「…………お前いいやつ。あいつらの仲間じゃない。」

え？何？この小動物的な女子は？さつきまでの無双つぶりの雰囲気が無くなってるんですが。本当にさつきまでの女なの？

「ああ。そうだ。あなたの助太刀に来た。」

「…………ありがとう。恋一人じゃ少しきつかつた。」

やべえ……お持ち帰りしていいかな？でもそしたら星に怒られるな……

それ以前に明らかに武将だから問題がめつさ出て来るし。

「よしーなら自己紹介は後だ！取り合えず俺の背中は任せたぞ！」

「…………恋の背中もお前に預ける。」

よし。準備は整った。それまで待つてくれた黄巾党の3万ちょいの皆さんありがとう！そしてさようなら。ついでに言ってみたい台詞もあるし！

「行くぞ！レッツ・パーティー！！」

その言葉と共に一人は黄巾党に突っ込んで言った。

斬る！斬る！とにかく斬つていいく。某無双ゲームでこんな大群に良く向かつていつてたな。その時はどれだけ連続で斬つていいくのを切らさないかを試してたな…それを今はリアルでやつてんもんな。あれはゲームだから気持ちいい物で、リアルだとすんげえ気持ち悪いでいうか吐きそうです。だつてあれは斬つたら消えていくけどもこつちはその辺に転がってるんだもん…向かつて来る敵を足場を気にしながら戦わないとだから余計に疲れる。

それにしてもこの娘やるねえ！是非ともサシで戦つてみたいね！

一人で共闘しているうちに、いつの間にか3万ちょいいた黄巾党は全滅していた。この死体どうするよ…

「ふ~何とか片付いたな！」

俺は石に座つて休憩していた。あの娘は何故か俺の膝の上に座つている。これを星に見られたら確実に殺されるな…ここにいなくて本当に良かった。

そういえばあの娘の名前聞いてなかつた。まあ予想はつくけど。でも、そろそろここからトンズラしたほうがいいな…星達も気にならが、こっちに向かつて来る軍が気になるし…

俺は田を凝らして軍の旗を見た。そこに書いてあるのは『曹』の文字。霸王の登場ですね。

「なあー！そろそろお前さんは帰ったがいいんじゃないか？向こうから誰か来てるみたいだし。」

俺がそう言つと、女は膝の上から降りた。ちょっと寂しくなつた。

「やつする……恋の名前は呂布 奉先。お前かなり強い。恋はお前とも戦いたい。」

やつぱり呂布でしたかー。分かつてたけどもこのギャップがたまんないです。

「俺は李讎 岳臺だ。俺もお前と戦いたい。また会おう。」

俺の名前を聞いた呂布は頷いて森の中へ姿を消した。黄巾党のまつたのは片付いたし後はこっちに来ている人達の相手でもしますかな。

そう思い俺はこっちに向かつて来ている軍を待つことにした。

7話 黄巾党撲滅運動（後書き）

呂布が出て来ましたがこんな感じでいいでしょうか？
次はあの霸王さんが登場です！

春蘭のファンの皆さんすみません！

ではじめ...

近付いて来る軍を待つこと約5分ようやく来た『曹』の文字。俺はそのまま石に座つてゐる。

「この死体の山を作つたのはアナタなの？」

金髪クルクルが話しつけてきた。『曹』の文字だから曹操に違いないと思つた。

「やつだけどアンタ誰？」

やつぱり『曹』の出方だ。

「あ、貴様へ！華琳様になんて口を聞いているー。」

アホ毛が田立つ黒髪の『テ』女が突つ掛かってきた。暑苦しい『ゼ』ノヤロー。第一印象は嫌いな分類だ。

「何でテメーが出てくんだよ？今はコイシと話してんだよーすつこんでひー！」

黒髪の女に親指で金髪クルクルを指しながら冷たい視線を送つた。

「一度にならずー一度までも華琳様を侮辱するような事を言つとは。許しておけんー！」で呪き斬つてやるー。」

何いきなりキレてんだコイツは？何故？俺を殺そうとしてんの？理不尽にもほどがあんただろー上等だ！売られた喧嘩は買わないとなあー！

「上等だー！」の糞アマ！俺に喧嘩売った事を後悔させてやるよー。」

「いつ言いながら私の辺に転がっていた剣を取る。

「貴様！何故その腰の物を抜かぬ！」

「あん？ テメーには一度良い位だと想つがな！」

頭から湯気が出やうなくらいに真っ赤になつて俺を睨む。
おおつ！ 更にキレたねこのテコ女。

「わつを来いよ」のテコー。

「私まで侮辱するとは生かしておけん！ その首叩き斬つてやるー。」

そつ言つて俺に向かつて来るテコ娘。なかなか速いじやん。 でも余裕で見切れるぞ。スピードなら星にも及ばない。

間合いを詰めて切り掛かるテコ娘。

ギャキン！

互いの剣がぶつかる。剣圧が中々の重さだな。並の兵なら剣じと真つ一本だな。

「ふんつー！ 私の剣を止めるとは中々やるなー。」

いやいや、余裕ですけど。

「イツ絶対に戦闘狂だよ……しかも単純バカの猪じやん。」

しばらく打ち合つ。まあ一方的に、向こうが攻めて俺が防いでいるんだが。

「どうした？防いでのだけじゃ何も始まらないぞ！打つて来い！」

このデコがあー！人が手加減してやつてるのを気付かんで調子乗つやがつて！格の違いを分からせてやるかな！

「よーし分かった！おいデコー。しつかりとその剣を握つてろよー。」

そう言って俺はちょっと強めの殺気をデコ娘に向けた。殺気を向かれたデコ娘は体を硬直させたがそれでもそこは武人、震える体でも防御の構えを取つた。

ようやくレベルの違いに気付いたみたいだな。恐怖に顔が引き攣つている。

「よしーお前…耐えるよ？」

そう言って俺は剣を振り下ろした。

「ドンー！

圧倒的な俺の力でデコを剣ごと押し潰す。何とか堪えているみたいだが、顔は涙目になつている。

「おいコハー。さつさまでの威勢はどうしたんだ？」

最初の勢いは何処へやら。耐えるのに精一杯になつてゐる。もうち

よつとだな。

「二人とも止めなさい！」

俺が更に力を入れようとした時、金髪クルクルが止めに入った。

「春蘭ももう止めなさい。この男には敵わない事は身をもってわかつたでしょ？そして貴方、私の部下が無礼を働いたわ。私は曹猛徳。貴方の名前を教えて頂戴。」

ようやく話しの最初に戻った。ここまで疲れた。

「俺は李岱臺。」

やつぱり曹操だつたか。コイツから出でる霸氣はスゲーな普通だつたら平伏すだろ？俺は大丈夫だけどな。

「面白いわね。单刀直入に言つわ。李岱と言つたわね。貴方私の物になりなさい！」

わーお！直球ですね。まさかの勧誘だとは…周りの仲間もえつ？みたいな顔してるし…

「だが断るつ…！」

残念。俺は星にゾッコンだからね。今から他の所に行くなんて考えれん！

「あら…どうしてなの？」

曹操も眉間にシワを寄せている。怒っていますね。

「生憎俺には仕えてる者がいるんでね。そいつを裏切るわけにはいかねーのよ。」

「そう…見た所貴方は劉備の軍のようね。さつきまで共闘してたけれど、悪いけどあの娘の所に貴方を置いておくのは宝の持ち腐れよ？私の下に来れば貴方の力を存分に發揮出来ると思つただけれども。」

「それは分かってますとも。でも星は裏切れないの。

「別に俺は劉備に仕てる分けでもねーよ！正直劉備が何処で死のうと俺には関係ないね。俺があの軍にいるのはただ単に、劉備の考えと俺の考えが近かつただけだ。それにあるの軍には俺が護りたいと思つた人がいるからだ！」

「これは本当の事。劉備だろうと今だに見たことがない御使いが何処で死のうが、誰かに殺されようが本当にどうでもいい。ただ星だけは何が何でも守り抜くと誓つている。

「そう…それは残念ね…でも私はまだ諦めないわよ。私は一度欲しいと決めた物は何が何でも手に入れると決めてるのだから。」

「それは物騒なことで、怖い怖い。こういう女は無理だな…

「それは残念だ。なら俺は初めて手に入れる事の出来ない物だな！」

「今のところはね。また会いましょう。春蘭、行くわよ。」

「そう言って曹操の軍は引き上げて行つた

やつと引き上げてくれた…マジで今日はだるかつた…早く帰つて寝たい。でもその前に早く星達と合流しないとな!

「うして俺は星達の元へ帰つた。

最後にあのテコが涙目ながらも睨んで行つたのが少し可憐いと思つたのはヒミツだ

（春蘭）

私はまだ震えていた。あの李翻という男と打ち合つてからだ。最初は私が一方的な攻撃をしていた。これは行けると確信し、相手を挑発した。それがいけなかつた。私が挑発を終わると、かなりの殺気が私を貫いた。尋常ではないほどの濃い殺氣。身体が震えている。どう考へても負ける事しか考えられなくなつていた。気付くと奴はわたしの目の前にいて、剣を振りかざそうとしていた。

私は何とか振り下ろして来る剣を何とか止める事が出来たが、その剣の重さは今まで私が対峙してきた中でも比べる事の出来ない圧倒的な差があつた。手足が震える。身体の底から込み上げる恐怖。剣を持つ手に力が入らなくなつてくる。

申し訳ありません華琳様。どうやら私はここまでのようにです。

「二人とも止めなさい！」

華琳様が止めてくれた。相手の力が緩むのが分かつた。諦めかけて

いた私に、まだ生きているという実感が沸いて来る。全身の力が抜け、その場に座り込む。圧倒的な実力差に全く歯が立たなかつた。【悔しい】今の私はこの気持ちに支配されていた。華琳様と男が話している事も全く耳に入つてこない。どうしたらこの差を埋められる?どうしたら奴に勝つ事ができる?解らない。

華琳様から帰ると言わると私は男を睨みつけ我が陣に帰つた。

8 話 霧Hとの遭遇と戦闘（後編）

感想お待ちしています。

9話 劉備の独立だから？俺は出掛けます。（前書き）

今回から星のキャラが崩れて行きます。

ではじりやー

9話 劉備の独立だから？俺は出掛けます。

曹操達との一悶着も終わり、俺は自軍に戻ったのはいいが、星から「ひびく叱られます。

理由は簡単。俺が曹操に目を付けられたからだ。更に曹操の将を圧倒した事も話してしまい、劉備の耳に入ってしまえば離れてしまうと危惧したらしい。

「全く。お主と話すのは…挑発されたぐらいで頭にきつて。心配したのだぞ！」

星は頬を膨らまし、怒っているがそれも可愛いのではやけてしまう。

「今日は愛紗達に気付かれずに済んだが次は気付かれるかもしけんのだぞ？しばらく単独で行動は控えるのだぞ！わかったか？」

星さんそんなに目を潤ませないでください。

めった抱きしめたくなるから！

「わっかた！何処も行かないから取り合えず泣き止め。」

「クんと頷いて俺の袖を摘んで泣いている星。

一つ一つの行動が激しく可愛いんだって！最初の茶化したような性格の星は何処に行つたんだ？星はこんなに甘えるタイプだったのか！このギャップがまたGood！一人の時にしか見せない顔の星。これが見れるのは俺だけの特権。

公孫贊の城について数日。黄巾党の首謀者の張角は曹操に討たれたといつ。これで黄巾の乱は終わったという訳だ。

後日俺達兵士は城門に集められた。一体何があるんだ?

「我が兵士達よ…よくぞ集まってくれた!」公孫贊が声を張り上げている。マジで何があんの?武装していないから出陣じやないが…

「ここに集まつて貰つたのは一緒に戦つていた我が同士の劉備が徐州の太守になることが決まった!」

へえ~。おめでと。黄巾党の時に何をしたか知らんがいいこいつや。

「三日後に劉備と御使い達はここを発つ事になつていて。そこで我が軍は手向けとして、我が先鋭達を贈る事にした!劉備達と共に歩みたい者は三日後にまたここに集まつてくれ!以上解散!」

ほ~三日後に出来るのか。俺はここにいても所詮は公孫贊。三国志でも有名な劉備に付いて行く方がこの世の為かな。星はどうすんだろ?

その日の夜。

「和喜はどうする?」兵舎を訪ねてきた星に呼ばれ、俺達は近くの石に座つた。

「どうするも何もお前はもう決まつてるんだろ?」

「ふふつ。やつぱり分かつっていたか。このまま公孫贊殿の所にいても意味のない事、ならば劉備殿といた方が自分をもつと上げる事が

出来るであらう。私は劉備殿と共に行く。」

やつぱりか。でも第三の選択として、このまま俺と幸せに暮らすといふ事もちょっとは考えて欲しかったな。

「おや？まさか和喜はどうやらにも付かずに私と暮らすなどと考えていたか？」

星がニヤニヤしながら俺を見ている。何で的確に分かんだよ？エスパーか？

「私は今でも十分幸せだ。和喜がこうして傍にいてくれてる。そして私達は武人なのだ。今はこの乱世を正す事が先決。場所なんて何処でも良いではないか。」

俺は何を迷つてたんだ？今は乱世なんだ。俺は何故ここにいる？腐つた世の中を変えたいと思つたからだろ？星の言つた通りに俺は武人なんだ。

まずはこの世の中から変える。その後に作つても良いじゃんか。

「星ありがとうな。ちょっとの可能性に心がふらつこてたわ！」

星に向かつて笑顔で言つた。星は朱くなり、小さな声で、「その気持ち嬉しかったぞ。」と言つていた。

三日後、決意も決まつた俺は城の城門にいる。集まつたのは約半数位だった。良いのか公孫贊…こんなに集まつてゐるぞ？

【 ここには趙雲隊の面子は全員いた。あの夜の後に隊員に聞くと、

付いて行きます！】の一言だった。ここからの星に対する忠誠心はハンパねえな。と思つた。

「皆のもの聞けえ！」

関羽が出て来て号令をとばす。一緒に出てきた武将達の中にかなりげんなりとした公孫贊がいた。

まあこんだけ兵を取られたんだから仕方ないか。ドンマイ公孫贊。

「ここに集まつて貰つた者は我々と共に行くと決めた者達だ！我々と共にこの乱世を静めようではないか！」

関羽さんは氣合い入つてゐねえ！あの時の店で見かけた時とは大違
い。待てよ？確かにあの時男も一緒だつたな…て事はあれが御使い？
しつかり見ときやよかつた…チラ見だつたけど女しか見てなかつた
よ…

「これより我が主の劉備様と天の御使い様が一言申す！」

なんだ？この宗教的な演説は…まあ御使いが見れるならいいか！

「みんなあーーありがとーーこの世の中を平和にしてみんなで笑顔
になろうねえ！」

劉備らしい演説ありがとうござります。それより御使いだ！

そして出て来た御使いに俺は驚いた。その男が身に纏つている服は光輝き、神々しさが出ている。周りの人間はそう思つだろ？が俺は違つ。

その服見たことある！つてよりもその服はフランチエスカ学院の制服じゃねーかよ！俺の顎は外れるんじゃないかと思う位に口をあんぐりとしていた。

何を隠そう。俺も前世ではフランチエスカ学院に通っていた。まず見間違うわけがない。見た所、あいつの学年ラインは青。俺も青だった。同学年の可能性もあるが、あそこは人がが馬鹿みたいにいる。絡む人も限られるからな…

まずそれ以前に、俺とタメだという可能性があるが、それは低い、俺はここに生まれて17年経っている。つまり奴は俺が死んでから17年の間の生徒の可能性の方が高い。うわあ…マジで話してえ…

驚きが凄かつたから、奴の演説は聞いてなかつた。

出発して約一週間ほどで徐洲に到着した。ここに以前いた太守は、黄巾党の一件で民を捨てて自分だけドロンしたらしい。なんと身勝手な。

引き継ぎ等も終わり、正式に劉備が太守として君臨した。バタバタしていたのも落ち着き、今では幽洲のような活気が出て来ている。俺も落ち着き、以前、母さんが言つていた、父さんの兄さんに会いに都に行こうと思っていた。俺は將軍ではないから、訓練以外の仕事はほとんど無いに等しい。

「なあ星、話しがあるんだがいいか？」

「どうしたのだ？和喜。私は今訓練中だ後に回してほしいのだが？」

俺は兵の訓練を見ていた星に話しかけた。新たに趙雲隊に入隊した人もいて賑やかになつていて。

今から出たいからな…

「忙しいならそのまま聞いてくれ。俺、今から出でいいか？」

カラーンと自分の武器を落とす音と同時に地面に崩れる星。

え？ 何？ 俺何かした？

「和喜は私を置いて何処かに行つてしまつのか…？ 嫌だ！ 私は和喜と一緒にいるんだ！」

ぐすんと泣きながら俺の裾を掴んできた。

あ～もう！ 何で俺を萌えさせる？ しかも今は、一人じゃないぞ！ そんな事していいのか？

新兵は、《何で隊長が部下に泣きついてるの？》って顔だし、俺達を知つてる兵は、《またコイツ等は…》みたいな顔してるし…

「違うぞ！ ひと用位だ。ここも落ち着いたし、前に母さんから聞いた都にいる父さんの兄さんに会いに行つて両親と村の事を報告したいと思つてるんだ。」

「本当なのか？ それならそうと言つてくれれば良い物を…」

星は俺の話を聞くと、スクツと立ち上がりいつもの星に戻つていた。ただ目だけは泣いていた後で、真っ赤だつた。何から今まで可愛いぞ！

「すまん。大事な所が抜けていた。だから行つてきていいいかな？」

「それは大事な事だな… よし…ひと月であろう？都と言えば洛陽か… 道中気を付けて行くが良い。」

「よし…星の許可も出たし、出発するかな。

俺は荷物をまとめ、出発しようとしていたが、見送りに星が来てくれた。

「くれぐれも何かあつても暴れなによつてあるのだぞ…あと向こうの女の誘惑に負けないよつにするのだぞ…」

解つてますがな星さん…おれの心はお前だけだぞ！

「じゃあ行つて来るよ。」

そつと星とキスをして出発した。洛陽か…楽しみだ。

9話 劉備の独立だから？俺は出掛けます。（後書き）

次回はみんな大好きあのヒロインが登場します。

「フフフ。ワタシを呼んだのはあなた達かしらん？」

感想お待ちします！

10話 桃色のト着レジ用心（前書き）

更新しました！

あの方が登場です！

10話 桃色の下着にてじり用心

和喜が洛陽を目指し、荒野を一人旅をしている同時刻のある平地。「一つの流星が落ちた。

「あいたた。全く外史の移動は毎回落下だから地面にたたき付けられちゃつて参つちゃうわ。髪もお鬚も下着も大丈夫かしら？」

「あらり！下着の紐が千切れちゃつてるぢやない！ワタシの恥ずかしい所が表わになつちゃうぢやない。危ない危ない！」

人型に穴の空いた地面から出て来たのは、桃色の下着を身に纏い、頭はもみあげ付近に、おさげを垂らし、あご鬚を蓄えた筋肉が隆々とした男？がいた。

「全くだ。ワシ達だからこそ良いものを並の人間であればひとまりもないぞ。

おつとワシの胸当ても焦げ落ちてるではないか。全く恥ずかしくて敵わんわ！」

もう一つの穴から出て来たのは純白の褲を締め上げて、胸に純白の胸当てをし、立派な口髭を蓄えたこちらも男？がいた。

「こJの外史の時間は黄巾の乱が終わつたくらいね。でも久しぶりねえ…いくら外史と言つても、ワタシ達にとつてはこJは正史なのよねん。久し振りに早く会いたいわあ。それにこJのJ主人様はどこにいるのかしらあ。」

ピンクの下着の男？は、身体をクネらせながら顔を紅く染めて誰かに会いたいらしい。この男？が迫ってきたら誰しも逃げるであろう。

「ふん！ 貂蝉よ！ 前の外史で意中のオノコを物にしたからといって自惚れるではない！ 漢女は日々昇進していくものだ！」

「あらあ？ 何なの卑弥呼。華陀ちゃんから相手にされなかつたからつてワタシに当たらないでちょうだい。」

ピンクの下着の男？は貂蝉といつ名であり、禪の男？は卑弥呼といつ名である。

「何だと？ 良からう。構えろ貂蝉！ その自惚れたお主にもう一度この漢女道を叩きこむとしよう。」

「だから当たらないでちょうどいい！ いいわ。来なさい卑弥呼！ 『主 人様と築いた愛の力を教えてあげるわ！』

こうして二人は己の拳を相手にぶつけ合い始めた。周りから見ると、ほぼ全裸に近い男二人が、こうして殴り合えばかなりカオスな光景である。

「むつ ふう うう ん！」

ズガーン！

「うつ ふう うう ん！」

ドガーン！

変な声を上げながら、辺りの地形を破壊し、打ち合つ二人。互いにヒートアップしていく。

「ムハハハ！見事なり貂蝉よ…やはりあのオノ「」と築きおつた愛の力は絶大だのぉ！」

ガクつと倒れる卑弥呼。この勝敗は貂蝉が勝利したようだ。

「じ」主人様との愛は勝つ！それよりも卑弥呼。早くあの子達に会いに行きましょ。」

本来の目的を思い出した貂蝉は、急いで倒れている卑弥呼を起こす。

「おお！悪いな貂蝉。おまえの愛に感服しておつたわあ！
ん？見よ貂蝉！そこに一人旅をしているオノコがいるぞ…」「
ぬわあああんですつていえー！…じこよ？その良い男は？ワタシの
下半身の探知器はビンビンと反応してないわよん？」

一言一言が卑猥なる言葉に繋がりそうになる貂蝉。

「行くぞ貂蝉！早く行かねばあのオノ「」かへ行つてしまひぞ？

そう言つてその男に目掛け、走つていく漢女の一人。犠牲になる男は一体どうなるのか？彼の後ろは大丈夫なのか…

和喜

俺は今、洛陽に向かつて一人旅をしている。
ん~やつぱ星も連れて来ればよかつたかなあ~
...

それでも父さんの兄さんか…父さんはかなりイケメンだったからな。きっと叔父さんもイケメンだらうな。楽しみだ。

俺がいい気分で歩いていると、遠くから筋肉ダルマが一匹走ってきた。

俺は全力で来る何かを否定した。俺も全力で逃げる。だがいくら走つても逃げる所か、追い付かれてしまつた……

「『あれがこの世でもあの世でも次の転生先でも記憶に残るよ』
な化け物ですってえ！！」

ちょい待ち！こいつ等の耳はどうなつてんだよ？聞き違いにも程があんだろーが！！

「ん、近くで見るとますますいい男ねん。」

ピンクの紐パンをした筋肉ダルマの言葉に俺は思わずケツを隠した。
本能の防衛本能つてやつだ。嫌な奴らに絡まれたなあ……俺はかなり
凹んだ。ヽ貂蝉ヽ

田の前にいる男はかなりのいい男だつたわ。でもおかしいわね…この
んないい男なら、ワタシの探知器がビンビン反応してもおかしくな
いのに、全く反応しないなんて… 一体どうしちゃったのかしら? で
もこの子何か見覚えあるわね。

「お、おい貂蝉…あのオノノの腰に付いている物を見てみろ…」

ちよつと卑弥呼。いくらずっと男日照りが続いてるからつて、服の
下まで見れるよつになるなんて、何て卑しいのよん。

そう思いながら彼の腰を見たのだけれども、ワタシは田を疑つたわ。
彼の腰にあつたのは、見覚えのある刀だつたわ。
何で彼が持つてるのよ。

（和喜）

俺の目の前に来た二匹の筋肉ダルマはジロジロと俺の腰を見ていた。
マジで危なくね?

だが、良く見ると二人は俺の真ん中ではなく、刀を見ていた。

「ねえねえ。アナタ、この刀どこで手に入れたの?」

貂蝉と言つたダルマは俺の刀が気になるようだが、それ以前に気に
なるワードがあつた。貂蝉だつて? 貂蝉と言えば、あの中国史上の
絶世の美女じゃなかつたつけ?

俺はこの事實に酷くショックを受けた。

まあ趙雲こと星も女だつたし……」んな事もあつてゐるな……まあいいや。
それよりこの刀か。

「ああ……これは母から譲り受けた刀だ。俺は訳あつて、父さんの兄
に会いに洛陽へ行く途中なんだ。」

俺がその事を言つと筋肉ダルマの一人の様子が変わつた。どうした
んだ?

「ねえ。ちょっと聞くけどアナタのお母さんってまさかと思ひけど、
茉莉ちゃんって名前かしら?」

なつ? 何故コイツは母さんの真名を知つてゐるんだ? 母さんの真名を
知つてゐるのは家族だけのはず……まさか? いや……俺が認めたくな
い……

「まさかアナタは茉莉ちゃんの息子さんなの?」

「うわあ……嫌なフラグが立つちまた……

「そ、そつだが……」

「ま、まさか……」

「アナタは知らないだろ? けども、ワタシはアナタのお父さんのお
姉さんよん!」

「どう見ても男だろ? が……これが父さんの兄さんだと? イケメンとは
天と地の差だよ……て事は、隣にいる禪は……

「じゃあ貴方が父さんの兄さんの師匠か？」

「がはははは！確かにうぬが持っている刀を鍛え上げたのはワシだ
！」

貴方でしたか…確かに凄いがこんなキモイ奴らじゃ なかつたら良かつたのに…これが俺の親戚だなんて…これは封印すべき事態だな…まあ話す事があるしな。

「俺の名前は李翻ちゃん、」（）で話すのもアレだからワタシの家に行

きましょ。洛陽まであと少しだから歓迎するわよん！」

ははは…大丈夫だよ…な？

俺は貂蝉やその師匠の怪しげな視線に怯えながら貂蝉の家に向かい、洛陽の門を潜つた。

10話 桃色の下着で心配 (後書き)

これで良かったのだろうか… そうです貂蝉とは親戚です！

感想お待ちします！

1-1話 漢文の誘惑（前書き）

眠たさに堪えて投稿。

誤字脱字が多いと思います。
ではどうぞー。

俺は貂蝉の家に招かれ、一息ついているがどうも落ち着かない。理由は簡単。何故か俺は、貂蝉と卑弥呼に挟まれて座っているからだ。何か色々と危険な香りが漂ってくる。おい貂蝉！オマエは俺と血縁の関係だろ！？甥の俺に対して距離が近いんだよ！それに卑弥呼！どさくさに紛れて脚を触るな！俺はノーマルなんだよ！お前達の性癖に俺を巻き込むな！俺には星という嫁がいるんだあああ！

取り合えず一人をボコボコにして難を逃れた。あのままだったら俺は別の世界に行っていたかもしれない…

「イタタタタ。何なの？ちよおつと遊んだだけじゃない。」

「まつたくだ！田の前に好みのオノコが居ては、このたぎる気持ちを抑えきれんのだ！」

謝罪が判らない言葉を言つている一人の顔面はボコボコにしたはずなのに既に完治していた。

卑弥呼！貂蝉は一応謝つたが、お前からは謝罪の言葉はないのか？そう思いながら卑弥呼を睨む。そんな卑弥呼は何を思つたのか、

「そんなに見つめるな。て、照れるではないか。」

何言つてんだテメーは！勘違いもほじほじこじるよーお前が作った刀のサビこしてやううか？

「ちよつと卑弥呼！李驥ちゃんをおちょくるのもいい加減にしない！そろそろ茉莉ちゃん達の事を聞かないと。村のみんなも元気にしてるかしら～ん。」

貂蝉は、思いふけるような表情はしてるもの、俺が何故ここにいるかを解っているようだった。

「貂蝉…俺の両親も村のみんなも賊に殺されたよ…生き残ったのは俺だけなんだ…その時に母さんからこの刀を譲り受けたんだ…」

あの時の光景が頭の中をよぎった。鮮明に覚えている惨劇。泣きそうになるのを必死で抑える。

「やつぱつそつなのね…あんな良い子達が…」

貂蝉も身内や、近所の昔の馴染みを失い、表情が曇っている。いつも俺みたいな気持なんだろ？。

「俺はその事をあんたに伝えたかったんだ。なら俺はこれで徐州に帰るぞ。待ってる人がいるんでな。」

俺はそう言ひ、貂蝉の家を出よつとした。こんなムサイ家から早く出たかったし、何よりもここに居れば俺がどうにかなつてしまつ可能性があつた。主に尻辺りが危険な香りが漂つている。

「あらあ？李驥ちゃんつて彼女いたりするの？それに徐州つて劉備ちゃんの所じゃない。アナタは将軍つて所かしりつ？」

「あいにく俺は劉備に忠誠は誓つちゃいないんでね。俺が主としているのは趙雲将軍だけだよ。そういうえば卑弥呼。この刀はあんたが

作ったんだよな？何でこんな形してんだ？」「

この時代には無いはずの日本刀を鍛えた本人なんだ。気になつてた事が今聞けるんじゃないかと思い聞いてみることにした。

「「」の刀か？これはだな、私がある時に想いを寄せておつたオノコの事を考えながら眠りについておつたら夢の中に神と名乗る者が現れおつてな。そこでその神が言つた通りに刀の材料を取りに行き、これを鍛え上げたのだ！」

夢に出て来たのはまさか俺をここに転生させた神なのか？それならこの時代に日本刀があるのも納得いくな。「」の刀の材料は何なのだろうか…？

「なあ「」の刀の材料はなんだ？」

手入れをしているから綺麗な状態を保つてゐるが、本来、日本刀は切れ味が鋭い分耐久性があまり無いはず。折れたりしてもおかしくない位に、使つてゐるんだがこの刀は刃こぼれ一つもしちゃいない。

「「」の刀の材料はな。龍の牙を素に造つてある。」「

なんですとつ？！

「龍？」「ドリゴン？マジでこの世界にいるの？ヤベー見てみてえ！！！」
だつて男の子だもん！龍とか憧れるじやん！
しかも仕留めるとか某ハンティングゲームかい？！

「マジで龍から採つたの？！」「

「当然だ！我等が漢女暴れる邪龍を討ち滅ぼし、そこから素材を取り出したのだ！」

やべえ…認めたくないがこいつ等 実はかなりスゲエ奴らなの？見た目は変態なんだけどね…

「あらあ？李翻ちゃん。今良からぬ事考えてなかつたかしらん？」

貂蝉！あんたもエスパーかい？何で皆鋭いんだ？

「ふふつ。ヒ・ミ・ツよん。それよりも卑弥呼。まだ伝える事あるんじやないかしらん？」
伝える事？一体なんだ？

「フム。李翻よ！よくその刀でここまで生き残つたな！実はその刀は茉莉しか扱えん代物だつたのだからな！お主何か身体に異変はなかつたか？」

えつ？俺普通に使つてたけど…まさか俺がここに転生する時に神が言つてた最強が関係すんの？

「やつぱりアレじやなあい？李翻ぢやんは茉莉ぢやんの息子なんだから大丈夫だつたんじやないかしら？」

「成る程。流石は貂蝉。ワシは気付かなんだ！」

何だ？一人だけで納得して…俺も気になるだろ？が…！

「李翻ちゃん。」の刀はね、造る時にその使用者の血を入れて造るのよん。李翻ちゃんには茉莉ちゃんの血が流れてるから使えたんじ

やないかしら？でもこの刀は邪龍の牙を使つてゐるから、その邪念が多少使用者に入つて來るのよ。」

成る程。どうりで母さんがこの刀を抜いた時、性格が変わつたような感じになつてたのか！俺は何ともなかつたけど…

「そりでだー！この刀を完全にお主の物にするために更に鍛え直す！血を貰うぞー！」

そう言つて卑弥呼が俺の指を短刀で切り、血を「コップみたいな物に入れた。

結構取られたぞ…

「おおつー！綺麗な色だー！けしからんー！全ワシをたきらせる色をしおつてー！」

何？この人やつぱり危険です…「これよりワシ達は新たな刀を鍛えるべく加治場にこもるー！李翻よー！決して覗くではないぞ！」

鶴の恩返しかい！これは覗いてくれと言つてゐるようだが、こんなムサイ奴らから言われても覗く氣すら起らんわー！

「完成するまで氣長に待つててちょうどいいねん。なるべく急ぐようにするけど、一月は掛かるわん。それまで洛陽を見てまわりなさい。

……これからの方にね……。」

なにやら貂蝉は意味ありげに街を見てこいと言つたがよくわからなかつた。

それよりも今から一月！？時間かかり過ぎじゃね？星には一月で帰

るって言つてんのに……あいつ泣くだらうなあ……でもどうする事も出来ないし……やべえどうしよ……。

どうするか考えながら、俺は街に出かけた。

洛陽を一言で表すと、綺麗な街だ。人々は活気に溢れ、いたる所から商人の声が飛び交う。

いいなあこんな街。徐洲とはえらい違いだ。

ここを納めている者はかなり有能に違いない。

ここで吸収できるのはできるだけ吸収していこう。

こうして洛陽を見て回った俺は、宿を取りたかったが、経費を抑え

るため泊まりたくないが貂蝉の家へ帰った。

貂蝉の家へ着くと、一人はまだ加治作業をしているらしく、鉄を打つ音が聞こえてくる。やつぱりお約束通りに覗くべきなのか？覗くべきなんだろうな……だつて微妙に入口あいてんだもん……

そう思いながら一人がいる部屋の扉を開けようとした時。

「うつふううううん！ああん！かたいわあん！卑弥呼こんなにかたいの初めてよん！」

「まつたぐだ貂蝉！ワシもこんなにガチガチな物は初めてだ！たぎる！たぎるぞおおつ！むつふうううん！」

一気に血の気が引いて行くのがわかつた……これ以上は俺には入つてはいけない領域だ……

俺は何も聞かなかつたことにして、そこから出て行つた。

やっぱり宿に泊まろう……そう思いながら俺は近くの宿に入つていつた。

それから一月が経ち、刀が完成する頃だつたので俺は貂蝉の家に向かつた。

ちなみに、あの声を聞いた日からこの家に近付いていない。このひと月はする事もないで、森の中で修業みたいな事と、金が無くなつたのでバイトみたいのをしていた。

そこで気づいたのは、最近、街の人達が慌ただしくしていた。荷物をまとめて出て行く人が日に日に増えていっていた。何があつたんだ？

貂蝉の家に着くと二人は入り口に立っていた。

「やああつと完成したわん！これがアナタだけの刀よん。」

そう言い貂蝉は俺に刀を渡した。

その刀を手に取り抜いてみる。見た目は母さんから貰つた刀と変わらない、持つと分かるが俺と一体になつてている感じがする。

「すげえな…」

思わず口に出てしまう。それほど刀から伝わってくる力みたいなのがある。これが邪龍の怨念か？

「そうだろう。ワシ達が愛を込めて鍛えたのだからな！」

あんたはいつも一言多い一造つてくれた事には感謝するが…

「そりいえば最近ここいらへんの雰囲気がおかしいんだが何があつたのか？」

俺が聞くと二人は顔を合わせ、ボソッと話をしていた。

「もうすぐ解るからちょっと待つてねん。それよりも今から徐洲に帰るんでしょう? ならこれを渡すわん。」

そう言って渡されたのは黒に塗られたパープルマスクだった。何だこれ?

「これはワタシが使っていた仮面よ。アナタは黒が奥でつだつたから塗り直したわん。」

良く分かってんじやん!

「時期が来たら使っちゃいなさい。それまでは誰にもこれを見られちゃダメよ。」

そんなに重要なの? 「れ…まあいいや。これで帰れる。星に会える。」

「一人ともありがとうなーなら俺はこれで帰るからーまた会えたら会おうな。」

本心は会いたくありません! だって父さんの兄だから期待したのに箱を開けたらオカマが出て来たんだぞ?

「ええ。またいつか会いましょう。気をつけたまえ。」 豹蟬達に見送られ、俺は洛陽を出て徐洲に向かった。

1-1話 漢女の誘惑（後書き）

次回は星の話を書きます！楽しみにして下さい！

アンケート的なを取りたいと思います！

星をこのまま、デレモードで行くか、ヤンデレモードにあるか迷っています。皆さんのお意見を聞かせて下さい。

感想お待ちしています！

投稿！

星ちゃん暴走します！

気をつけて下さい！

受け入れる人だけ次へお進み下さい！

「はあ～……」

これが何回目の溜息だらうか…。この昇り龍を捕まえた私の恋人の和喜は今、何処にいるのだろうか…

和喜が洛陽に向かつてそろそろ七日が経つ。最初は一月位すぐに経つだらうと思っていた私が愚かだつた。

思えば、必ず一緒にいる時間が毎日あつた。今はこれが出来ない…かなり辛いのだ。

和喜が洛陽に向かつて三日目に私は限界が来てしまい、訓練中に暴れ回つた程だ。今はかなり辛いが、まだ暴れる程ではない。

ああ愛しの旦那様は何処にいるのだろうか…星は寂しいのですよ。早くその胸で抱きしめてほしい。

私はそれ程愛しているのだぞ…思えばあの出会いは正に運命である。

ちょうど良い機会だ。和喜と過ごした今までを振り返つてみよつ。

幽洲で密将をしている時に公孫贊殿の旧友が訪ねて来て、雇つて欲しいと申し出ってきた。

名を劉備といつていだ。私が思つたのはこの女は武力こそないものの、人を引き入れるような才があると思つた。

その劉備に付いていた一人の武人、名を關羽と張飛と言つていた。二人はかなり強い。たたずまいと雰囲気で分かる。

それともう一人は最近聞いていた天の御使いだという本郷 一刀といふ男だった。劉備殿と關羽殿にご主人様と呼ばせてるあたり、かなりの変態なんだろうと思つた。

コイツはさつきから私の身体を舐め回すように見つけている。正直不快だ。このままここに居たらあの男に私の純潔を奪われるかもしれない。この賊騒動が終ればここから出て行こう。

そう思いながら城門に義勇兵が集まっているその方向に向かった。これが私の運命的な出会いがあることはその時の私は知らなかつた。

城門に集まつた義勇兵を見て回る。良く集まつてくれたものだ。私はふと正面の列を見た時に私の身体に電流が走つた。

私は運命の人、永遠の主に出会えたかもしれない：

ドキドキドキドキドキ。

胸が高鳴る。彼に近付いたい。彼の事を知りたい。

私がそう思いながら、彼を見ていると目が合つてしまつた。

ズキューーーと矢で射られた様な感覚におちいる。

私は武人としてではなく、一人の女として彼の事を見ていたのだ。これが一目惚れってやつなのか？私が動揺していることを悟られてはいけない！冷静になるんだ！

マズイ！視線を外せない！ああ……彼が私を見てニヤついている。動搖がばれたのか？でもカツコイイ！

私が彼を見ているうちに公孫贊殿の激は終わったみたいだ。全く聞いていなかつたな。彼をずっと見てたからか……私は悪くないぞ！全て彼が悪い！私を惚れさせたのだからな！

そして出陣するとき、公孫贊殿から名簿を見せてもらい、彼の名前を調べた。名前は『李讎 岱臺』と言つこともわかつた。名前からしてカツコイイ！どうしてくれのだ！

さらに、彼の配属先も私の隊だった。これはやはり運命なのか……？神がいたら感謝をしたい。

賊を討伐に出発すると彼は先頭にいた。話すのには好機だ。だがこれは將軍。ふぬけた話しさ出来ない。だが話すきっかけが欲しい。でも何もない。神よ……ここで私に試練を与えるのだな。どうしてくれる……

色々悩んでいたつうことをひどく賊を迎え撃つ所まで来てしまった。

結局話せなかつたではないか……このままだの将と兵の関係のままなのか？それは嫌だぞ！

考えてるうちに賊がやって来てしまった。おのれ賊め！私の思考を奪いおつて許せん！矢の雨を降らせてやるわ。

そう思い、私は弓をかける。彼も弓を引いている。この姿も凜々しい。

よしーきつかけがないなら無理矢理作るのみー

「ヤー」の者ちよつといいかー！」

勇氣を出して話してみる。命令口調だったから嫌われないだろ？

「なんでしょ？」「

よつやく話せた。ああ…これが彼の声。ずっと聞いていたい。

「私はこれから下に行き、賊を成敗してくる。ヤーは任せたぞ！」

かれは驚いていたが私は恥ずかしくなり、一気に崖を下つて行った。きつと今の私は真つ赤に違いない。

話せた事により私の気合いは最好調になり賊を斬つていく。時折上を見ると彼が覗いている。しかも笑顔でだ。更に気合いが入る。

気付けば賊は全滅していた。私の暴れぶりに愛紗達は少し引いていたがどうでもいい。

見ていただろうか李翻殿。私の暴れぶりで嫌いにならないで欲しい。賊の討伐が終わり、公孫贊殿達も宴をしているが私は皆と飲んだりする気分ではなかつた。頭の中は李翻殿でいっぱいだつた。

彼は酒は好きだらうか？メンマは好きだらうか？
彼と一緒に酒を飲みたい。今日だけでこれほど私の中に入り込む李翻殿も罪な男だ。

きつと兵達も宴をしているはず。これは労いの言葉をかけると聞く実で話せるのではないか？だがただ行くだけじゃ怪しまれる…
そうだ李翻殿も中々の武を持つていそうだつたな。それなら打ち合

うといつ名田で呼び出し、一人つきりにならう！

それなら直ぐに行動だ！李翻殿は他の女に言い寄られるであらう。同じ兵舎にいる女性隊員の方が断然有利。

将である私は親交の場がほとんど無い。圧倒的に不利だ…他の女に取られたくは無い！女は狩人だ。ここは將軍の立場も存分に使うしかあるまい。

そう思いながら兵舎に行き、たまたま外にいた兵に李翻殿を呼び出してもらひよう頼んだ。

李翻殿が出て来るまで私はソワソワとしていた。ようやく一人で話せる。どんな形であってもゆっくりと会える。身嗜みは大丈夫か？風呂も入ったし汗の匂いは無いはず！念のために一応勝負下着も履いてきた。

李翻殿が出て来るまでのほんの短い時間は私にとつてとても長い時間に感じた。

「これはこれは趙雲將軍、武器を持つて只の一兵士に過ぎない自分に何の御用で？」

出て来た李翻殿は腰に掛けている武器を手に、私に微笑みながら話しかけて来た。

ああ輝いて見える。初めてゆっくと見る顔は私の心の中に深く入つて来る。

カツ「イイよーーーおつといけない。危うく自分を失う所だった！

冷静になれ自分！

「ふふつ。お主にそう呼ばれるのは光栄ですな。武器を持った一兵士の李翻殿。」

なんとか自分を抑え込みついに挑発的な言葉を言つてしまつ。

自分のバカあ！こんな事言つたら嫌われるかも知れないのに…でもこう言わないと私は何を言つか解んない…

「何を言つておられるので？これは母の形見だと言つたではないですか。それよりも宴はいいので？」

宴なんてどうでもいい！私は貴方と一緒に居たい。もつと話したい、声を聞きたい。

「なに。酒が入つてしまえば今から始まる宴が出来ないではないか。だからお主も飲まなかつたのである！」李驥殿。

酒よりも私は貴方に飲まれたいです！

「ならこの辺りで宴を始めますか？」

そう言つて李驥殿は腰の物を抜き、剣を構える。ムダの無く、隙のない構え。全ての動作が様だよー星はますます惚れてしましますぞ！

「うむ。今宵は良い宴になりそうだ。それよりもお主はその腰の物は形見だと言つておつたではないか？」

「なーに。あなたはこれを抜かせるに値するつて事ですよ。」

その言葉は私を見てくれて居ると取つてよろじいので？

それよりも今は李驥殿から伝わる闘志に当たられ、私の武人の血が騒ぐ。

「ふふつ。光栄だな。では参る！」

「ついて私は李翻殿との討り合いが始まった。

「勝負ありますね。」

李翻殿の刀が私の首元にある。やはり強かつた。私はかなり本気だつたが、李翻殿は余裕で私の攻撃を防いでいた。

「そのよつだ。ある程度は行けると思つておつたがここまで差があるとは。」

「恐縮です。それよりも俺の事をどこからお見抜きで？」

「見抜く？なんの事だ？まさか私の気持ちが伝わっているのか？」

「なあに。あの城門でお主を見ていた時から解つていたぞ。だからこそ副将を任せたのだ」

実はその時に貴方に惚れてしまつてました。副将を任せたのも貴方に近付きたかっただけです！それよりも……

「では李翻殿、私の軍に入つたものも何かの縁、私の真名を受け取つてもらいたい。我が真名は星と言ひ。そして私にはそのような口調は止めないか？」

私の真名は受け取つてもらえるだろうか……？断られたらどうしよう……不安で涙が出てくる。この人からは真名で呼んでもらいたい。本郷

殿に呼ばれかけた時は、本気で嫌になった。思わず斬りかかりそうになつたくらいだ。その時は、『同性以外では私の大切な人にしか真名を読ませたくないの』と書いて呼ばせてはいけない。

「ありがとうございます。では俺の真名も受け取つてください。我が真名は和喜。趙雲隊の副将としてあなたに仕えましょ。」

真名を呼ばれちゃつたあああ！！

その言葉を聞いて私は嬉しくなり、思わず和喜に抱きついてしまつた。

「わざと敬語は止めるよ」言つたであらわしもつぶれたのか？」

「いやいや、一応形式だからね。てゆーか何で腕絡めんなのさ？」

恥ずかしさの為に更に和喜に絡めていの腕を強くする。

「惚れた男にくつ付いてはいけないと和喜は言つのか？」

「何言つてんだ私はあー思わず口に出してしまつたではないかーどうしようか？」

「冗談はいって。こんな俺の何処に惚れる要素があるのさ？」

「冗談じゃないのに…。惚れる要素？和喜の全てですー。

「一皿惚れつてやつだが。和喜は私が惚れるのはいけないのか？」

潤んだ瞳で和喜を見る。一皿で拒否されたらどうしようか…

「全然歓迎ですっ――――――

キヤーやつたああ！歓迎だつてえええ――――――
私の中の私が全員拍手を送つていい。

「では私の部屋に行くとするか。」

「え？ ちょっと何するんですか？」

「決まつていいであろう。男と女の嗜みだが。」

言つちやつたああ！穴があつたら入りたい！でも今からは私の穴に和喜が入るのだが何言つてるの私い！絶対顔が真つ赤だ。

ひつして一人で私の部屋に入った。

私は女として嬉しいです。

父上、母上。私を女としてこの世に生を受けた事に感謝します。

ひつして私は心身共に和喜の物になつた。
闇の中で耳元で『星、可愛いよ。』と言つてくれた時はかなり嬉しかつた。

公開はしていない！

感想お待ちしています。

13話 待ち人の恋心 後編（前書き）

更新だーい！

今回は書いてる作者もムズ痒くなりました。

覚悟のあるかたどうぞ！

誤字脱字があると思うので、指摘よろしくお願いします。

遅い…和喜はひと刂位で帰つてくると言つたのにまだ帰つて来ない
…もうふた月になろうとしている。

一体何をしているのか？まさか都の女と？いや、私の和喜だ絶対に
そんな事はないはず！私は和喜を信じてる。私の想いは伝わるは
ず！届け！私の想い！

…でも心配だから早く帰つてきてしまえ。

ここまで私は5回ほど暴れた。その度に部下の兵士達に止めても
らつている。思うがこの部下達はよく暴れる私を止めているな…流
石に一人は無理みたいだが、7・8人位では止められるようだ。愛
紗や鈴々の部下では到底無理であろう。和喜の訓練が良く出来てい
る証拠だ。

よし！もう一度和喜との初めての甘いひと時以降の出来ごとを振り
かえろう。

朝廷から、黄巾党の退治しどう命が来て、今は城門の前で全軍
が集合している。

私は將軍なので、公孫賛殿や愛紗達と並んでいる。正面には兵達が
こちらを見ている。

私は公孫賛殿が激を飛ばしてゐる間でも和喜をずっと見ている。話し
なんて聞いていない。

あつ！目が合つた！和喜が微笑んでくれた。あああ今日もカッコイ
イ！

今から出陣なのに私は何してるんだ？でも愛しい人が私を見てくれ

て いる。これで 喜ばない 奴は 本当に 救い ようが 無い 者だ。 黄巾党の討伐で 沢山 活躍 したら 和喜は 優めて くれるかな? きっと 優めてくれるはずだ。澤山撫でても りつ為に 頑張るぞー 星頑張つて!

「では出陣!」

公孫賛殿の命令と共に、全軍出陣した。私も氣を引き締めなければな。

黄巾党がこの先に陣を張っているといつ連絡を受けて、全軍に緊張が走る。数はおよそ5千、私達は4千。少し不利だが、朱里と離里の策があれば大丈夫だろつ。

「趙雲將軍、ちょっとといいか?」

李翻副将が話しかけてきた。何かあつたのか?

私達は、二人の時間以外は真名を呼ばないようにしている。公私はしつかりと分けている。他の者に私達の関係は知られたくない。まあ部下達は気付いているようだが…

「どうしたのだ?」

「いや、ちょっと氣になる事があつて俺だけ単騎で動いていいか?」

李翻副将が真剣な表情で言つて いる。きっと 何かあるに違いない。

「何故だ?副将である者が隊を乱す行動は良くないではないか。」

私がそう言つと李翻副将は私の耳元まで近付いてきた。え? ちょっと! 和喜、ここではいけないってば! 部下が見てるから!

「こJの先の黄巾党の陣とは別の所に4万の黄巾党がいる。こJのままだとこJちに流れて来るかもしね。俺はそJちに行つて、4万の黄巾党を叩いて来る。」

耳元で言われていたので心臓が高鳴り、興奮しかけていたが、その一言で一気に冷めた。4万だつて?この軍では無理がある。

「この事は関羽殿達は知つてゐるのか?」

「いや、知らない。これは俺が調べさせている忍からの情報だ。」

確かにこの人数で4万を相手するのは絶対の駄目だ。だがこの事が全軍に知れれば、仕気に影響する。和喜の力なら4万の黄巾党なら大丈夫であろう。

「わかった。気をつけて行つてくれるのだぞ!」

将軍としての言葉、一人の女としての無事に帰つてきて欲しいとう願いをこの一言に宿す。

「ありがとう。なら行つてくる!」

そう言つて和喜は森の中へ入つていつた。それにしても和喜の直属の部下の忍5といつもの凄いな、軍の偵察隊よりも有能だ。軍も見習つて欲しいものだ。

そして私達の軍は黄巾党とぶつかり、戦つてゐる。その時に曹操殿の軍も協力してくれたおかげで、被害も最小限に収まつた。

公孫賛殿の城に帰つて來たが、和喜はまだ帰つて來ない。まさか…

いや和喜なんだぞ。そんな事があるものか！だが4万の敵だ。最悪な事が頭をよぎる。

私は城の入口でずっと待っている。時折、愛紗達が何をしているのかと尋ねて来たが、適當な事を言ってあしらっていた。星はこんなに貴方の帰りを待ってるんだぞ！だから早く帰つて来て！泣きそうになる自分を必死で抑える。

待つこと一刻。こちらに向かつて歩いて来る人物が目に入る。目を凝らし良く見ると、愛しの彼が無事に帰つて来た。

私は嬉しさのあまり、そこから駆け出し、和喜に思いつ切り抱き着いた。ああ和喜の香りだ。私の落ち着く……匂い？

和喜からはいつも私が落ち着く和喜の香りがしているが今はしない。返り血もあるが、和喜自身には付いていない。なら何の匂いだ？良く嗅いでみる。

私の知らない女の「オイ… 一体誰だ？ダレダ？あの時に何があつた？まさか浮氣？急に涙が溢れ出る。嫌だ… 和喜は私のだ。他の女には渡さない。

「和喜… 一体… な、何を（ぐすつ）してたんだ…？」

和喜が何をしていたのかを考えてるうちに、私はとうとう泣いてしまった。

「星…？あの時4万の黄巾党を潰した時に曹操の軍が来てな、そしたら部下のデ「女がいきなり理不尽な言い掛けりを付けてきて、頭に来てさ、戦うはめになつてよ。まあ力の差を見せてやつたら大人しくなつたが…。」

何？曹操殿の「女と言えば夏候惇ではないか…彼女なら突っ掛かってきてもおかしくない…何たって猪なのだからな。待てよ？夏候惇がいたと言つことは曹操殿もいたと言つことだ。和喜は何て言つた？力の差を見せたと言つていた。マズイ…曹操殿は力のある者を求める。確実に目を付けられたはず…」

「全く。お主と云つやつは…挑発されたぐらいで頭にきおつて。心配したのだぞ！」

心配すぎでここに帰つて来てからずっと入口にいたのだぞ。

「和喜…曹操殿から何か言われたか？」

「私の所に来いと勧誘されたぞ。普通に断つたが。」

「やつぱりかあ。いくら断つてもあの曹操殿の性格だ。これ程の人材は何としても手に入れようとするだろう。和喜は渡さんぞ…！」

「今日は愛紗達に気付かれずに済んだが次は気付かれるかもしれんのだと？しばらく単独で行動は控えるのだぞ！わかつたか？」

「怒るはずなのに…怒るはずなのに…無事に帰つて來た事に嬉しくて涙がでてくる。

「わっかた！何処も行かないから取り合えず泣き止め。」

そう言つて和喜は私を優しく抱きしめる。ああこの暖かさが私を癒してくれる。安心する心地よさ。私の、私だけの一番大好きな所。この時間が何よりも一番大好きだ。絶対に失いたくない、大好きだよ！和喜。

和喜が無事に帰つてきて数日。私達、武将は公孫贊殿に呼ばれ、玉座の間に集合した。

「休んでる所に悪いな。」

「一体なんだ?」

本郷殿が何があるのか解らない表情で入つて來た。この男は最近の公孫贊殿の行動を見てないのか?仲間の女達とちちくり合つてるからだろう?馬鹿者め!愛紗達は好きだがこの男はどうも好きになれる。ここにいるのが和喜だつたらどれほど良かつたものか…だが、和喜がここにいたら他の女に言い寄られてしまう。だからこそ私の隊の副将を任せているのだがな。

「本郷は朝廷から使者が來ていた事は知つてゐるか?」

「ああ。黄巾党の討伐での活躍だろ?」

なんだ知つてたのか。ただの女の事しか考えていない男だと思つて

たが一応見ていたのだな。

「でね、白蓮ちゃんがね、これは好機じやないかって。」

「好機？」

桃香殿の言葉で解らないと顔をするこの男は… どれほど馬鹿なのだ
? これだけ解りやすい物があるとこの辺に…

「我らが独立するとこり」とですよ。」

愛紗の言葉でなるほど! という顔をしていた。見ていたイライラする。愛紗たちはこの男の何処が良いのか… 和喜の方が何倍も良い男なの!」。

「黄巾党よ鎮圧して、朝廷より恩恵をうけるだらう。そこで独立すれば、もつと多くの人を守る事ができるだらう?」

まあ本当は厄介払いだらうが… 公孫贊殿は自分より上に行くであろう者達がここにいたら自分が小さくなってしまう、だからここをこので追い出す形だ。

私はどうしようか…? 私はここにいたら昇れないだらう。劉備殿と行くかな。和喜はどうするのだらうか… 和喜にも相談してみよう。

「和喜はどうする?」

「どうするも何もお前はもう決まってるんだろ?」

和喜に聞いてみたが、私の表情を見てすぐに言つて來た。以心伝心

だな。

「ふふっ。やつぱり分かっていたか。」このまま公孫贊殿の所にいても意味のない事、ならば劉備殿といた方が自分をもつと上げる事が出来るであろう。私は劉備殿と共に行く。」

和喜はやつぱりなつて顔ををしてくる。この柔らかい表情も私を癒してくれる。

だが和喜は何か悩んでいる顔も時折見せる。まさか何処もつかずにこのまま何処かに行こうと考えてるのか？聞いてみよう。

「おやっまさか和喜はどうやらこも付かずに私と暮らすなどと考えていたか？」

本当に何となく聞いたが和喜は顔を真つ赤にしていた。そこまで私の事を思つてくれたのか。私の顔も赤くなる。

「私は今でも十分幸せだ。和喜がこうして傍にいてくれてる。そして私達は武人なのだ。今はこの乱世を正す事が先決。場所なんて何処でも良いではないか。」

赤くなつた顔が解らないよう、立つて言つ。

「星ありがとうな。ちょっとの可能性に心がふらついてたわー！」

その気持ちはとても嬉しいぞ。私はとても幸せだよ。

私は和喜に聞こえないように、「その気持、嬉しかつたぞ。」と言つたがたぶん聞こえていだろ。

桃香殿が徐洲の太守となり、だいぶん落ち着いた時の訓練中和喜が声をかけて来た。何か言いたそうな雰囲気だ。

「なあ星、話しがあるんだがいいか？」

「どうしたのだ？和喜。私は今訓練中だ後に回してほしいのだが？」

「忙しいならそのまま聞いてくれ。俺、今からこじを出でいいか？」

「え？和喜は今何と言つた？こじを出で行く？それはつまり私と離れると言つことか？」

その言葉を聞いて、思わず自分の武器を落としてしまいその場で崩れ落ちる。それと同時に涙も大量に出て来る。嫌だ…和喜と離れたくない。

目の前に部下がいるのも関係なく私は泣いている。

「和喜は私を置いて何処かに行つてしまつのか…？嫌だ！私は和喜と一緒にいるんだ！」

「違うぞ！ひと月位だ。ここも落ち着いたし、前に母さんから聞いた都にいる父さんの兄さんに会いに行つて両親と村の事を報告したいと思つてるんだ。」

え？ひと月？そい言えば前に和喜が都にお義父様の兄上がいると言つていたな。良かつた…私を置いて何処かに行くのかと思つたぞ。でもひと月があ…待てるかな私…

「本当なのか？それならそうと言つてくれれば良い物を…」

「すまん。大事な所が抜けていた。だから行つてきていいかな？」

涙を拭きとり立ち上がる。冷静になつたが泣いていた為、目は真つ赤に腫れているだろ？。

「それは大事な事だな…よし！ひと月であろう？都と言えば洛陽か…道中気を付けて行くが良い。」

行くのはいいが、一つ心配な事がある。都の女は美人揃いだろ？…和喜はこんなに良い男なんだ、絶対に女から近寄つてくるだろ？。和喜は絶対にそんな事はしない。信じてる。でもやつぱり言つておこう。

「くれぐれも何かあつても暴れないようにするのだぞ…あと向こうの女の誘惑に負けないようにするのだぞ！」

私がそういうと、和喜は「分かつてるよ。なら行つて来る。」といい、私に接吻をして出て行つた。

私はしばらく呆けていたが、ここは訓練場だという事を思い出し、我に返つて部下を見る。すると部下達はニヤけながら私を見ていた。急に恥ずかしくなり、その日の訓練を倍にした。

ふう～。これが私と和喜の出会いと今までの軌跡だ。思い出すだけでも照れてしまう。やっぱり和喜の事が大好きだな。ふふふつ早く帰つて来ないかな。

「ンンンン…」星。ちょっとといいか？今から至急で軍議を始めるのだが。」

愛紗が私の部屋の戸を叩いている。むつーせつかく和喜との出来ごとを思い出していたが軍議とは…しかも至急とは、下らない事だつたら許さんぞ。

そして私は軍議に行つた。

「みなさん揃いましたね。ここに集まつてもらつたのは、袁紹さんから手紙が届きました。」

朱里の言葉で全員がその手紙に注目する。

「朱里ちゃん。何で書いてあるの？」

桃香殿が聞いている。そんなに急がなくとも直ぐに聞けるであらう。

「はい。袁紹さんからの手紙では、董卓が暴政を強いてるという事で洛陽に向かい、董卓を打ち取りましょうと書いてあります。参加しますか？」

何？洛陽だと？洛陽には今和喜がいるはず…もしその手紙の事が本当なら、和喜の帰りが遅いのは巻き込まれてているからなのか？心配だ…ここは言うしかない。和喜の為に！

「私は参加するべきだと思うのだが。そうすれば私達を他の諸侯に存在を伝えるのではないか？」

洛陽の事を確認したい。諸侯についても半分は本音だ。優先ゾーンは

和喜の安否だ。

「そうですね。これは好機でしょう。私も賛成です。」

朱里も賛成のようだ。他のみんなも賛成の顔をしている。決まりだな。

「そうだね。よしー参加しようー！」

桃香殿の言葉で、参加が決定した。待っていてくれよ和喜ー・きっと私が助けてあげるからな！

こつして私達は洛陽に向けて出発した。

後悔はしていない！

感想お待ちしています。

14話 徐洲へ帰還のはずが…（前書き）

むつひや 眠たい… 何書いてるかわかんない（。 。 ?）

ではどうぞ…

14話 徐洲へ帰還のはずが…

What? なーぜ俺は今縄にかけられて連行されてんだろうか…? しかも自分の軍の兵士に…意味わんねえ…あれか? ドッキリか? そろそろ星がドッキリのプラカードを持って出て来るんじゃないかな?

結果から言つと現れませんでした。

わて、何故俺が自軍の兵士に連行されてるのかと言つと、時間を少し遡らないといけない。

貂蟬たちのオカマコンビから、新しい刀を貰い、意気揚々と徐洲を目指していた俺は、刀を見つめながら歩いていた。

「おいー…セーのお前ー…」で何をしている?」

声がした方を見ると、俺に武器を突き付けて、警戒心丸出しの兵士がいた。

良く見ると劉備軍が着用している鎧的な物を身につけていた。ああ! 偵察隊か!

俺がなるほど的な表情をしていると、その兵士が涙れを切らしたのか、

「キサマ…せつと答えるー…」で何をしている?」

うわあ…何から? ザ…

確かに怪しいわな。だって俺は劉備軍の鎧着てないし、武器を持つ

てたからやつなるな…仕方がないので答える事にした。

「俺? 劉備軍の兵士だけど? 分かつたなら通してくれない? 急いでるんで!」

そう言つて、この兵士を横切らつとした時、

「待たんか! キサマは劉備軍の兵士だと呴つたな。ならば答えよ! なん番隊で自分の役職を!」

何? このBLOCH的な設定…俺がいない間に何かが決まってるぞ! ならこいつ言えばいいか!

「ハア? そんなん知るか! 俺は趙雲隊の副隊長だ!」

俺がそう言つと、この兵士は笑い始めた。何だコイツはよお! イライラすんなあ!

「ハハハハ! 馬鹿も休み休み言え! 趵雲隊の副隊長の席は今は欠番。趙雲様がそう言つたのだ! そして俺様が時期の参番隊の副隊長になる者だ! すなわち! キサマの言つことは全てが出鱈目! よつて縄に縛り上げ、劉備様の元へ連れていく!」

「コイツはウゼゼ…しかも星の隊の兵士とは…」の「一ヶ月あげ何が起きたんだよ…参番隊とか番号で言つてるのでBLOACHT設定確定だよ…俺の事知らない奴とか沢山いるっぽいし…

こつして俺は訳の分からないまま、縛り上げられ、劉備軍の所へ連れて行かれた。コイツ絶対に潰す。それ

そして連れて来られました劉備の天幕。こっちも俺の知らない間に、何処かに進軍していたようで、何処かの荒れ地で陣をひいていた。

「劉備様。この先に怪しい者がうろついていましたので引っ捕らえてきました。」

自己中ヤローが天幕に入つて行き、劉備に報告している。俺はといふと、繩で縛られているので、地面に雑に放り投げれた。コイツ殺していいかな…

「何？ 怪しい奴だと？ 桃香様とご主人様！ お下がり下さい！」

関羽も暑苦しいなあ… そう思いながら顔を上げる。
するとそこには、將軍クラスが全員いた。勿論星もいるぞ。
星は俺を見ると、急に震えだし、かなりキツイ目つきでこいつらを見る。やつぱ怒つてんな… ひと円と言つときながら、ふた月帰つて来なかつたもんな…

俺を縛り上げたヤローは、星から手柄を貰えると思い、ニヤニヤしている。胡麻擂りヤローだな。

「おい… キサマは何をしている…！」

星ちゃん怒つてます！ しかも今まで見たことない形相で… 怖え… す
つげえ殺氣だ…

だが星の殺氣は俺には全く向かない。何故だ？ と思い顔を上げる。
すると俺を縛り上げ奴がガタガタと震えているではないか。

「キサマは」の縛り上げている者を誰だか知らないよつだな…

いつもの星は何処に行つた？マジで切れる所見たよ…周りの連中も星の雰囲気には身が小さくなつてますよ…

「確かキサマは私の兵だつたな…良い事を教えてやろつ…副隊長は何故欠番なのかを…それはだな…今お前が縛り上げている者が我が隊の副隊長だからだ。」

その言葉を聞いた馬鹿は俺と星を見る。さつさまで俺に向けていた見下した雰囲気は全くなくなり、その変わりに恐怖と絶望が漂つていた。

まあ知らないとはい、上司を粗末な扱いをしたんだ。そうなるわな。星は恋人がこんな扱い方されたんだ。怒るのは当然だな。俺は星に愛されている。

「キサマにはそれ相応な罰を『える。下がれ！』

「そつ言つて慌てて出ていく馬鹿者。ザマア！

「すまない桃香殿、取り乱してしまつた。」

「いいよ。星ちゃん。それにしても星ちゃんの欠番だつた副隊長はこの人だつたんだね。」

劉備が俺を見ながら笑つてゐる。笑うのは良いけども早く縄を解いてくれないかな…動けないんだ…

縄から解放された俺は星に報告する。

「李公臺、洛陽より戻りました。」

俺がそういつと、周りの連中が急に騒ぎ出す。何だ何だ？俺、何かした？

「あの…すみません。さつき李公さんは洛陽から戻ったと言つてましたが、何時から行つてたんでしゅか？」

カミカミだなあおい！はわわと言ひながら御使いに撫でられてる。御使いはロリコンか？

「ええ。ふた月ほど前から洛陽に行つてましたが？親族が洛陽にいるとの情報で少し休暇をとり向かいました。そして貴女は誰ですか？」

「あー申し遅れました。私は諸葛公明と申しましゅ。はわわまた囁んじやいました…」

なんと諸葛亮！」んなちびっ子が…でも頭良さう…

「なら李公さん。洛陽の事について教えてもらつていいですか？」

諸葛亮の言葉で俺は閃いたことに御使いもいるんだ。話すチャンスじゃないのか？

「別に良いですけども条件があります。」

「条件ですか？」

俺の問いに諸葛亮が帰す。

「俺からはその御使いサマと一緒に一人で話がしたい。」

「貴様ア！兵という者がご主人様と一緒に一人で話がしたいだと？頭が高いにも程があるぞ！」

俺が出した条件に関羽が突つ掛かつて来る。コイツもうぜえな…

「何言つてるんですか？世の中は等価交換。洛陽での情報が欲しいんでしょ？これはあなた達が最も知りたい洛陽の情報の変わりに、御使いサマと話がしたいだけなんですよ。世の中はギブ＆テイクだ。」

「

俺がそう言つと、関羽は諦めたようだつた。それよりも俺が横文字を言つた時の御使いの反応が凄かつた。

「愛紗。俺も李讎さんと話がしたい。あとで席を外してくれ。」

「しかし『ご主人様！』ご主人様の身に何かありましたら私は…」

あー立派な忠誠心ですこと。コイツは自分の目で見ないと完全には信用しないタイプだな…扱い方が面倒だ。そこまで信じれないの？

まあいいや。

「ありがとうございます。御使いサマ。では俺が見てきた洛陽の様子は、民達は笑顔に溢れて、とても活気のある街だと感じましたが。しばらくすると、民達が一斉に家を捨てて、何処かに逃げて行つたのですがあれは何だつたのでしょうか…？」

俺がそう言つと、周りの連中は畠然としていた。

俺、また何か言つた？

「えつーー。どうして董卓は暴政をしてたんじゃないの？」

劉備の言葉で俺は驚いた。何処にあんな所で暴政をするのがいるのか？あの街で暴政だつたらどんだけだよ…

「李翻さんの言つ事が本当なら、董卓は暴政なんてしてないのでしょつか…？そしたら袁紹さんが言つている事は嘘になつてしまいます。」

諸葛亮が悩んでいる。誰だよその袁紹つてやつは…

袁紹の事を詳しく聞くと、高飛車で血口で我が儘、つまり人として最低だという事が分かった。

あれだな…単に洛陽を納めている董卓が気に入らないと言つことだ。それだけで連合軍作つて潰しに行くとか人としての器が小さいな。

「私達の軍は連合に協力しつつ、無実の罪を付けられている董卓を保護という形を取りますが宜しいでしょうか？桃香様、ご主人様。」

「うん。李翻さんの話は嘘じゃないよつだもん！その策で良いと思うよ。」

「俺も同じ考えだよ。朱里、ありがとう。」

諸葛亮の策に賛同する劉備と使い。これでこの軍の連合での体制は決まったようだ。

俺も早く使いと話して、星に会いに行け！ついで思いつき抱きしめてやろうかな。

14話 徐洲へ帰還のはずが…（後書き）

誤字脱字の報告お願いします。

感想お待ちしています。

1-5 語 県回の語（福島方言）

あじましむぬじいわじゅこまかー！

更新でー！

今年もボーズをアロシクお願ひしますー！

袁紹からの手紙と俺の話が全く食い違っていた話から徐州のメンバーは実際に洛陽を見てきた俺の意見を採用した。

連合軍で戦いつつ、無実の罪を被せられた董卓を救うという何か無謀な策で話が決まった。ちびっ子軍師達は少し悩んでいたが、一応のトップの劉備がそうすると言つたのでこうなった。
「董卓の顔知らないから助けられないんじゃね？」
まあいいか。これでの御使いと話せる。

「これでいいですか？俺からは以上なんで御使いサマと一人で話させて下さい。」

俺はもう話す事の無いので御使いと話そうとした。

こうして俺からの洛陽の情報を手に入れた劉備達は、俺との約束の為に、天幕から出て行つた。

天幕を出していく時に、关羽から、

「もし、『主人様の身に何かしてみろ』一直ぐにお前を斬るからなー。」

と、殺氣を込められ脅されたが俺はどこ吹く風だ。あんな殺氣は蟻に噛まれたようなもんだ。

そしてマイハイニーの星からは、

「なるべく早く私の所に来てくれ。早く和喜の胸に一刻も早く飛び込みたいのだからな。土産話も聞かせてくれ。」

と、耳元で言つてくれた。久しぶりに聞いた星の声に俺は今直ぐに

でも行きくなつたが、御使いを待たせる為に断念した。ダッシュ
ユで行くからな！

そして、ここに残つてるのは俺と御使いだけになつた。

「どうも御使いさま。こんな俺の為に貴重な時間を空けて下さつて、
感謝いたします。」

こんな奴に敬語は使いたくないが、立場は俺は下っ端だ。ずっと女
とちちくつあつてゐる奴には頭を下げたくないがな…

「いいですよ。李驥さん。情報ありがとございました。それより
も俺が気になるのは李驥さんがさつき言つてた横文字なんですけど
…」

「あ…？ ツップの割には腰が低くね？」

「はて…そんな事言いましたかな？ 普通に話してたもんでも気付かな
かつたもので。」

とりあえずからかつてみる。コイツはどんな反応すんだろか？ 俺つ
てうんかな？ 確かによく闘では星をいじめてるからな… ヤバい！
早く星をいじめくなつちまつた。久しぶりだからな、いきなりハ
ードなやつはキツイだらつ。

「え？ やつをギブ＆テイクつて言つてませんでしたか？」

おー御使い。予想通りの反応ありがとついでござました。早く星に会
いたいから早く進めるかな。

「まあ冗談はそこまでとして……確かに使いましたが。ですが貴方の思っているような者でもありません。私はこの地に生まれ育つてきました。たまたま前世の記憶が残つたままだったので、こういう横文字が使えるのですよ。」

俺がそう言つと、御使いはそつなんだと少し落ち込んだ表情をした。無駄にカツコイイな……

「前世の記憶があるから言います、貴方が着てるのは聖フランチエスカ学院の制服で間違いないでしょうか？」

「え？ フランチエス学院を知つてますか？」

御使いは更に驚いた顔で俺に迫る。顔が近いんだよ！ お前もアツチの類いか？ でもコイツは女も好きだからな……バイカ？ 取り合えず離れて欲しい……

「ちょっと落ち着いて下さい。知つてるも何も、前世では聖フランチエスカ学院の生徒でしたからね。一応20XX年の2年だったもので。」

俺がそう言つと御使いの目が大きく開いた。何だ？

「20XX年の2年だったなら俺と同じ歳！」

うおおおい！ まさか同じ学年とは……あんな低い確率を引き当てたなあ俺！ だつたら敬語はいらないな！

「え？ マジで？ 何組？ ちなみに俺は16組！」

同学年でテンションが上がったのだろう。ついつい前世のようなテンションで言ってしまった。後悔はしていない。

「俺は3組だ！でもしらないなあ…あそこ馬鹿みたいに入いるし。」

御使いは3組だったのか。なら知るわけないよな。コイツは特別進学クラスだから校舎違うし、俺は普通科だし。でも同じ世代だからな。いい友達になれそうだ。てかコイツの名前を知らないな…

「なあ御使い。お前の名前は何て言つんだ？俺はここでは李翻 父臺だが、前世では、吉田 和喜つてんだ。あーちなみに真名も和喜だから。まあ同郷だからな。俺の真名を呼んでいいぞ。」

正直、真名に対する誇り的な物は俺には無い。やつぱり真名の風習が無い所から来てるからなのだろうか？だが、俺が気にいらないと思つた奴から真名を呼ばれたら腹が立つ。だから基本は教えない。俺の真名を知つてるのは両親以外は星だけだ。叔父である貂蝉にも教えてないしな。

「俺は北郷 一刀。まさかここで日本人に会えるなんて思わなかつたよ。よろしく。」

そう言つて、互いに握手を交わした。

おい一刀！今お前は俺の事を日本人と言つたが俺はここで生まれたんだから純中国人だ！中身だけが日本人！

「そいいや和喜なんでお前はここにいるんだ？確か前世とか言つてたけど、日本で何かあつたのか？」

「ああその事か。知らないと思うが、俺がまだ日本で生きている時に、その時は運が最悪に割るくてな…頭の上から鉄骨が落ちて来て、ミンチになつたんだ。笑えるだろ?」

笑つたら殴る!まあ、これはもう17年前の事。すげえ懐かしい。何か俺、オッサンみたいじゃね?何か悲しくなつてきた:

「俺…それ知つてる…だつてその鉄骨が落ちて来る瞬間を反対の歩道で見てたから…あとその事故は俺がここに来る3日前にあつたばかりだ…」

「おい…俺が潰れる時お前は近くにいたんかい!それよりも一刀は何て言つた?一刀の時間軸では俺はつい最近死んだのか?わかんねえ…あとそんな顔すんな!」

「俺はこうして新しい人生を歩んでんだ。別に未練があるつて事もないしな。そんな顔すんな!」

「そうだな!今はこうして同郷の人間と巡り会つたんだ。仲良くしよつな和喜!」

そして更に固い握手を交わした。一刀とは親友になれそうだ!何か同じ波長的な物を感じる。

「あと一つ聞きたいんだが、お前、各部隊をB-LINEみたいな呼び方に変えただろ?」

「あつーやつぱり分かつた?そっちの方がカッコイイと思つてね。ついつい変えてしまつたよ。」

やつぱお前が犯人だつたか。それにしてもグッジョブだ！趙雲隊とか言うよりも、数字の方がしつくりとくる。

そろそろ帰るかな。星が待つてるだろ？

「なら一刀。俺はそろそろ帰るからな。」

「分かった。これからもよろしくなー！これから男同士の話もバンバンしてこい。城とかでも俺の部屋とかにも来ていいからなー！」

なんであのヒョウと上皿線？まあいいや。

俺は了解の合図として、右手をヒラヒラと上げて出て行つた。星の天幕に行く途中に關羽に遭遇し、一刀の名前を出した途端にいきなりキレ出し、俺を切り殺さんと追いかけ回された。

やつぱコマイツは嫌いだ…

1-5話 男四十の話（後書き）

感想お待ちしています！

16話 恋人と再会（前書き）

更新です。

書く度に墨のキャラがどんどん崩壊していく感じがします。

ではどうぞ。

16話 恋人と再会

一刀と仲良くなり、関羽から追い掛けられ、ようやく着いたぞ、我が恋人！の待つ天幕。フフフ。会いたかつたぞ星よ…このふた月、どれほどお前の事を恋しく思つたか…

あのオカマ達の精神汚染に耐え抜き、それと同時に禁欲もしてきた。全ては星の為！

いざ行かん！我が嫁の所へ！

俺はようやく会える星に対し、変なテンションで天幕に入つたが、何かおかしい…待つているはずの星が居ない。何処に行つたんだ？辺りを見渡したが天幕には人の気配が無い…なんか悲しくなつてきた…俺、泣いていいかな…

「だ～れだ？」

泣きそうなつている俺の視界を遮る手。俺にこんな事をするのは一人しかいない！俺の目を塞いでいる手は良く握つている手だ。

「ん～誰だろうか…？解らないなあ…」

ちょっとからかつてやろうと、わざと解らないふりをする。だつてどんな反応するか楽しみだもん！

だがいくら待つても反応が無い…一体何があつた？

暫くすると、俺の背中からぐずる声が聞こえてきた。マズイ…星が泣き出した！

星が泣き出すと同時に俺の視界を奪つていた手が離れた。俺は素早く振り向く。そこには、この世が終わったような顔をした

星が立っていた。目には涙を浮かべている。その姿も可愛いくと思つてしまつ。

「和喜は…私の事を忘れてしまつたのか…? やっぱり何で女が出来たのか?」

星の妄想がテカくなつていぐ。

さすがにマズイ…俺は星を抱きしめ、包み込んだ。星も俺の体を抱きしめ返す。

「星」ermenな…ちょっととからかつただけだ。俺は向こうで、星の事を忘れない日々はないぞ。」

この言葉に安心したのか、震えていた星は、落ち着きを取り戻した。

「良かつた…和喜が本当に私の事を忘れたのかと思つたぞ…?」

頭だけを上に向け、自然と上目使いになる。

なんで「イツはこんなに可愛いんだよ!」

星さん…さつき劉備達の前で少し会話しただろ?

まあそれほど星は俺の事を思つてくれてるのか。愛されてるな。俺。やと落ち着いた星は泣き止み、俺の隣に腰掛けている。腕はバッチリ捕まってるけどね。

まあ一ヶ月居なかつたからしばらく、くつついてる事は問題無い。といつより俺もくつついていたいからな。

「星、改めてただいま。いついて無事に星の所に帰つて来れて嬉しいよ。」

偽り無しで言つ。本当に帰つて来れて良かつた。まあ少し前にちょっとしたアクシデントが起きたが別にいい。またこうして大切な人と一緒にいれるんだからな。

「和喜。お帰りなさい！」

にこり、と星が微笑みながら言つ。
やべえ！ハンパなく可愛いです！

その笑顔が見れただけで今までの疲れが嘘のように飛んでいったよ。

「和喜…色々と聞きたい事があるのだが聞いて良いか？」

星が深刻な顔で聞いてくる。やっぱ一ヶ月と言つてたのに、一ヶ月帰つて来なかつた事かな？やっぱかなり心配かけてたんだろうな…本当に申し訳ないな。

「何だ？お前に心配かけたんだ。このふた月の事は全て言つや…」

やましい事なんて何一つしゃいない。浮気心？そんなのは前世で死ぬと同時に鉄骨に潰れたよ。俺は星一筋なんだよ！

「よし…なら一つ曰。和喜は本当に洛陽で現地妻等を作つてはいいないのだな？」

「そう…俺が遅れたのはこの刀を…ん？」

なーんか話が噛み合つてないぞ？俺は何故一ヶ月に延びたのかを聞いてくると思つたんだが、星は何て言つた？

洛陽で女を作つてないかだつて？最初の質問がそれかいつ？

「さっきも言ったが俺は星だけを愛してるんだ。今更他の女が何しよつとも思わないよ。」

俺のこの答に満足いったのか星は満面の笑みを出していたが、顔は真っ赤になっていた。器用だな。そこも星の可愛い所だ。

「それを聞いて安心したぞ…では本題だ。和喜はこのふた用は何をしていたのだ？女を作つてないなら何かしら理由があるはずだが…？」

「それはな…俺の叔父の師匠に、この刀を新しく俺専用に鍛え直してくれたんだ。」

そういうつて俺は刀を鞘から抜き、星に見せた。やっぱ凄いな…この刀身の美しさ。そして溢れんばかりのまがまがしいほどの、怨念？さすが邪龍の素材から出来ているほどだ。他の人間が持つたら間違いなくこの怨念に飲み込まれるな…正しく妖刀だよなコレ。

「そういうえば叔父の所に行つていたのだったな今から洛陽に行くのだ。和喜の唯一の肉親。挨拶はしておかなければならぬであろう。」

その一言の俺は度肝を抜かれた。アレはマジで見せてはならないモノだ。

「いや…止めとけ。俺も初めて見た時にこの人が肉親だと知った時後悔したぞ…」

俺は遠い目をして、あの忌ま忌ましい記憶を消そうとするが、あの

インパクトがある存在感は一生消えないだろう…

「ふむ。和喜がそこまで言つのであれば諦めよ。」

そうしてくれ。俺も奴らは記憶の奥底に埋めておきたいからな。そういや俺も聞きたい事があつたんだ。

「せうこやか、このふた月で新兵がどれくらい入つたんだ?」

わつも俺を縛り上げた奴もしかり。いつたいどれほど変わってるんだろうか?

俺を知らない奴らはどの位なんだ?

「せうだな…約これまでの倍位は増えているが。」

なんですか?…半分つてどんだけ増えたんの?そりやあ俺の事を知らないやつがいてもおかしくないじゃんか。奴が怪しがるのも納得がいく。

「倍があ…なら星、兵の宿舎の所に案内してくれ。一言でも挨拶しとかないといけないだろ?からな。」

宿舎では俺も寝るだろ?から、挨拶ついでだ。

そう思いながら星に言つと星は驚いた顔をしていた。

何でそんな顔するの?

「和喜…私がここに呼んだ本当の理由をまだ理解していないようだな…。私は誰よりも和喜の帰りを心待ちにしていたのだ。それなのに和喜は部下の所に案内しろとは!私はこのふた月で不安と寂しさで押し潰されそうだったのだ!」

「……、星は怒りながら泣きはじめた。
そこで俺はハツと気付き、星を抱きしめた。

俺も洛陽にいた時に星に会えない事で何回も涙を流したんだ。それなのに俺は、星の気持ちを知らないで星を泣かせてしまった。

「すまない星……自分勝手な俺を許して欲しい。今日はもう遅い……ここに泊めてくれないか？」

俺がそう言つと、星の顔が一気に晴れて行くのがわかつた。

「いいのか？宿舎に行かなくて……ここに泊まれば今日は寝れないかもしけれぬのだぞ？」

「望むところ星さん……のために一ヶ月も禁欲してたんだ。今日は寝かせないぞ。

そう想いながら星の身体を愛でる。この可愛いやつめ……

「和喜……早くしてくれ……私はもうガマンが出来ぬ。」

モジモジしながら星は俺を見ながらねだつて来る。なんでこんなに可愛いんだ！これから洛陽で戦があるというのに、ここでも戦が始まろうとしている。明日の進軍大丈夫かな？と思いつながらも、今は星を愛する事だけ考える。

そして……で甘美なる戦が始まった。

16話 恋人と再会（後書き）

感想お待ちしています！

17話 ひとつ女の為に（前書き）

どうも！

最近 彼女に振られたボーズです。

主人公よ……お前は俺みたいにならないでくれよ！

ではどうぞ！

17話 ひとつの女の為に

次の日、俺は田に濃い隈を作つて進軍していた。

ああ…太陽が黄色い…寝不足は辛いな。

「全く和喜はだらしないぞ…だらけているお主を見たら兵の士氣に
関わる！」

そう言いながら星は意氣揚々と馬を進める。

何故か星は元気だ。同じ時間に寝たはずなんだが…星の肌はやたら
とツヤツヤしてゐるし、何だかみずみずしい。昨日は星にかなり搾ら
れたからな…一ヶ月分は凄かつたな。干からびそうだったよ。

そう思いながら星の顔を見る。田が合つと、顔を真つ赤にさせてモ
ジモジしだす。

「そんなに見るな。何だか恥ずかしいではないか。それにしても昨
日は激しかったな。天にも昇るかのようであつたぞ。」

サラツと恥ずかしい事を言つてのける星は大物だらう。見てみる近
くにいる兵が氣まずそうにしてるだろ？

それにしてもさつきから俺に向かつてバンバン殺氣を出してゐるやつ
がいるな…かなり弱い殺氣だから隊長クラスじやない。

そう思いながら振り返ると、少し後ろの方で俺を睨んでいる兵がい
た。

俺を縛り上げた奴だつた。

うわあ…めっさ睨んでるやん。何で俺こんなに睨まれてんの？何かしたか？何かアイツは星の事が好きそつだつたからな。仲良くしていの俺への嫉妬辺りか？まあ向こうから何かしてくるだろ？から取り合えず放置しとこ。

結局奴からの何かは無く、俺が合流して一田でまた洛陽に到着した。

「H-L-B e B a c k！」

思わず言つてしまつたよ。行動と意味は全く違つが言つてしまつた。本来は徐洲を出るときに星に言わなきやいけない意味何だが、ここで何故か言つておきたかった。

「何を言つておるのだ？」

星が当然の如く聞いてくる。

「気にするな！気にしたら負けだ。」

そう言つてこの話を終わらせる。

だつてどつ説明したらいいかわかんないもん！使い所間違つてたし！

洛陽に到着した俺達は近くに沢山の天幕が張つてあるのに気付いた。旗を見ると、馬の文字、孫の文字、曹の文字、俺達の劉の文字、そして旗の色が違う袁の文字の旗が一つ。

結構いるなあ！嘘の手紙に釣られてやつて来た馬鹿なのか、この機に己の諸侯の名を売る為に利用しに来た者か。まあほぼ全部が後者

だろうな。袁の奴ら以外は。聞けば袁術も袁紹と同じ位の馬鹿らしい。ただ袁術には頭のキレる部下がいるらしいから袁紹ほどの事は無いらしい。

俺達も近くに天幕を張り、長旅の疲れを癒している。劉備と諸葛亮と一刀は軍議に行つたらしい。

それにしても暇だな……何かないかな……。

「おい副隊長さんーちょっと面かしなー」

暇で仕方ない時に俺を縛り上げた奴から呼び出された。ようやく来たか。決心するまで時間掛かりすぎ。ちょうど暇だしいかな。コイツが何してくるか楽しみだ。

そう思いながらアイツの後ろを付いて行つた。それと同時に、ぞろぞろと野次馬も付いて来る。俺の事を知る兵は、先を歩く奴に哀れみの目を送り、俺を知らない兵は、何故か俺に哀れみの目を向ける。何で? こいつそんなに強いの?

しばらくすると、広い広場的な所に到着した。野次馬達は、俺達二人を囲むかのよにして俺達を見ている。

「や～張つた張つた! この試合どちらが勝つか? 副隊長が勝つか、それとも下剋上をした部下なのか! これは面白い試合になるのか! ?」

誰かが賭けだしたじゃねーか! 一体誰だ?

そう思い声のする方を見ると、そこには見慣れた蒼髪がいた。何やつてんのあの娘…

「隊長！何やつてんの？部下の喧嘩を止めなくていいのか？」

「賭けを先導してやつてこの星に思わずシッコ!!をいれてしまった。

「ふふふつ。李驥副隊長よ。これは私を取り合ひの試合なのだろう？ならば私がいなければ話にならないではないか！一人の男が惚れた女を取り合ひ…女として一度は体験してみたかったのだ！なんと私は罪深い女…。」

星の奴遊んでやがる…。涙を浮かべながら口元を隠すが、バツチリ口が釣り上がりますよ？

「趙雲隊長！見ていてトセー！今すぐこの男を倒して俺が副隊長になつてみせますからー。」

さつき星から殺氣をぶつけられてビビっていたのに今だ星に振り向いてもらおうと必死になつてるな…いいね！その一直線な性格は嫌いじゃないぜ！だがな…相手が悪いんだよ。お前は気付いてないかもしけんが、星はお前なんて見てないぞーさつきからずっと俺を見つめてるし。

何より俺が面白くない！星にここまで言つなんて気に入らん！星は俺の女だ！これは上司と部下なんて関係ない！星に纏わり付くのは全て排除だ！

「覚悟は出来ました？副隊長さん？あなたが副隊長でいられるのはこれで最後ですよ。」

「イツ… こちいちカンに障るよつた言い方しやがつて…。決定…！
星以上の殺氣をぶちかましてやんよ！」

「始め！」

部下の一人が審判を勤めるらしく、試合開始のゴングがなった。

ゴングと同時に、アイツが攻撃してくる。

ふむふむ… 言うだけあって武にはかなりのセンスがある。伸ばしたら化けそうだな。

観察しながら全て避ける。
使つてるのは訓練用の剣だ。

「どうしたんだ？副隊長さんよー！俺の攻撃が凄すぎて避けるので精一杯かあ？」

コイツはあー調子に乗りやがつて！人が手加減してやつてんのに付け上がり…

待てよ？このやつとりは昔に曹操の所のいたあの『女と同じ』じゃね？

なら今回は殺氣のみで行つてやろうと俺は思った。

さあ「イツがどれくらい俺の殺気に堪えられるか見物だな。

「よし分かった…そこまで自分に自信があるならそれを折つてやう…」

そう言つて俺はあの時の星が出した殺氣より少しだけ弱い殺氣を出した。

奴の顔が少し強張るがさつき受けた殺氣のおかげか、まだ平氣そうだ。

「この位の殺氣で俺が屈するとでも思つか?趙雲隊長の殺氣はまだ凄かつたぞ!」

奴もまだ折れない。まだ威勢のこもつた言葉をぶつけて来る。周りにいる奴の支持者も奴に「良く言つた!」など言つてくる。ついでにこいつらにも格つてやつを見せておくか…

そう思い、俺は殺氣を上げる。奴の顔がみるみる青ざめて行く。周りの連中は離れているおかげで、まだ大丈夫そうだ。「どうした?さつきまでの威勢は何処にいった?これ位の殺氣で音をあげるなら」この副隊長は務まらんし、隊長を守れないぞ?「

俺がそう言つと、奴の目に光が燈る。もう氣合いと根性だけで俺に抵抗しているだけだった。間違いないコイツは伸びる。

「俺の殺氣にここまで耐え抜いた事を褒めよう…だがな…俺も惚れた女は誰にも渡したくないんだ。諦めろ!」

そう言つて俺は更に殺氣を上げる。

奴の周りの連中は氣絶しだす者もいるほどの殺氣を放つ。奴は顔が真つ青になり、剣を落として氣絶した。つまり俺の勝利。至近距離でこの殺氣を受けたんだ。俺には敵わない事を知つただろう。

俺を昔から知つてゐる部下は殺氣に堪えていたコイツに拍手を上げて

いた。

「和喜少しやつ過ぎではないのか？」

星が苦笑しながら氣絶した奴を見ている。自分の悪ふざけでこんなになつた事を少し後悔しているようだつた。

「別にいいだろ？俺の星に書こ寄る奴は誰であつたと呪き潰すまでだ。」

「和喜ありがと…私はそんなお主が大好きだぞ！」

そう言って抱き着いて来る。もつ兵の田の前だらつと関係ないらしい。

部下の田の前でイチャイチャとしている俺達は、きっと部下から白い田で見られて「いるだらつ」というより呆れているだろ？

こつして洛陽での隊内での「ゴタ」が終わり、俺を支持していかれた新規の兵に俺の力を見せつけ、完全に副隊長としての意識を植え付けさせた。

余談だが、この俺に盾突いて来た兵は俺に弟子入りの志願をしてきた。

断る理由がないので、コイツを趙雲隊の第三席に任命した。

17話 ひとつ女の為に（後書き）

次回からこよいよ洛陽攻め！

感想お待ちしてます！

18話 泗水関へGO!（前書き）

インフルエンザに感染しました…熱が下がらない、どうすりゃいい？
誤字が目立つと思しますが…
でせじつわ…。

「遅い……一刀達が軍議にいつてかなり時間が経ったぞ……一体何の軍議があつてんだ？」

「俺達は待たされている為イライラが溜まつていい。どうせつまらん腹の探り合いでもしてんだろうな……もうすぐ日が暮れるや。

「和喜。 そうイライラするな。 ここで腹を立てても何もないぞ。 あつ！ それロン！ 国士無双1-3面待ち！」

「確かにそうだなここで腹立てても何も始まらん。 何！ ？ 国士1-3面待ちだと？ 『役満』じゃねーか……」

あまりにも暇なので、俺達三番隊は天幕で麻雀大会をしていた。 俺はたつた今、星に国士無双を振り込んでしまい。 持ち点が一気になくなり、敗北が決定した所だ。

「ふふふ。 和喜よ……くら闘では強くとも、 卓上での勝負は話にならないではないか。 」

「うるせー！ なんでだよ……なんでこんなに俺は弱いんだ？ ダントツのビリだぞ？ あと星！ 閨とか言わないの！ 見てみ！ 卓を囲っている残りの一人の顔が真っ赤じゃねーか！」

「もうこの隊では隠すことは何も無いではないか。私達の愛を分けてやるうとしているのだ。」

その言葉で俺も真っ赤になる。恥ずかしいなあ！こんちくしょう！

それにしても遅い！もう口が暮れたぞ？

これにより向こうも戦闘準備は万全になるぞ？

「失礼します！趙雲隊長。これより軍議を開きたいと言ずかっています。今すぐ劉備様の天幕に来てもらえないでしょ？」

軍議の長引きと麻雀の大敗で俺のテンションは下がる一方の時に、伝令が入って来た。これで悪い流れを切れるか？でも星がいなくななるからな…これでお開きだろ…俺の小遣いは無くなつたからな…。

「分かった。では和事、行つてくるぞ。それに今日はもう遅い…皆のものも早く休むがよい。」

やつた！これで終わりだ！今月は何とか食いつなげる！
俺は内心ガツツボーズをした。

こうして星は軍議に俺達は就寝した。

次の日。俺達劉備軍は驚く報告を受けた。

なんと先鋒を俺達が勤める事になつた。どうやらこの総大将を決める時に、劉備が袁紹を押したらしく。それにより、袁紹から名誉ある先鋒を任せられたという。単なる噛ませ犬だろ？俺達…ただ唯一の救いは、袁紹からは策という策は無く、各々の軍で動いて良いらしい。話だけしか聞かないがやっぱ、袁紹は本物の馬鹿なんだうと確信した。

そんなこんなでやつて来ました泗水関。第一印象はすげえの一言だった。高いなー！…そしてここを守るのは、神速と名高い張遼と、華雄らしい。更にここを抜いても呂布と軍師の陳宮が構えている虎牢関。正に鉄壁。確かに呂布つてこの前の前の黄布党の時に会つたあの娘だよな。雄一俺と戦えそつた武を持つているあの娘…是非とも戦いたい。やっぱ俺は根っからの武人なんだと思った。まあ星が徐々に強くなつていてるしな。劉備軍では俺を抜いたら既にＺ〇・一だろう。そして、俺達の弱小軍ではこの泗水関でおしまいだな…まあ俺が前线に行けば一気にここを抜けるんだがな…まあそれは今からの策上無理だろ？。

策はと言つと、猪で有名な華雄をおびき出し一騎打ちに持ち込もうといつた事だ。いくら猪でもこんな愚策で上手く行くか？行くなら是非見てみたいね…そんな馬鹿を。

おー！関羽が挑発しだしたぞ！
うわあ…やっぱ女だな…一言一言に棘がある…女つて怖え…やっぱどの時代でも女は怖いな…うん…考え変更。これは腹立てるぞ…
てか俺だったら絶対出て来る。

俺がそんなことを思つていると泗水関の門が開き、華雄が出て來た。めつたキレイでんじやん！顔が真っ赤で今にも関羽に切り掛かりそうだ。華雄…これに耐えろはキツイな。お前に同情するよ…

そして一騎打ちが始まつて、現在打ち合つてている。まあ勝敗は解りきつていた。頭に血が上がつていて、周りを見れない華雄。相手は、冷静に戦いを進める関羽。始めから関羽の圧勝だつた。華雄も良く頑張つたよ。ゆっくりと眠りんしゃい。おーと。思わず博多弁が出ちました。

そして関羽が華雄を生け捕りして泗水闘の戦いが終わった。泗水闘には劉の牙門旗の旗が靡く。スゲーな…死者を出さずに泗水闘を落とすなんて…ちなみに張遼は虎牢闘に逃げたらしい。

いよいよ次は虎牢闘かあ…もう先鋒とかはやらされないだろう。さて疲れてないけど、寝るか！

何となく後を見ると、総大将である袁紹がハンカチ的な物を噛み締めていた。ザマア…！適當な策でこんな自由な事させるからだ！バ一力！バ一力！

ああ呂布と戦えたらいいな…そう思いながら、俺は自軍の天幕に引き上げた。

18話 泗水関へGO！（後書き）

頭痛がヤバイ…

感想お待ちしてます！

19話 またもやハタハタ（前書き）

インフルエンザで暇だから連続投稿！

回らない頭で書いたから話が無茶苦茶かもしれないが暖かく見てく
ださい

見事泗水関を落とした俺達は、現在天幕で休息を取っている。次に攻める虎牢関に向けて、劉備達はまた軍議を行つていた。どうせまた長引くのだろうと思いつりをふらふらしていると、思ったより早く、一刀達が帰ってきた。だが顔が絶望感に溢れている。

また袁紹に無理難題を押し付けられたな。と思いつつ、俺は放置した。だつてこんな戦じや俺はというか、三番隊の連中は死なないからな。そう、既に星率いる三番隊はこの劉備軍の中では最強の戦闘部隊になっていた。新兵は危ないかもしないが、今までいた兵で考えれば、多分この三番隊だけで国攻めしても勝てるんじゃないかというくらいの武力を誇る。

この事は既に劉備達は知つていてると思つ。

俺が洛陽に行くちょっと前に、趙雲隊の訓練を関羽達が幾度も見に来た事がある。勿論訓練内容は企業秘密なので教えて無いが。

そんな事を思いながら、天幕付近をウロウロしていること30分、劉備の天幕付近に何やら人だかりが出来ていた。何かと思い見に行つてみると、そこには昔会つた霸王さんがいるではないか！なんで曹操がいるんだ？と思つていると、どうやら関羽が欲しいらしく、引き抜きに来たようだ。堂々と来るなんて流石としか言いようがない。俺は君に拍手を贈るよ。だが何か裏がありそうだが…

ここに騒ぎを聞き付けた劉備と一刀がやつて来て、関羽は渡さない！的な事を言つたら曹操の目が光つた。あらり…馬鹿な事を言つちやつたねアイツ等。

「そ、う… 関羽」は、渡さないのね？なら関羽以外なら頂いても良いつて事かしら？」

流石は曹操さん。言葉の落とし穴を上手く利用してなれる。テンパつてる劉備達と違つて冷静である」と。一刀が悔しそうな顔してますがな。

「そうね… 確かあなた達の軍の中に李翻といつ男がいるはずよ？関羽が駄目ならこの男で我慢するわ。」

本当の狙いは俺だろ… 関羽が欲しいという建前でやつて来て、將軍クラスなら色々と問題が起きる。なら普通の一般兵なら何も問題無いと踏んで来たな。曹操… 恐ろしい子。まあ上手く行けば関羽も的な？

「うう… 愛紗ちゃんが連れて行かれないなら良いのかな？『ご主人様はどう思「駄目だ！和喜は俺の親友なんだ！絶対に渡すものか！』

劉備の言葉を一刀が遮る。おい劉備！お前今俺を売ろうとしたよな？コイツ絶対に俺がここにいるなんて気付いてないな。そして一刀！ありがとう！お前は俺の事を親友だと思っててくれたんだね。俺もお前を親友だと思つてたよ！

「なら本人に聞いて見ましょう。李翻…そこにいるんでしょう？出てきなさい！」

「えつ…？」

曹操さんからの指名が入りました。劉備は俺がいると聞いた途端に

気まずそうな顔をしたが、得に気にしていない。一刀は居たのか迷ったな驚いた顔をしていた。

俺は劉備達の前まで来た。何か面倒だな…

「李翻。貴方を関羽の代わりに私の軍で働きなさい…」

曹操さんは何時でもストレートですね！

「俺は別に構わんが、良いんですか？劉備サマ？俺が曹操の所に行くと、三番隊の連中がそのまま曹操の所に行くことになりますが？勿論、趙雲隊長もですよ。」

「えつえつえつえええ？」

「なつ！貴様！たかが副隊長のくせに星まで連れて行くとは何事か！」

俺がそう言つと、劉備は焦りだした。そして関羽は怒り出す。思つが関羽は常に俺にキレてないか？劉備さん…まさか俺一人が曹操の所に行くと思っていたのかい？俺が行くとそのまま三番隊まで持つて行かれるなんて思つちゃいないだろうからな。生憎俺と星は二人で1セットなんでね。あと兵も俺と星にしか忠誠心がないから他の隊に行つても言つこと聞かねーぞ！

「私としては大歓迎よ。李岱臺だけでも戦力を大幅に拡大出来るのに、更に登り龍の趙子龍まで来るなんて棚からぼたもちじゃないかしら。」

曹操さん…まだあなたの所に行くと決まつた訳じやないんですが…かるーく俺を強いです的な事言わんて下さい。あとさつきから俺に

やたらと殺氣を飛ばして来る『女をどうにかしてください。怖い
ツス。

「 うう。星ちゃんが居なくなるのは辛いな…。」

アンタは俺の事なんてどうでもいいんですね…まあただの兵だから
そういう扱いってのは分かつてたけども。これがアンタに忠誠を誓
つている兵だつたらアンタの今の言葉だけで、多分クーデター起こ
す位あるぞ。

良かった…コイツに忠誠を誓つてなくて

「 なら本人に決めてもらいましょう。李翻。貴方はどうちに付くの
かしら?」

そつ言いながらも、私の所に来なさいと田で言つている曹操。はた
また劉備は星ちゃんは渡したくないから残つて下さいと泣きそうな
目で訴える。その後ろでお前を信じてるぞ!的な目で見つめている一刀。
その横には、残らないと今すぐ殺す!的な目で見つめている关羽。一刀
は良いが劉備がウザいな。关羽よ、俺はお前に何かしたか?まあい
い劉備今回だけだぞ。

「 生憎曹操さん。俺はこの軍で骨を埋める覚悟。今更別の軍に行く
のは気が引けます。てなわけで俺は貴女の所へは行きません。」

俺がそう言つと、曹操は「分かったわ。でもまだ私は諦めないから。
」と言い残し自軍の天幕に引き上げて行つた。面倒だな…

「 和喜。ありがとうございます。ここに残つてくれて。」

一刀から感謝の言葉が出る。良いつて事よ!恥ずかしいじゃねーか。
これは单なる俺の気まぐれなんだから。

「李驥さん。ありがとうございます。おかげで愛紗ちゃんも星ちゃんも失わずに済みました。」

何だよこの女はシバき倒すぞ！」この女は無理だ。救いようのない馬鹿だ。武も無けりや知力も無い。ただ人を引き付ける才能しかないお前は俺を売ったんだからな。自覚しろよ馬鹿が！

「いえいえ。気にしてませんから一人とも顔を上げて下さい。」

内心では劉備に対し怒ってるがな。

一刀は親友だもん。

「なら私の真名を預かって下さい。」

「断るつ……」

劉備が俺に真名を預けようとしたが、俺は即答で断った。劉備は驚いた顔をしていたが、まあ確かに凄い事だよな。ただの兵が、トップである劉備の真名を呼べるなんて、喉から手が出る程であります。でも呼ばないよーん！だって俺はアンタに興味ないからね。

「申し訳ありません劉備サマ。俺が真名で呼んだり、呼ばせたりするのは生涯の伴侶と決めた相手だけと決めておりますゆえ。」

俺がそう言つと、劉備は分かりましたと言い、諦めてくれた。

スマンがアンタの真名は絶対に呼びたくないんだ。何か生理的に無理な感じだし……むしろ俺が今だにこの軍にいることですら奇跡に近いのに……何でだろう？何故かここにいなきやいけない気がすんのね。

「つして曹操達とのございも終わり、皆が天幕に引き上げて行く中、またもや关羽に、

「ただですら貴様がご主人様の名を呼んでいる事ですら私は気に入らないのだ。ましては、桃香様の真名を呼ばづ物ならまつ先に首を跳ねていたぞ。命拾いしたな。」

と帰り際に耳元で言われ、怖くはないが、何故俺はここまで关羽に嫌われなきやいけないの?と思った。俺も嫌いだから別にいいがな。そして俺も星の待つ天幕に帰つたが、星から何処に行つていたのかと説教をくらつてしまつた事を記しておいつ。

明日から仕事に行くのでまた投稿が遅くなると思いますが許して下さい。

では感想お待ちしています。

20話 虎牢関での戦い（前書き）

ちくしょーーー寝れないー！よつて連投するぜー！

文章が変かもしれんが気にしないでトセー！

わあわあやつて来ました虎牢関！呂布と戦えるかもしないという期待感が高ぶる中で足取り軽く進軍している俺。他の仲間は何故かテンションが低い。

理由は簡単だ。俺達劉備軍は連合軍の先頭を進んでいる。つまり、袁紹からまた先鋒を任せられたのだ。だが諸葛亮も黙つてなく、先鋒をする代わりに、袁紹から5000程兵と兵糧を貰つたらしい。その中で俺達の三番隊に配属された連中はまつ先に前線に送り込む予定だ。配属された連中に良い物を持った奴がいたら勧誘したのだが、誰ひとりとして、使える奴はいなかつた。よつてまつ先に死んでもらおうと思いつつ、ただの死兵として働いてもらおう。その事が分かつているのか、袁紹軍から来た兵達は死んだ顔をしている。当たり前だろ！三番隊の隊員を無駄死にさせたくないからな！

だが俺は違つ！前線に出て思いつきり暴れる予定だ！呂布をやつさとおびき出さないとね。

虎牢関を見ると、泗水関と違い守りの固さが凄いと思つ。更に呂布と張の牙門旗がその存在感を大きくさせている。

早く呂布と戦いてえ！

今回は挑発では無理と諭つたのか、始めから攻めるようだ。

「皆のもの良く聞け！ここを落とせば後は洛陽の城のみ！だが城を守るのはこの虎牢関！そして神速の張遼と飛将軍の呂布だ！呂布が出来来たらまつ先に逃げる事だけ考えろ！お前達じや相手にならない！呂布の相手は私が受け持つ！そしてなるべく一騎打ちに持ち込め！」

と兵に激を入れる関羽。テメ何ちやつかりと呂布との交戦のフリ
グ立ててんだよ！ハツキリ言つぞ！お前には呂布の相手は無理だつ
て。呂布と戦いたけりやまずは星に勝つてから言いましょうね。ま
あ今そんな事言つたら空氣読めない君になりそつだから黙つてよ。
関羽ちゃん、一回呂布にフルボッコにされてきなさい！自分の武が
どれだけちんけな物か思い知つてきなさい。

そう思いながら並んでいると、虎牢関の門が開き、敵軍が一斉に出て來た。

成る程…負け戦だと解りきつてゐるのだな。最後位派手に散々つて事か。いいぜ！手伝つてやるつ。

「全員かかれえ！」

関羽の号令と共に劉備軍が攻めていく。

俺も今は思う存分に暴れているが手応えがない。現在俺が使つてゐる武器は訓練用の剣だ。刀はそれ相応な相手にしか使わないようにしてゐる。俺は暴れているが殺してはいけない。武器がショボい為、敵は氣絶するだけだ。俺つてなんて善良なんだらつ。

「呂布だーー！呂布が出て來たぞーー！」

おーやつとか！俺が周りにいた敵を氣絶させてからしばらくしてようやくお出ましの呂布。さあ呂布ちゃん。関羽をボッコボコにしてくださいな。ちなみに張遼も出て來たが、張遼の方は曹操が受け持つらしい。

「全員私と呂布を囲めー！」

そう言われた兵士達は一斉に一人を囲む。

見せてもらいましょう。アンタの弱さを。 いつして関羽と呂布の一騎打ちが始まった。

結果的にいつと全く面白くなかった。関羽の全ての攻撃はいつも簡単に呂布に受け止められ、全く通らない。反対に呂布の攻撃は一撃が重そうで関羽は必死で耐えていた。コイツはこんなに弱かったのか？ダッセえ！面白すぎて笑いしかでてこねえ。

ついには張飛や星も乱入したが三人でも勝てなかつた。呂布はある意味で人間じゃないな。呂布も星を相手している時は何か眞面目な感じがしたな…あつ全員蹴り飛ばされた。
さてそろそろ俺が出よつかな。

俺は囲いから出て呂布の正面に立つ。

「やあ呂布！久しぶりだな。お疲れの所悪いが俺の相手をしてくれないか？」

「……疲れてない。恋もお前が出て来るのを待つていた。」

つまり三人相手に手加減してたつて事ですね。コイツどんだけ強いの？まあ初めて全力で戦えそうな相手だからな。相手に不足無しつてか？

「やめろー副隊長のお前が敵う相手じゃない！」

関羽が後ろでピーピー言つてるが全面無視！星を見てみろー俺の本気が見れると思つて期待感丸出しじゃねえか！

「んじゃ始めようか。」

その言葉と同時に構える俺と呂布。

俺は勿論訓練用の剣ではなく、自分の刀を抜いている。俺達の雰囲気が変わったのが分かったのか辺りが静まり返る。

先に仕掛けたのは呂布だ。迷いのない上段からの切り付け。俺はそれを受け止める。重い。この刀だからこそ受けられるんだよな。続けて上段から腹に蹴りが来るが俺は難無く避ける。俺が着地と同時に下からの切り上げが迫る。切り上げの力を利用し、受け流しながら呂布の後ろを取る。さあ次は俺の番だ。

横からの切り返し。難無く呂布は止める。すかさず俺は反転して逆から攻める。しばらく激しい攻防が繰り返されていた。面白い。全力で戦つても壊れない敵は初めてだ。ゾクゾクする。

俺が物思いに浸つていると、呂布の後ろで怪しげな行動をする一刀と諸葛亮がいた。良く見ると、周りには繩を持った部下達がいる。まさかっ！？

そう思つた瞬間に一斉に呂布目掛けて投げられる繩。コイツ等俺の一騎打ちの邪魔する気か！？

「テメエ等何やつてんだあ？！」

俺は呂布目掛けて投げられた繩を全て切り落とし一刀達の前に来た。

「おい一刀！テメエ今何したか分かってんのか？」

一刀に刀を向けながら問いただす俺。

「仕方ないだろ？もともとこりういう策だつたんだから。」

「策だらうと知るか！テメエ等は俺と呂布の一騎打ちの時間を潰したんだぞ？そして、武人の誇りを汚した！」

少しの殺氣を込めて言つ。一刀が口ごもる。

「貴様あー！」主人様に刃を向けるとは何事かあー！」

怒りが頂点に達した関羽が俺に切り掛かつて来る。

ドスッ！ ザクッ！

関羽を蹴り飛ばし、関羽の顔ギリギリに刀を突き刺す。

「テメエもだ関羽。貴様は何かと俺を邪険に扱つてたよな？副隊長で調子に乗つてていると思ってたか？ハツキリ言つぞ？俺はテメエ等より遙かに強いんだよー！呂布と戦つてる時に何も感じなかつたか？自分の武が呂布相手に全く通用していないことにして、そして明らかに手加減されてた事を！」

その言葉を聞いた関羽は驚いた顔をしていた。やつぱ氣付いてなかつたな：

「おい呂布ー！関羽に本当の事を言つてやれ。」

そう言つと呂布はいいの？的な顔をしたが、俺が言つてやれというと、

「……確かに関羽は強い。でも恋の相手にはならない。お前と戦つても面白くない。まだ趙雲と戦つてた方がマジ。」

呂布がそう言つと、関羽は心が折れたのか、目から光が失くなつた。いいきみだ。

「興が冷めた。呂布。次で終わりにしようや。」

俺がそう言つとゆつくりと頷く呂布。

構え直し、互いの鬪気が更に上がる。

同時に駆け出し、武器が相手を田掛けて切り掛かる。本気の殺意が入つた一撃。二人が同時に止まる。

ブショウウ！

俺の胸から吹き出す血。それを見た呂布はそのまま倒れる。

痛つてえ！！絶対に倒れるものか！

そう思いながら必死で耐える俺。

俺は最後呂布に打ち込む寸前に刀の刃と峰を入れ替え、峰打ちをした。持ち替える瞬間の一瞬の隙に切られたが、その隙を逃さない呂布も大したものだった。

この一騎打ちの結果は俺の勝利だった。曹操達と戦っていた張遼も曹操に引き入れられたらしい。

こうして虎牢関での戦いも終わつた。だが、虎牢関の城はちゃつかりと孫策が率いる軍に制圧されていたが、呂布という手土産が出来たので放つておくことにした。

呂布を生け捕りにした後、これ以上この軍にいるのは気まずいなと思つていたら、一刀達からかなり謝られた。あんな事をしたのに俺

に残ってくれとかどんだけ一刀はいい人なんだよ…

さて後は董卓を助けるだけだな。そう思い、洛陽の街に入つて行つた。

20話 虎牢関での戦い（後書き）

やつぱ戦闘描寫はむつかしき…

感想お待ちしています！

21話 洛陽の決着（前書き）

連投といソフルエンザで何書いてるか解らなくなってしまった…

期待しないで下さい…駄作です…

21話 洛陽の決着

呂布との戦いが終わり、呂布を生け捕りにした俺は、呂布から受けた傷が思いのほか深く、天幕で休養していた。確か転生する時に神が最強にしどくって言つてなかつたけ?何かのバグ?まあいいや。俺が負傷してからは、星が付きつきりで看病している。全く俺は良い嫁をつたものだ。感謝の気持ちを込めて星の頭を撫でる。星は気持ちいいのか目を細めてされるがままになつてゐる。やつべえ!すんげえ可愛いんだけど!

一方、一刀達は、呂布から董卓の情報を聞こうと尋問しているらしいが一向に口を開らないらしい。…まず尋問つて所から間違つてゐる…
さしづめ関羽あたりが、「さつさと董卓の事を話せ!」的な事を言つてゐるのだろうと思つたのだがどうも違つらしない。

関羽は呂布との一件により自分の自信を根っこから叩き折られ、天幕に籠り、出て来ないらしい。というより監禁されている。理由は自殺未遂をしたからだ。これはたまたま関羽の天幕に行つた星が自分の喉元に刃を当てようとしている所を発見し、ギリギリの所で止めたらしい。

精神的にイッてしましましたね。俺も少し様子を見に行つてみたが、目がヤバかった。関羽は手足を拘束され、天幕内にある殺傷出来そうな物は全て撤去された。舌を噛まれたら終わりじゃんと思つたら、一刀が何処から取り出したのか関羽の口にギャグボールを装着した。お前何でそんなの持てんの?このドゥガ!

そう…はたから見れば、関羽は手足を拘束され、口にはギャグボ

ルをくわえ込ませられ、目が怖いという理由で星が俺が普段使っているアイマスクの予備を関羽の目に付け足した。これではもうSMでしかない…馬鹿だろコイツ等…一刀は何か身震いしてたし…

まあ自分の力を甘く見ていた関羽が原因なんだが、ここまで落としたのは俺だし、ここまで精神崩壊するなんて思つてなかつた。なんかちょっとぴり罪悪感がある。そしてこの軍に居づらに雰囲気が出来た。洛陽から帰つたら旅に出ようかな…

そんな事を思つていると、天幕内に一刀が入つて來た。

「休んでる所済まない和喜！呂布がお前になら話しても良いって言つてるんだ。聴きに行つてくれないか？」

ノックも無しに入つて來るとは何事かあ！もし星とお楽しみタイム中だつたらどうしてくれんのさ？

見てみろ！星がお前を射殺さん勢いで睨んでんぞ！星さん…そこまで一刀の事が嫌いなんですか？なんか一刀は関羽に嫌われている俺見たいだな。奇妙な四角関係の出来上がつたな。

「分かつた。直ぐに行く。」

多少痛みはあるものの、日常生活には支障がないから大丈夫か。俺は星と一緒に、呂布が捕らえられている牢へと向かつた。

牢に入ると、そこには呂布と一緒に小さな女の子もいた。誰だ？コイツ？

「お前かー！ねねの恋殿をこんな目に遭わせたのは…いくら恋殿が許してもこのねねだけは許さないですぞー！」

会つて早々文句とか威勢が良いな！だがどちらが立場が上なのかハツキリとさせないといけないな。

「おい餓鬼！ピーピー五月蠅いぞ？今お前はどんな立場が分かつてんのか？その気になれば今直ぐにその頭と体を切り離しても良いんだぞ？」

俺が軽く齎すと、女の子は呂布の後ろに素早く隠れた。俺は呂布の正面に座り話の準備をする。一刀達は明日の洛陽制圧の準備の為ここにはいない。ここにいるのは、俺と星と呂布とその後ろで怯えている女の子だけだ。

「じゃあ呂布。董卓について話してもうおうつか？」

「……恋」「恋殿！？」

ん？話伝わってるのか？しかもこれは真名だろ？

「生憎俺は大切な家族しか真名を呼ばない事にしてるんだ。だから悪い。」

「……恋」「れんどのー……」

後ろの女の子が何やら絶望感丸出しで膝を付いている。何がしたいんだ？

「いやいやだから無理だつて！」

「恋の真名呼ばないと円……董卓の事を教えない……」「でんじ

「……」

何たる条件…厳しいな。星を見ると…怒りますな。あと後ろの女子はもう何言つてるのかわからんない。

「なら恋もお前の家族になる…それで解決。」

「…………成る程！呂布よ認めよつーお主が私達の家族になる」とき。」

星が何かを閃いたのか、なんと呂布を俺達の家族として迎え入れたのだ。星の事だ絶対に裏がある。顔がそう言つてている。

「やつだな…呂布よ。お主は和喜の妹だ。これで真名も呼べるぞ…私の真名は星だ！そして私の事をお姉ちゃんと呼ぶが良い…」

「わかった。星お姉ちゃん。」

「グハア！」

呂布からやつ呼べた星は、口から血を吐きだしその場で悶え出す。その顔は幸せそうだった。じゅうがない…

「なら改めて紹介するよ俺の真名は和喜だよろしく…恋…」

「よろしく…和喜お兄ちゃん」

「ガハツ！」

何？この癒し系の生き物は？これは危険物だな取扱注意だ。危うく傷口が開く所だつたぜ…

とんとん

横から突っつかれ、星の方を見る。

「お兄ちゃん…恋ばつかり見てないで星も見てよ…」

「ガハア…」

星のダメージが一番聞いたよ…可憐とかのレベルを越えて…
傷口が開いちまつたじゃねーか…

「済まない和喜。悪ふざけし過ぎた。」

今俺は星から応急処置をとつもらつて…お前は俺の嫁なんだ。
妹じゃない。あれはヤバかった…出来るなら元気な時にもう一度だけ見てみたい…

「ねねもませるのでーー！」

おつと忘れていたぞ。済まないちびっ子。ついでに名前を教えて貰おうかね。

「今変な事を考えてなかつたですか？まあいいです。ねねは陳宮、
真名を音々音といつであります。」

めんじくせー名前…音々でいいだる。
お前は見た感じ娘つて所かな。

「よひしく音々。お前は俺達の娘な。」

「うしてここで何故か家族という物が出来てしまった。決してハーレムじゃないからな！抱くのは星ただ一人だけなんだからな！恋は本当にそんな対象に見れない。音々は色々と問題が多くある。

「なあ星。どんな陰謀でこんな事言つたんだ？」

大体わかるが一応聞いておう。

「愚問な事。まず恋を妹にすれば恋仲になる心配はない！そして恋を三番隊に入れて、更なる戦力強化を図る。そして音々は軍師らしいではないか。三番隊の専属軍師。美味しい話ではないか。」

星…アンタは何を目指してんの？これじゃ確実に三番隊だけで国攻め出来るよになつたぞ…あとそんなに心配しなくても愛しているのは星だけだからな！

うして恋から董卓の特徴を聞いて、軍議をしていた一刀達に渡した。天幕に入るときに劉備が少し俺を軽蔑な目で見てきたが、お前は俺を一度売ったのを忘れたのか？と問うと、今頃それに気がついたのか本気で謝ってきた。この偽善者め…何が徳だよ。なんかコイツ等というのが間違いのような気がしてきた…でも俺を中心にしてこの軍が崩れていつていいからな…だがコイツ等も俺を手放したくないはず。特に軍師の二人。デメリットよりもメリットの方が大きいんじゃ残しておくはず。しゃーねえーなー気合い入れて立て直しますかな！この軍も関羽も！

董卓の救出は一刀と劉備で行う事になった。俺はまだ怪我の関係で動けないからだ。

朝一番で一人は洛陽に入つていいく。勝利条件は他の諸項よりも早く董卓を見付ける事。

俺達は、攻めるフリをしながら辺りを適当に散策していた。

あの時はあんなに栄えていたのに今では廃墟だな…こここの飲茶旨かつたのに…思いでばかり出て来る。ん?ここは…なにやら見覚えのある家が見えてきた。俺の叔父。貂蟬の家、別名オカマの巣窟だ。何となく中に入つてみると、ピンクのパンツが置んであつた。無言で出て来た俺はこの家を取り合えず破壊させた。

することもなくなつたので天幕に引き上げていると劉備と一刀が女の子一人を連れて帰つてきた。

話を聞くと、二人の名は董卓と賈駆といつらしい。一人で隠れながら逃げている所を一刀達に保護されたらしい。これでミッショソコンプリート!

こうして洛陽での反董卓連合は終わつた。結局総大将であつた袁紹は見せ場も無く、ただ煮え汁を飲まされただけだった。

保護された董卓と賈駆は名前を捨て、真名の月と詠として一刀の侍女として働く事になつた。詠はぶつぶつ言いながらもしつかり仕事をしているようだ以外と満更ではないらしい。董卓は思いのほかこういうスキルがかなり凄く、昔は王だったのかと思わせるほどだった。

恋も一刀から將軍をやらないかと言われたが、それを断固拒否し三番隊へと正式に入隊した。これで正真正銘三番隊は最強の先頭部隊へとなつた。

21話 洛陽の決着（後書き）

次はちゃんと書きますから！

22話 離反の計画（前書き）

聞いてくれ……実家に帰つて来てから恋姫もといエロゲが出来ないんだ……理由は俺がパソコンを持つていない。しかし！家にはパソコンが一台……それを持つのは俺の妹ただ一人……妹のパソコンでエロゲする兄……無理だ！

何処に妹のパソコンでエロゲする兄がいるんだ？

ん？このシチュには覚えが……
俺の妹がそんなに可愛くない！

ではどうぞ！

今回は短めです！

「ん~…どないしよ~!…」

徐州に帰つて半年。俺は、ボロボロになつた今後のこの軍について考えていた。関羽は精神崩壊して、使い物にならなくなつたが、徐州に帰つてからは少しづつだが、この半年で動くようになつてきた。何故か俺が関羽のリハビリを手伝つてゐる。取り合えず自殺の心配が無いほどまで回復させた。

一刀に何故俺がするのかと聞いたら、「今の愛紗をまた武人に戻せそうなのは和喜しかいない!」とか言われ、ちびっ子軍師にも、「愛紗さんを正気に戻してください!」

と言われてしまつた。俺は將軍でも医者でも無いぞ…そして偽善者劉備からは避けられているから何も話さない。てか話したくない。

最初の頃のイメージとは全然違つ。幽洲で見た劉備は本当に「徳」「友」「部下」を大切にしているような人物だと思つていたが、これは所詮遠くにいる下つ端の兵から見た感想だつた。近付いてみると「友」の為なら「部下」を躊躇なく売つてしまつような女だつた事には驚いた。今だに俺がこの軍にいる理由が全く解らない。本来なら直ぐに出て行つてやるのだが、ズルズルと今の今までになつてしまつた。

ここまで来たら俺がこの軍を乗つ取るつかと思つた位だ。まあ旅に出てみるのも一つの候補だ。

「どうした？和喜…何やら思い詰めた顔をしているが？」

俺が考えていると、星が部屋に入つて來た。ちなみに洛陽の一件が終わると、何故か俺に部屋が用意されていた。多分俺がここに抱いている不信感の対策の為であろう。俺を逃がしたく無いから一般兵である俺に部屋が用意されているのは軍師達の案なのだろう。そして関羽の世話をさせるところ名田で俺を縛っているのもまた事実。まあ簡単に抜け出せるがな。

「いやあ今後のこの軍について考えてたのさ。今はこの軍が崩壊しかけているのは知つているだらう？」

「確かに。愛紗が使えない今は、使える將軍は私と鈴々しかいない…」

それもあるがまだある。確かに使える軍は星の俺達三番隊。あとは張飛率いる一番隊だけだ。三番隊だけで十分なのだが…

もう一つは最近の劉備への不信感が徐々に軍の中に広がっていると云うことだ。関羽がいなくなつて、劉備のお守りがいなくなり、劉備を説教出来る人がいないから、よく仕事から逃げ出したりする。トップとして失格である。

「うむ…そういえば最近桃香殿の変な噂が立つてているのだが…聞いた話では和喜を愛紗の代わりに曹操殿に売つたとか？もし本当であれば私は今すぐにでもここを出て行くのだが…」

星の言つている事は完全に間違つてない。あの時星がいたら、間違いくこの軍はあそこで終わりを迎えていた。俺も星みたいに直ぐ

に出でいくという考え方を持っていたらこんな事にはならなかつたのだろう…後悔しても仕方がない。

「確かに言われたな。関羽を渡さない為に躊躇なく言つたぞ。」

「なつ！？それならこの軍には用はない。さつさと出て行こうではないか。全く桃香殿…いや、劉備殿には幻滅した…」

星が劉備に対する不信感が爆発したようだ。今すぐにでもここを出て行きそうな勢いだ。まあこの軍には何も未練はないから別に良いが…ただ一つ心残りは親友と離れる事だけかね。

「よし…なら出て行こうかな。行くとしても何処に行く？」

俺が星に何処の国に行くのかを聞いた。袁紹の所だけは勘弁してくださいね。

「つむ…袁紹殿の所は論外だとして、曹操殿の所は百合百合しい雰囲気が出でるからな…普通である私はそこも行きたくない…もう一つは江東の虎…孫策殿だが、あそこは今、袁術殿の客将をしているからな。それ以前にその辯が強すぎて、入る事が出来ん。伯珪殿の所はちょっと…。」

つまり何処に行つても意味がないって事ですね…困つた困つた。

「あつあのお～すみません…話しさ聞きました…それなら良いところがありますよ。」

困つている俺達の所にちびつ子軍師の片割れ、鳳統が入つて來た。そんなにでかい声で話してたか？俺達…あ…星が段々ヒートアッ

「はしてたからな……つづ抜けだつたんだろうな……

「なんと離里ではないか？軍師であるお主がなぜこんな事に助言をする？」「

星が鳳統に詰め寄る。まあ確かに劉備のお抱えの軍師だ。一応俺達はこの軍を裏切るのだから、バレたら処刑？だぞ。でも軍師から提案していくとこことは…まさかっ！？

「はい…私も最近の桃香様には不信感をいだいてました。学院にいた頃は桃香様の「徳」の噂が学院にまで広がり、私と珠里ちゃんは直ぐに学院を飛び出し、桃香様の所に来ました。ですが、朱里ちゃんは気付いてないみたいで、李驥さんを愛紗さんの代わりに曹操さんの所に売った事を確かに聞きました。その時に桃香様の所にこれ以上居られないと思つた時におり一人が離反の考えを持つていたので話しに加わりました。」

明確な理由であること、でも言葉に気をつけた。不信感があるのは本当みたいだが、まだ劉備に従う気持ちがあることが出てるじゃないか。離反するなら真名を呼ばんし様を付けないだろ？だが面白いその案に乗つてやる。

「ほつ…なら俺達三番隊は何処に行けばいいんだ？」

「はい。劉璋さんが納めている蜀が良いと思います。まだあまり知られていない国ですが、そこに行くのが一番じゃないかと…

蜀といえば三国志で有名じやないか。劉備の納める事ででかくなり、曹操の魏、孫策の吳、と一緒に睨み合つていた国じやん！劉備より

先に行つて良いのか？まあいいや…どうにかなるでしょ！

「劉璋さんは兵を欲しがつていて、聞いていると悪い話しだな」と思つます。もちろん私も行きます。」

かさか一緒に来てくれるとは…これで土官場所は問題なくなつたな。あとはどうやって抜け出すかだ…

「…」をどうやって抜け出すかは心配いりません。三番隊の皆で、遠征に行くと行ってそのまま蜀に向かつていいと思つます。曹操さんの所を通らないといけませんけど…」

そんくらいなら問題はない。なんせ大陸最強の三番隊だぞ？負けるはずがない！

「問題ないみたいですね。なら決行は一週間後になります。」

そうこうで出て行こうとする鳳統。あなたに言つてもういたい台詞があるんですね！

「ちょっと待つて…鳳統殿。一つ頼みを聞いて貰えないでしょうか？」

俺の質問にキヨトシとしながら良ないと答える鳳統。ありがとうございます！

「俺が何か質問するんで、その時に人差し指を口元に持つて来て、片手をつぶつて禁則事項です！って言つてもうえないでしょ？かあー…」

そんな事に必死にならなくともと俺を見る一人。だつて声が似てるんだよ？てか一緒に？言つてもらいたいじゃんか！

「ではこきます。」この策は何も裏がありませんよね？」

聞くならギリギリの所を攻めたいじゃん！

「禁則事項です！」

「元に人差し指を持つて来て言つ鳳統。ありがとうございました。お腹いっぱいです。」

こうして俺達三番隊の離反計画が始まった。

誰にも悟られず、一週間を過ぎるのはドキドキした。その間の関羽のリハビリは気合い入れた。そのお陰か関羽は今まで通りにまで回復した。一つ変わったのは「」も更なる強みを求めるべく修業するようになった事だ。そして俺を見る目がなにかキラキラしているようにも感じる…やめてくれ…俺には星しかいなから望みの無い事はないでくれ…

こうして決行の日を迎えた。

22話 離反の計画（後編）

おかしな点は

多々あると思います。

感想お待ちしています！

23話 新たなる旅立ち？（前書き）

更新です！

短めです。内容に纏みに纏んでよつやく書きましたが、何か無理矢理感があります…

沢山の感想を貰つて僕は嬉しいです。これを励みに頑張ります！
ではまた。

23話 新たなる旅立ち？

離反決行の日。俺達は今、城門の前に待機している。向かう場所は表面上は、曹操が立ち上げた魏との国境の砦だ。向かうにあたつて、行く面子は三番隊の全てだ。普段は選抜された者だけが行くのだが、三番隊の全員が行くという、大所帯になつた。手配したのは鳳統だ。まあ今から簡単に言えば裏切るんだから仕方ないがな。俺達が離れる事が分かつてないのか、

「大きな曹操さんの所だもん！ 一番強い星ちゃんの三番隊が警戒しないとね！」

と脳天気な事を言い出した劉備。いくらお抱えの軍師から言われたからつて、全て鵜呑みにするほどのお人よし馬鹿だった事に更に驚いた。

そしていよいよ出発するのだがなんか出発出来ない。理由は諸葛亮と鳳統がなかなか離れないのだ。どつちかと言えば諸葛亮が泣きついている感じだ。いい加減にしてほしい……

「離里ちゃんーお手紙書くから、元気でね！」

「うそ…朱里ちゃん…。私頑張るからー！」

「…」このやり取りから察するに、鳳統は本当に劉備の事を見切り付けたのか？そしたら劉備の事を真名で呼んだりしないはず…何考えてんだ？少し様子を見た方が良いな…。そしてようやく出発の時を迎えた。

「では出発するー。」

星の号令と共に、城門から出でていく三番隊。取り合えずは国境の皆に行き、一週間ほど警備にあたつて、蜀を目指す手筈になつていて。別に蜀に行くのは何ともないが、一番の問題は曹操の魏を通らなくてはならない事だ。別にぶつかる事には問題ないが、あいつ等を相手するのは正直めんどくさい……特にあのデコ女が。何かしら俺にいちゃもんつけてくるからな……奴は関羽と同じか？

徐洲を出てから五日、俺達は魏との国境の皆に着いた。これから一週間一応警備に当たり、その後に蜀に行くのだが、ここで問題が発生した。何と、俺達の見張りが何かは知らないが、三番隊以外にも兵がついて来ていた。これではこれから作戦を伝える事が出来ない……どうしようか……

「あーこの人達も桃香様に不信感をいだいて、一緒について来てくれた人達でしゅ！」

鳳統が囁みながら説明する。

なるほどね……三番隊以外は劉備教の信者だと思つていたが、やつぱり他の隊の中にもいたか。だが信用は出来ないな。

それから一週間、適当な警備も終わり、いよいよ徐洲を出て蜀に向かう日が来た。

「皆のものよく聞け！これより三番隊は徐洲を抜け、蜀に向かう！改めて問う。劉備殿の元へ戻るのもよし！私について来るのもよし！己で考え行動せよ！私について行く者達は後に続け！」

星の言葉に対しても残る者はいないようだ。それ程劉備に対して不満を溜めていたのか、星に付いて行きたいのかは謎だ。そして俺はこの皆の報告書とは別に劉備宛に手紙を書いた。無いよりはこうだ。

『劉備様へ　俺達三番隊は徐洲の軍を抜け、別の諸項に移ります。最近の貴女を見てきましたが、県令としての政務を逃げ出し、仕事もせずに、御使い殿とちちくり合つてましたね？兵達も貴女に対して不満を持っています。そんな貴女には付いて行けません。この手紙が届く頃は俺達はもう居ないでしょう。ではよひなら。三番隊　副隊長　李岱臺』

そして俺達は皆を抜け蜀に向かつ為、曹操の領地に入つた。

曹操の領地に入つて約2時間ほど歩いていると、先に見張りに行かせていた部下が血相を変えて帰つてきた。

「大変です！趙雲隊長！前方より、こちらに向かつて来る軍があります！旗は曹です。」

「うむ…無断でここを通りつている我々なんだ。曹操殿が来るのも当然であろう…。」

部下の報告に慌てもせずに冷静に済ます星。

まあ当然ぢや当然だな。なんせ俺達は違法入国だからな。さて見逃して貰えるかな？打ち首の可能性も否定できない。どちらに転ぶのかな？

しばらく考えていると曹操達がやつて來た。ん？なんかこいつ等め

つさ武装してない？俺達を捕まえに来ただけなら多すぎるだろ！何処かに攻めに行くのか？

「あなた達ここで何をしているのかしら？見た所軍で何処かに向かってるみたいだけど…そして劉備の姿が無いわね？見た所登り龍の趙雲率いる三番隊だけじゃない。でも無断でここを通過てるって事はそれなりの覚悟があるという事よね？」

曹操が霸氣を出しながら俺達に問う。やっぱえげつない霸氣だな…俺には全くだが、部下達も平気そうだな。なんせ、訓練の度に俺と恋の殺氣を浴びてんだ。慣れるはずだよ。

「無断で通っている事は済まない事をしたと思う。だが曹操殿。我々は劉備殿に見切りをつけ、新たな主を求める、蜀に向かう途中。無礼を承知でここは見逃して貰えぬか？」

星が曹操に交渉しているようだが、難航しているみたいだ。中々OKが出ない。んーこのまま打ち首じゃないよな…？

「私がタダでここを通すと思つてゐるのかしら？甘いわね。ここは私の領地、本當であればあなた達は有無を言わさずに処刑なのだけれども、今あなたの軍に仮に暴れられたら私の軍は持たないわ。だから通りたいのであれば、それなりの対価を払つて貰うわ。」

やっぱタダはないか…でも曹操の中での軍は敵に回したら危ないと思つていいことだけ収穫もんかな…

まさか曹操は魏に入れと言わないだろ？俺は嫌だぞ！なんか本能が言つてるもん！噂でも百合つ子らしいから星が危ない！

「本当は通す代わりに李翻が欲しい所なんだけど、本人があんなに嫌がってるからそれは言わないわ… そうねー今から私の領地に攻めてきた麗羽… 袁紹と戦に行くわ。ここを通りたければこの戦を手伝いなさいー そうすれば終わつた後は自由に通つていいわー勿論兵糧も援助してあげるわ。」

曹操はそういうたが、半ば強制であろう。ここは仕方ない、協力してやるかな…

「成る程… 和喜、離里はどう思つ?」

星が俺達に聞いてくる。

「俺は曹操に協力したほうが良いと思うぞ?」

「私もその意見に賛成です。このままコソコソしてて通るより、協力して、少しでも兵糧を貰つてから堂々と通れる方が良いと思います。」

うん。決まりだな。鳳統は軍師らしい意見ですな。

「という事だ。曹操殿。我々も力を貸そう。」

「決まりね。なら付いて来なさい。あなた達には働いて貰つから。」

そう言って曹操は進軍を始め、俺達三番隊もその後に続く。急に入つた袁紹との戦。連合で見たが、袁紹の軍はハツキリ言つて雑魚だろう。數に物を言わせて戦つから兵の質はかなり悪い。相手にならないだろう。

俺達は袁紹軍に向けて進軍を始めた。

23話 新たなる旅立ち？（後書き）

では感想お待ちしております！

24話 戦前の軍議（前書き）

お久しぶり？です！

仕事中に続きを考えていた時に、神風怪盗ジャンヌを思いだし、考
えていると作者の頭に新作の電波が入つてきました。
まあ続編はあとがきで！

ではどうぞー短いですが…

曹操に連れられて来た皆にはもう袁紹軍が陣をひいていた。ざつと見れば袁紹軍は約20万程。こつちの曹操軍は俺達を含めても8万行くか行かないかだ。人数で行けば負けか劣勢だが、こつちは篭城戦で向こうは何も無い。こつちからしては『』で狙えば、ただの的だ。

どうせ袁紹の作戦も「取り合えず攻め落としなさい」。

とか言つてんだろうと思つ。何たる単細胞なんだろつか…良く知らんが連合の時に、袁紹の事を聞いた感じだと思つ。だが、連合の戦いから半年位で20万の兵を準備できるのは流石に名家と言われただけはある。まあ被害がほとんど無かったからと言えるのもあるが…あいつ等はずつと後ろにいたからほとんど何もしていない。主に劉備達が動いていた。袁紹が失つた兵は俺達に送つた五千の兵と少しだけ。

対する曹操も連合の時は前線にいて、だいぶ兵を失つてしまつたが、たつた半年で8万の兵を揃えるのは凄いと思つ。流石としか言いようがない。

さてさて、袁紹が攻めてきた城まで来た俺達一行は、城の中で待機している。袁紹は明日には攻めて来るという事だ。

俺達は現在、天幕で軍議を行つてゐる。参加してゐるのは俺と星と鳳統だ。経験の浅い軍師である音々も連れて來たかったのだが、恋を一人に出来ないと云う理由で参加していない。

「明日、麗羽との戦なのだけれども、何か策はあるかしら？」

「と軍議に出でている将に問う曹操。それよりも曹操の軍の面子の名前を知りたい。曹操とテロ女しかしらんぞ？」

「なあ曹操。その前に一応ここでは戦友なんだし、他の人の名前を教えてくれないか？ちなみに俺は三番隊副隊長の李飴だ。そして隣に居るのは我が三番隊隊長の趙雲だ。その隣は軍師の鳳統だ。」

俺がそう言つと、一人は頭を下げる。
後は向こうの紹介だけだ。

曹操は少し考えて、ここにいる曹操軍に自分を名乗るよつ言つた。
「つむ…私の名は夏侯淵だ。あの時は姉者が世話になつた。ようしくたのむ。」

しつかり者のお姉さんつて感じなのに、テロの妹とは…あれか？姉が馬鹿だから妹はしつかり者になつたというパターンか？ん？そういえばテロ女は分かると言つたが、名前覚えてねーや！夏侯淵の姉と言つたから夏侯惇なのだろう…

「華琳様！私は嫌です！男がここに居るだけでも問題事なのに、名前を呼ばれるとなつたらおぞましいです！」

何かネコ耳フードを被つた娘が曹操に向やら言つていつだがどうも俺を毛嫌いしているようだ。だんだんイライラしてきたがここは我慢だ。

「桂花…私はなんて言つたかしら？良いからいいなさい。」

「…わかりました…荀イクよ！気安く名前を呼ばないで頂戴！」

あー何？この女…マジで何様？そろそろ限界来そう…

俺がイライラしているのが分かっているのか、曹操が少しだけ落ち着いていない。

コイツも無理な人種だな…

そう思いながら荀イクを見る。すると目が合つ。

「何見てんのよ！その汚い目を向けないで頂戴！妊娠するでしょ！」

「桂花！止めなさい…！」

ガン…！

荀イクの罵声を止めようとした曹操だが、俺はコイツに対し我慢の限界が来てしまった。

俺は机を蹴飛ばし、荀イクの首を掴み持ち上げる。

「おい荀イク！テメーが過去に何があつたかは知らんし興味も無い！だからと言つて始めて会つた奴にそんなこと言つな…言つておくが俺達を怒らせるなよ？お前等は俺達を人質か何かと思つてるようだが、俺達がその気になればお前達の軍を壊滅させる事もできるんだぞ？なんなら袁紹達より先に俺達がお前達を潰してやるうか？あつ？」

そつ言つて荀イクを殺氣を放ちながら睨む。荀イクは恐怖により泣いている。過去のトラウマとか知つたことか！俺の行動で、夏侯惇と夏侯淵が武器を構えたが、曹操によつて止められていた。

「和喜…少しやり過ぎだぞ！曹操殿…すまぬ。我が部下が粗相をしてしまった。」

「こつちこそすまないわね…桂花の過去に辛い事があつたから彼女は男性恐怖症なのよ…春蘭と秋蘭も退きなさい。普通はあんな事言われて怒らない人はいないわ。それにしてもやっぱり貴女の部下は凄いわね…」

「まあ、一応元いた劉備殿の所では最強の隊と言われていたからな。」

「どうやらこの一悶着は一応片付いたみたいだ。夏侯惇は今にでも俺に切り掛かりそうな勢いで睨んでいる。」

「困ったわね…桂花がいんじや軍議も出来はしないわ。明日は麗羽との戦だと言つのに…」

そう言いながら曹操は横目で俺を見てくる。

ついでに星も見てくる。お前は悪乗りだろ！そういう星。俺が机蹴飛ばした時、先に自分の飲み物はしつかり避難させてたよね？

う…俺が悪いの？確かに泣かしたの俺だけど元はと言えば苟イクだぞ…！あいつがあんなに罵声を言わなかつたらこんな事にはならなかつたはずだ。

「…分かったよ！明日の戦は俺達三番隊が受け持つ！曹操…アンタの軍からは暴れたい奴だけよこしてくれ。アンタんとこの軍師を戦に出れなくしたんだ。これで許してくれ。」

「何か腑に落ちないけどまあいいわ。なら明日の戦はあなたたち二番隊に任せるわ。明日に私の軍から希望者で出て来た兵を送るわ。なら明日、いい働きを期待してるわ。」

そう言いながら軍議は終わり、俺達は自分の天幕に戻つて行つた。そういや、俺が荀イクにキレた辺りから鳳統はずつとあわあわしてたな…

前書きで書いた続きです！

入って来た電波はこんな感じです！

聖フランチエスカ学院に通う女子高生の星。彼女は海外に単身赴任している父親から貰った蝶のキー・ホルダーを大切にしていた。16歳の誕生日の日、突如キー・ホルダーが喋りだす。そのキー・ホルダー妖精だった。

その妖精はこの世に散らばった魔王の力を封印するべく、やつて來た使いだった。

その魔王の力は物の形になつて、人間の生活に溶け込み、持ち主の人間の邪氣を吸つて魔王の力を高めている。

それは家宝だつたり普通の物だつたりと…

そこでその妖精の力を借りて、怪盗華蝶仮面となり、魔王の力の家宝などを盗み、封印の手伝いをする。

こういった内容です！

書くかは解りませんが取り合えずこの作品が終われば書こうかなあ
ーと思つてます。何時になるか解りませんが…

読者の皆さんのがこの電波を、希望であれば頑張りたいです！

では感想お待ちします！

別話 今日はバレンタイン（前書き）

今日はバレンタイン！

知るか！

ではどうぞ！

別話 今日はバレンタイン

「おい和喜！今日は何の日か知ってるか？」

俺がまだ徐洲にいる頃、余りにも暇すぎて、一刀の部屋に遊びに行つた時だつた。何故か城の中の女性陣は朝から見かけていない。他愛のない話をしている最中に、携帯を取り出した一刀が俺に問い合わせた。

「知るか！ここは中国だぞ？しかも現代とは掛け離れた遙か昔…記念日的な行事も無いし、それ以前に暦すらないだろ！…アホ！」

俺が一刀にそう言つと、何故か一刀は笑い出した。

「ふつふつふ…可哀相な和喜君に良い事を教えてあげよう。今日この携帯はあるイベントを印している！」

「勿体振らないで教えろアホ！」

なんだよコイツは！…さつさと言わんのか？
さつきから気持ち悪い笑い声上げてからに！

「なんと今日は男にとつて年に一度のビッグイベント！聖バレンタインデーなのだあああ！」

「ピシャーン！」

俺の頭の中を雷が走り抜いていくのが分かつた。

ふむ…これは男に生まれたからには見過^レせないイベントだ…生まれてこのかた貰つたチョコは母親からの一つだけ…悲しいね…俺

「ところで一刀君。『先生と呼べ!』……先生…こ^レは現代じゃありません!バレンタインのイベントはまだ無いと思います…ましてはチョコすら無いと思います!」

何か一刀の威張りつぶりにイラつしながらも、このゆうしき事態の対策を二人で協議する。

「正解だ和喜君!この時代にまだバレンタインは存在しない!そしてチョコの原料のカカオはこの周辺には無い!南下してフィリピン辺りに行けばあるだろうが、面倒だ!」

「先生ならこのイベントは見過^レすのですか?」

「クツ男の器を計るX²マーなのに打つ手は無いのか?もつと早く気付けばこんな事にはならなかつたんだが…星から貰いたい!あと一刀笑うなキモい!」

「和喜君…俺がこのイベントをスルーすると思つていたのか?安心したまえ和喜君!既に仕込みはしてある!」

何故か一刀の後ろに後光が見える。お前は男の中の男だよ…

「和喜よ…俺は二日ほど前に、朝議でとある提案をしたんだ。」

そつ言いながら一刀は思い出すかのように、口を開じた。

「ではこれで朝議を終わりたいと思います。
誰か他に何かある人は
いませんか？」

朱里の言葉で今日の朝議が終わろうとしていた。

豈か玉座から出て行こうとした時に、ポケットの携帯が落ちた。たまたま開いたディスプレイには2月11日と記されていた。

時にふと思つた。

桃香達はバレンタインデーを知つてゐるのか?と

「皆ー待つてくれ！一つ聞きたい事があるー！」

俺がそう言つと、皆は席に戻り、俺の話を聞く。

「いやあ、じつでもいい事なんだけども、天の国では三日後に女の子から男の子にお菓子を贈る風習があるんだ。」にはそんな風習があるのかと思ってね。聞いてみたんだ。」

皆を見ていると、なにそれ？みたいな顔をしていた。

「ご主人様。一体それは何なのですか?」

代表して愛紗が聞いて来た。

「これは女の子が好きな男の子にお菓子を贈つて気持ちを伝えるんだ。」

その一言で女性陣から殺氣みたいな物が溢れ出したのが分かつた。しかし鈴々と趙雲さんはどこ吹く風状態だつた。趙雲さんは和喜がいるから貰えないとして、鈴々からは欲しいなあ……でもあの感じだと絶対に貰いたいほうだらうな……

「ご主人様。お菓子は何でもいいのかな?」

桃香が聞いてきた。

「本当にチコなんだけど、ここにはそんなのが無いからね。手作りのお菓子を渡せばいいこと思つよ。」

俺がそういうと、皆は納得した表情で俺を見ていた。

「 じばらく休暇を貰います！――」

桃香、愛紗、趙雲さんは声を揃えて玉座から出て行った。
残つたのは、乗り遅れている朱里と雛里と食べる事を考えている鈴
々と俺だった。

「はわわ～皆さん凄い表情で出て行つたよ！ 行こ～^{離里ちゃん}！ 私達も頑張ろ～！」

「だね～朱里ちゃん。早く行こう～！」

そう言って一人もでていった。

「鈴々は行かないのかい？」

「鈴々は食べる専門なのだー！」

元気が良いこと一鈴々には期待しないでおこう。

「という訳だ！だから最近女性陣を見て無いだろ？彼女達はずつと調理室に籠っているのだよー！」

「一刀よ…俺はお前を尊敬するよー」のイベントを提案してくれた事に！

「よしーなら各皿皿にて待機することー・ぐれぐれも期待している事を語りれるなー！」

「分かりました隊長ー！」

俺は一刀に敬礼をする。

「では解散！後日報告会を開く！ではそれまでわいばー！」

「ついて俺は自室に帰つて行つた。

「和喜！入るぞ！」

自室に帰り、ボケつとしていると星が入つて來た。手には大きな樽を担いでいる。ん？樽？

「どうした星？そしてなんだ？」この樽は？

「これが？本郷殿が今日は、ばれんたいんといいう田らしい。何やら天の国では女が好い男にお菓子をあげるらしいのだ。和喜は知っていたか？」

知つてました！この時期は机の中とかロッカーとか下駄箱を何時も以上に清潔にしてましたから！

「そこで私は和喜に何を上げようかと思ったのだが、中々思い付かなくてな。結局私の全身に水あめを塗つて和喜に食べてもらおうかと思つてな。だから少し後ろを向いてくれ！」

そつ言つて星は服を脱ぎだした。俺は慌てて後ろを向いた。

「和喜いいぞ！」

少し待たされ、星からOKの合図が出て、俺は振り向く。そこには、下着姿で全身に水あめを塗つた星が立っていた。

鼻血出そうです…星さん…それは刺激が強すぎます。

「ん~和喜…早く舐・め・取つ・て。!でないと私はべとべとにな
つちやうせー!」

その一言がトドメになり、俺は星を舐め回した。

次の日、俺と一刀は日に隈を作つて出会つた。聞かなくとも内容が
分かるほど二人は疲れたという事だ。

別話 今日はバレンタイン（後書き）

難航してゐる訳じゃないからね！

感想お待ちしてます！

25話 宮渡の戦い（前書き）

お久しぶりです！

お気に入りが500突破！すっごく嬉しいです！目指せお気に入り1000人

今日は何かアッサリしていますがどうぞ！

25話 官渡の戦い

そーていよいよ袁紹との軍との戦いが始まる。

相手は20万に対してもちは曹操との約束により、三番隊と曹操軍からの志願者で戦う事になつたのだが、曹操の所から出て来たのは夏侯惇だけだった。戦闘狂だから仕方がない。

「見ていて下さい華琳様！必ずや私が袁紹の首を取つてまいります！」

「あらまー。気合い十分ですこと。だがな夏侯惇、生憎お前の出番は無いぞ。さつき志願者を募ると言つたが、袁紹の兵を見ると、俺、星、恋の3人で片付けられそうだからな。

「夏侯惇。張り切つている所悪いんだが、ここは俺達に全て任せてくれないか？敵の兵を見ると、3人で片付けられると思つからさ。

「なつ？たつた3人で20万の敵と戦うだと？お前は馬鹿か？」

俺がそう言つと、夏侯惇は無理だと言つてきた。まあ確かに自殺に行くようなもんだな。だが俺達を舐めてもらつちゃ困る。最強部隊のトップ3だぞ？常識に囚われちゃいかんよ。

あとお前にだけは馬鹿と言われたくない！

「なんとかなるさー。」ひつひつは兵糧を分けて貰つ身なんだ。仮に俺達が負けそつになつても、敵の兵は壊滅的になつてゐるはずだ。」

「春蘭。ここには李翻の言つことを聞いておきなさい。悔しいけれど最強の三番隊の戦いなのよ? 今後は敵になるから、彼等の戦いを良く見ておきなさい。」

曹操が夏侯惇にそう言つと、渋々納得したようだ。

夏侯惇達に俺達の戦いを見せて、吸収出来る所はしそうつていう事だな。夏侯惇や、他の将もまだ伸びるだらうからな。

「ならうそろそろ行こうか? 今から舌戦するんだう?」

「そうね。私達は何もしないけれど、大将は私ですものね。」

そう言つて曹操は馬に跨がり、俺達三人を引き連れて舌戦に向かおうとしたその時。

「ちよつと待ちいや! ウチかて暴れたいわ! なあ畠ちゃんええやろ? じつとい久しぶりに恋と戦なんや、共闘してもええやろ?」

「誰だよ? 関西弁の袴つ子は? 軍議にいなかつたよな?」

「靈。この皆の警備!」苦勞様。簡単に紹介するわ。彼女は張遼。連

合軍の時に手に入れた有能な将よー。」

曹操からの紹介で挨拶する張遼。「えらくラフだな。

「さつき貴女は戦いに出たいと言ったわね…でも駄目よ。この戦は彼等に全て任せたから。春蘭にも諦めもらつたのよ。ビリしてもつて戦うのなら、彼等に頼みなさい。」

そう言られて俺達を見る張遼。恋は久しぶりに会った同僚を見て、嬉しそうだ。

「ええやろ?ウチも参加してもー恋と一緒に戦いたいんやー。」

「恋お前が決めてくれ。星もそれでいいだろ?」

「私は構わんよ。」

恋は頷き、張遼に戦おうと言った。

「恋ーーおおきーー久しぶりに恋の戦いを見れるのはええ」ひかり
「李つひやんもおあかーー。」

それは良かった。恋のOKが出たから嬉しそうにする張遼。

でも李つちやんつて…俺はドラマなんて叩けません！

戦は三番隊の三人と張遼率いる騎馬隊であることになつた。まあ先ずは、袁紹との舌戦だ。イメージ的には安い挑発にも直ぐに乗りそくなつぽい。

そして俺達は曹操の護衛を兼ねて、袁紹との舌戦に向かつた。

「遅いですわよ！全くこの私を待たせるなんて、格式の低い人は常識つて物を分かつていませんわ！華琳さん分かつてますこと？貴女の事ですよ！」

俺達が袁紹の所に着いた途端に袁紹が発した一言。

「んだけ高飛車なんだよ…頭ドリルだし。なんか曹操と微妙にキヤラ被つてないか？金髪だしドリルだし！違うのは小物と大物つて所だな。袁紹からは小物臭がブンブンする。」

「別に私は貴女を待たせた気はないわよ。麗羽。

こつちは貴女をどう料理するか話してただけですもの。何も考えずに突撃ばかりの貴女とは違うのよ。」

曹操はかなりの毒を持つていますな。袁紹の顔が、赤くなつて来ている。

「ふん！ですが、いくら貴女達が策を敷いても、この私の20万の

兵には敵わない事でしょう？なんせ貴女達はたつたの8万。私達が勝つたも同然ですわ！」

なんか負け犬の逃吠えに聞こえるのは俺だけだろうか…あー星も笑つてゐる。

「あら残念ね。私の8万の兵は戦わないわよ。戦うのはここにいる4人と霞の騎馬隊だけよ。」

曹操の言葉で驚いてる袁紹。数では20万対1万位だからな…常識では無謀な戦いなんだが、ここには規格外の猛者が3人いるんだなこれが！星も恋と肩を並べる位になつたし！

「貴女は私を馬鹿にしてますの？20万の兵にたつたこれだけで挑むなんて！猪々子さん！斗詩さん行きますわよ！…つてどうしたのですか？猪々子さん？斗詩さん？」

袁紹がお付きの二人に自分の天幕に戻るよつと言おうとしたが、二人は俺達を見てからずつと震えていた。

「だ、だ、だつて姫！曹操さんの所にこんな人達が付いてたなんて聞いてませんよ！あの三番隊が相手ですよ？人中の呂布に、それを倒した李飈、そしてそれをまとめる趙雲！化け物三人の相手なんでしたくありません！」

袁紹のお付きの一人が半分泣きながらいつている。見事なハモリだ
！俺達を化け物言つな！

「そうですか？ですが、20万の兵でかかればいくら強くてもこの
袁家には敵いません」とよ！

「「そんな姫え～…」」

この二人はいつも袁紹に振り回されてんだな…可哀相に…

「華琳さん！貴女の泣き顔が目に浮かびますわ！袁家に盾突いた事
を後悔するんです事よ！おーほっほっほ！」

高笑いしながら引き上げていいく袁紹。後ろの一人は絶望感があふれ
ながらその後を追っている。

隣にいる曹操からは、すんごい不機嫌オーラが出ている。

「みんな帰るわよ！貴女達！遠慮は要らないわ！あのバカを討ち取
りなさい！」

「ついて、袁紹との戦が始まった。結果は見えてるんだよな…

舌戦も終え、俺達は皆の前に展開している。俺を中心に星と恋が横に、張遼とその騎馬隊が後に控えている。

「よしー星に恋。思う存分暴れようかー俺は袁紹みたいな高飛車は大嫌いなんだ。では行くぞーー！」

俺がそう言つと何故か笑つて星。理由を聞くと何故か面白かつたらしい。なんだよ…

袁紹の軍もこっちに突っ込んでくる。さて最強部隊三番隊の殺戮シヨーの始まりだ！

20万対1万。それは絶望的に不利な戦いだが、それは何処に行つたのか、俺達が圧倒的に有利だ。かなり殺氣を出しているから、殺氣慣れしていない袁紹の兵は殺気に当たれたり、俺達の暴れっぷりで戦意を失いかけている。逃げ出す兵もかなりいる。

あつと言う間に袁紹の軍は壊滅した。

俺達はどんだけ無双なんだよ…自分で驚くだろ…
あとは袁紹とそのお付きだけだな…

探すこと5分。逃げようとしていた袁紹達を恋が捕まえていた。

「よくやった恋ー」

俺は恋の頭を撫でる。可愛い義妹だよー。

「さて袁紹。この戦は俺達の勝ちだ。負けたお前達はどうなるか分かつてるよな?」

「なぜ」の如家である私が殺されなくてはいけないのですか?」

「コイツ…立場つてのをまるっきり理解出来てねえ…筋金入りの馬鹿だろ。

「どうかーどうか命だけは助けて下さーーー!」

押しの弱てうつな娘が助けてくれと言つてこる。その言葉に当然と表情をする袁紹。マジでムカつくなコイツ!

「知ってるか?戦を仕掛けるって事は負けたら命を取られる覚悟もいるんだぜ?そんな覚悟も無い奴が戦をするなーどうなるかわかるよな?」

俺がそう言い、刀を構える。よつやく立場が分かったのか、袁紹の顔が一気に青ざめて行く。後ろの一人は大号泣している。

「じゃあな！」

俺がそう言い、袁紹の首をはねた。その光景を見たお付きの二人は、主が殺されたショックか何かで気絶した。この一人は曹操に任せよう。

これで堂々と蜀に向かえる。袁紹もやっぱり小物だったな。

俺は袁紹の首を曹操の所に持ち帰った。

こつして袁紹との戦いは幕を閉じた。そして三番隊の強さを曹操に見せ付けてやった。

今日は疲れた。早く寝よう。

25話 官渡の戦い（後書き）

真・恋姫で死ぬのは孫策と周瑜だから、袁紹さんにも死んでもらいました。ファンの人はずみません！

やっぱ戦闘は難しい…

では感想お待ちしております！

どうも。今回はかなり短いです…

文におかしな所がかなりあると思います。熱で頭がフワフワしてますので…

でさじいわ…

袁紹との戦いも終わり、とりあえず俺達は曹操の城へ帰還した。

曹操の城に到着して直ぐに玉座に通され、今日の結果を報告する事になった。そこにいたから別に言わなくてもいいんじゃね?と思つたのだが、形式なので仕方が無い。

「趙雲、李驥、呂布。この度は戦の協力に感謝するわ。見事袁紹を討ち取つた事により、彼女の馬鹿げた侵略を阻止する事に成功したわ。」

お構いなく。これで俺達も、蜀までコソコソぜずこ、堂々と行けるつてもんだ!

「敵である袁紹は我が隊の李驥が見事に討ち取り、袁紹の首を持ち帰つてまいりました。」

うおつ?星が敬語を使つてうつしやるではないか!珍しいな。まあ俺達は客将、曹操は王で今は戦果の報告だからな:使うのも当たり前か。

そつ思いながら、袁紹の首を差し出す。

「...確かに袁紹の首で間違いないわね...約束通り、貴女達には蜀までの道のりの通行を許可するわー無論、兵糧も支援するわ。」

「ありがとうございます。」

そう言って、堅苦しい形式のやり取りは終わった。星の敬語とか新鮮だな！ いきなりすぎて、笑いそうになつたのは秘密な！

「そういえば曹操。袁紹を殺した時に一緒にいた将の一人を捕まえたんだがどうしたらいい？」

俺がそう言つと、玉座に縛られた袁紹の所の将が連れて来られた。敗将だからな。運が良ければ、軍に入れてもらえるかもだが、使えないと思われたら死刑になる。一人の表情は絶望的になつていてる。

「嫌よ！ この一人は使えそうにないもの！ 貴方達で何とかしなさい！」

まさか拒否ですか…まあ現時点では使い物にはならないだろうな…おかっぱの方は武に至つてはもう見込みはないだろうが、文官の方では行けるだろう。もう一人の方の武はまだ伸びるだろうな。

二人とも袁紹の所にいた為に中々伸びなかつたんだろう…運が悪かつたな…

さてビデュショウかこの一人。

曹操から拒否されて残された道は死しか残つていないと思つているのか、抱き合つて涙目で震えている。だからと言つて、俺の家族には入れれない。大食いの義妹と活発な義娘がいるからな。

「やついたらお前達、名は何て言つんだ？」

「ア、アタイは文醜つていいます」

「わ、私は顔良です……あの……私達はやつぱり死刑なんでしょうか？」

俺の問いに怯えながら答える一人。顔良は一人の遭遇について聞いてくる。だから本当にあなた達をどうしようか悩んでるんです！

「逆に聞くが、お前達はどうしたい？」

俺がそう聞くと、一人は驚いた顔をした。

「え？…………えつと……麗羽様がいなくなつた今、私達はどうする事もできません……本物の事を言えば、私達は死にたくありません！」

顔良がハッキリとそう答えた。

曹操から拒否され、俺も興味が無い。

「何甘いこと言つてんの？お前達は戦を仕掛けて、公孫策を攻め落とし、此処まで攻めてきて、そして負けた。」

俺はそう言いながら刀を抜く。

その行動で、捕虜の一人は、さっきまでの話の流れで助かると思つていたのか、生氣の出ていた顔から、一気に絶望の顔へと戾される。俺は刀を構え、振り上げる。

「「ひいい」」

二人が悲鳴を上げ、目をつぶっている。俺は一人に向かつて刀を振り下ろした。

体を縛つている縄を目掛けて…

「お前達。ここから立ち去れ！」

俺がそう言うと、一人は目を開け、自分の命がまだある事に喜んでいた。そして、逃げるように、一人は去つて行つた。

俺達も行こうかな。

「さて曹操。そろそろ俺達もここを発たせてもらひついで。」

「そう…行くのね。短い間だつたけれども色々と感謝するわ。あなた達を私の物に出来ないのは残念ね…桂花、今すぐ兵糧を準備しない！」

「はい…華琳さま。」

筍イクにそう指示を出すと、筍イクは出て行った。

コイツはあの時から人が変わったようにおとなしくなったな…まあ俺には関係ないからいいか。

筍イクが俺達に分ける兵糧が準備出来たらしく、三番隊は城の城門にて出発の準備をしている。

「よし！兵糧もじっかりと準備出来たな。ではこれより蜀に向けて出発する！」

星の号令と共に進みだした俺達。蜀までの道のりはあと半分ほど。分けられた兵糧はかなりの量があった。普通であれば足りるであろう量なのだが、うちにはフードファイターがいるため正直持つか分からぬ。恋には少し我慢を覚えてもらおうかな…

そう思いながら俺も足を進めた。

今日はこれが限界かな…

27話　おこやませ繩ー（前編）

えりちゃん

更新ですー。

曹操の所を出てから、一週間がたつた。俺達は兵糧が無くなるところ非常事態に陥っていた。原因は義妹の恋だ。普通の食事では、与えられた分を食していたのだが、足りない分は俺や星、更に部下の兵まで貰っていたのだが、夜な夜なつまみ食いを繰り返していくらしく、蜀を田前に、兵糧が尽きてしまったのだ。

流石に俺と星はこの恋の失態を本気で怒った。説教の最中に時折見せる恋の表情に思わず許してしまいそうになるが、そこは心を鬼にして、恋を正座させて説教をした。それが効いたのか、それからの自給自足では、恋が誰よりも多く食材を確保し、足りない分は我慢することを覚えたようだった。

自給自足生活から五日後、俺達はやっと蜀に到着した。

「やっと着いた…」

まったく長い道のりだったよ…主に食事面で…

俺と星で、蜀王の劉璋に面会に行く事にした。あらかじめ、手紙を送っていたから取り次ぎはスムーズに行くはずだ。

恋、音々、鳳統には兵に食事や休息を取りさせるように指示を出し、城へと向かった。

城へと向かう途中に、街の様子を見ると、そこまで活気があるように見えない。至る所に物乞いなどが田立っていた。この王はやはり無能なのか？私利私欲でここを治めているのか？

「「これは酷いな…」

星も「」の街の様子に顔を歪める。

城の入口にいる兵に取り次いで貰い、許可が下りたようで、中へ通された。

俺達は直ぐに玉座に通され、劉璋との面会が始まった。

「お前達よく来たな。ワシはこの蜀王の劉璋だ。お前達の士官を歓迎するべ。」

劉璋から歓迎の言葉を受ける。見た感じは普通のオッサンだった。だが何か腹の奥に黒い物を溜めていそうな雰囲気もある。

「はっ！劉璋様に歓迎を受けた事に嬉しく思います。我が名は趙雲、隣にいるのは李飴と申します。我々は少しばかり名が売れている義勇兵です。それなりに武には自信もあります故…」

星の普段見られない言葉遣いに新鮮味を味わいながら、二人で頭を下げていた。

「「うむ…それよつも、趙雲とやら、顔を上げいー」

俺は？？？と思ひながらも上げずにそのまま待機する俺。「」のオッサンは何するつもりだ？

「美しい……真に美しい！趙雲やー義勇兵を辞めてワシの妻にならぬか？何、心配することは無い。贅沢な生活を約束しようぞー・ワシに真名を預けるがよい！」

「何だと？このオッサン星を口説いてやがる！何様だよ？王様か！なんてのはどうでもいい！終いには真名まで要求してきたぞ？舐めてんのかコイツは…」

「俺がイライラしているのが分かったのか、星が小さな声で落ち着けと言つてきた。

「申し訳ありません。劉璋様。私は武人故に私の生きる道は戦いしかありません。真名に関しては、男には私の心に決めた者しか呼ばせておりません。どうかお許しを。」

星が劉璋に謝罪をいれている。劉璋ーざまあみろ！お前みたいなオッサンに星が振り向くものか！俺達の絆は鉄壁なんだよ！

「ワシの申し出を断るというのか？…………まあ良い。時間はたっぷりとある。どれ趙雲。しばしワシと食事でもとりながら一人で話さぬか？遠慮するでないぞ！既にお前はワシのだからなー！そして李翻と言つたな？貴様何時までここにあるつもりだ？さつと出て行かぬか！」

「この糞オヤジがあーーー今すぐ殺してやるつか？」

何で星はお前の物なんだよ！？

俺と星との態度が雲泥の差じゃねーかーわざから星を口説きやがつて！今すぐ殴りてえ…

恋達を連れて来なくて良かつたな…もしソリドにいたらどうなつたか分かつたもんじやない…

「申し訳ありません劉璋様。私も長旅の疲れで直ぐに休みたいので、兵の宿舎に案内してもらえぬでしょうか？」

星が劉璋の誘いを華麗にスルーして宿舎に案内するよつて申し立てる。

「何を言つておるのだ？趙雲よ。お前の部屋は別に用意するが。これからワシの妻になるのだからな。あんな宿舎に寝泊まりされてしまう困る。李讎とやら、もう一度言つ。さつわと出て行つて外にいる侍女に案内してもらえ。」

コイツは星から相手にされてない事に気付いてないのか？王だから全てが許される、思い通りになるとか勘違いしてないか？王ってやつは下の者が認めてこそ初めて王になるつて事をまるで分かつてないな…

「劉璋様…部下と同じ生活をし、部下との信頼を築いてこそ、初めて隊長が務まります。私だけが特別などいけませぬ…」

星…俺その言葉で何か熱い物が込み上げてくるよ…向こうでは普通に城にいたけど。

劉璋の近くは断固拒否なオーラが出てるよ。

「ならぬ…お前はこの城にいるのだ…これはワシの命令だ…」

「うとう王の権限を使いだしたよコイツは…小さな男だ。

「……………分かりました…なにまじばし時間をくだされ。部下にこれから話を話して来ますので…」

星が劉璋に振り向いて答える。振り向く直前に見せたすつごい嫌な顔をしていた星。後で愚痴を聞いてやるからな。

「戻つて来るのならそれで良い。なら行つてまいれ…必ず戻つて来るのでぞ…」

劉璋から念を押され、出でいく俺と星、星からもイライラしているオーラが出ている。

「あーつー何なのだあの男は？あれほど嫌だと言つているのに、全く話しが通じない！私を舐め回すように見てくる視線が気持ち悪い！本郷殿から見られてた時より不快感があつたぞ！」

侍女に宿舎に案内されて中に入り星が発した第一声だ。お前は美人だからな。

あのオヤジは星をそんな目で見てたのか……あと一刀、お前も星をそんな目で見てたのか……

「あの時、劉璋に飛び掛かろうとした和喜に落ち着けと叫ったが、私もあの男に刃を向けそうになつたぞ！」

めつちや出でたよね。俺も星も良く我慢したよ……初日でこんなだからこれから先、どれだけ我慢できるか不安だ……士官先間違えたなこれ……

「はあ～……これからあの男の近くで寝ると考えただけでも鳥肌が立つ……私は和喜と一緒に寝たいのだ！よりによつて……貞操の危機かも知れぬな……私の身体は和喜の物だと叫ぶのに。」

俺だつて一緒に寝たいさ！

でもあの男は星を本氣で妻にしようと思つてそつだしな……まああの男が星に迫つて来ても、星だつたら直ぐにボツコボコに出来そうだしな。その時は王とか関係ない！

「お前だつたら無理矢理迫られても、ボツコボコに出来るだらうへ？」

「私を誰だと思っている？最強の武人、李岱薦の女だぞ？当たり前

に決まつている。それよりも今後の事を教えとかないといけんな。
恋、音々、離里、ちょっと来てくれ！」

星の呼ぶ声に三人はやつて来る。

「お姉ちゃんどうしたの？」

「まま上ー。どうされたのですか？あー。ぱぱ上も一緒にー。」

「一体何ですか？」

上から恋、音々、鳳統だ。

俺達は音々から、まま上とぱぱ上と呼ばれている。音々は幼い頃に両親を失い、親戚の家をたらい回しにされていて、親の愛を知らぬいらしかつた。それを聞いた俺達は義娘に迎えた時に、両親からの受けた愛情を音々にも教えたいと思いそれから家族として恋と共に生活をしていた。最初は戸惑つていたのだが、次第に慣れていき、いつの間にか俺達をまま上とぱぱ上と呼ぶようになつていた。自然にそう呼ばれた時は、一人で涙したものだ。

「うむ…実はな…私は何故か劉璋に気に入られてしまい、私だけ城で生活しないといけなくなつてしまつたのだ…」

「音々はいやなのです。まま上とぱぱ上とお姉ちゃんと一緒に寝るのが楽しみだつたのにー。」

西田 一杯に涙を溜めた音々が大反論する。
恋も怒つてこむようだ。

「私だつて嫌なのだ…望む物ならいい居たい。だが安心しするのだ。睡眠以外はここにこむからな。あとどうとかしてここで寝れるようにもする。その時は思う存分甘えるのだぞ音々。それまでは和喜と恋と離里に甘えてこむがいい。」

星の言葉にぐずりながらも頷く音々。
あ～家族つていいなあ…

「やして離里。お主には私がいなー時は兵の管理は任せたぞ。」

「ひやーいー分かりましたー！」

星と音々のやり取りに感動していたのか、急にふられビックリしてこむ鳳統。

「では皆、かなり不本意だが、行つてくるよ…恋に音々ー。ちゃんと歯を磨いて寝るのだぞー！ではお休みー。」

「音々さんと離くのですー。お休みなセーですー。まー上ー。」

そう言って、出ていく星を見送る俺達。
こうして、蜀での始まりは星と引き離される最悪な形でスタートした。

27話 おこやませ駆ー（後編）

昔々の言葉遣いがおもいだせん…

次回は星にまよひ田に合つてもうこます！

ヒロインだからこそ、あらゆる山を越えてもうればねー！

感想まつりやー！

28話 心の崩壊と…（前書き）

びつめです！

今回は多少性的表現が含まれています。

星ちゃん…

文章がおかしいかもしれません、よろしくです！

俺達が蜀に来て、約3ヶ月。俺は劉璋から嫌がらせの如く、長期任務をやらされていた。まるで、星から離されるよう…もう一ヶ月ほど会話を交わしていない。任務が終われば直ぐに次の任務が始まること。

そして、今日も蜀の城から離れた場所で、黄布党の残党を殲滅している所だ。最近感じるのは、任務の度に兵の数が減らされているのだ。そして、将は俺のみで行くのがかなり多い。星が参戦したのは最初だけで、それ以降は参戦しなくなつた。

今日からの黄布党の残党の討伐はどうにかして劉璋に頼み込み、家族と鳳統と一緒に連れていく事ができた。

しかし、星は来ていない。いくら頼んでも劉璋は首を縦に振る事はなかつたのだ。

そして、目的地に着いたのはいいのだが、城を出てから何やら嫌な予感がずっとしているのだ。虫の知らせつてやつなのか、星の身が危ない気がする…

城に帰ろうと思うのだが、俺達の見張りが何かで、劉璋直属の兵が同行している為に中々チャンスが無い。日が落ちた時に、行くしかないか…

そして、日が落ちて俺は、家族と鳳統を呼び、劉璋の密偵に気をつけながら、俺が帰る事を伝えた。

俺は、何とか誰にも気付かれず、陣から抜け出し一人で蜀に向かった。

俺は今自分が出せる最高スピードで走つて帰つている。俺の第六感が早く向かえと絶え間無く警報を鳴らしている感じがしていたからだ。

それから蜀に着いたのだが、5時間程ノンストップで走り続けてた為、足が悲鳴を上げていたのだが、鳴り響く警報が星の身の危険を告げていた。震える足に無理矢理力を入れる。城の見張りの目を盗み、城の中に入つたのはいいが、星が何処にいるのかが分からぬ…

「嫌アアアアーー！」

俺がどうしようかと考えていた時に城に響く女の悲鳴。この声は間違ひ無い…星の声だ！

あの男とつとつ星に何かやりやがつたな！

俺は疲れなど忘れて、悲鳴が聞こえた場所に向かつた。

城の中には何時も以上の見張りがいた。その中で兵が頑丈に固めていた場所を発見した。

此処に間違ひない…

俺は見張つていた兵を刺した。星に手を出したんだ…劉璋と共にも消してやる…

俺は見張つていた兵を皆殺しにし、星と劉璋が居るであろう扉をぶち破つた。

部屋の中に入ると、そこには田を疑う光景が広がっていた。

まず飛び込んで来たのは、裸で寝台にいる劉璋だ。俺が此処にいる事に驚いている様子だった。

何故コイツは裸だ？情報の処理が追いついていない頭で、劉璋の下に田をやる。そこには、

生氣を失ったような目をした星がいた。手足を縛られ、衣類を脱がされ、その上に劉璋が重なっていた。
答えはそれだけで十分だった。

ブチン！

俺の中の何かが切れた。

「テメエー星に何してやがる！」

俺は劉璋を蹴り飛ばし、星から引きはがす。

星を良く見ると、所々に殴られたような跡があつた。顔は涙が沢山流れている。俺は縛られていた縄を切り、星の手足を自由にし、上から服を被せた。

「何故貴様が此処にいるのだ？ワシが帰つて来れぬよつて遠方に出したはずだが？」

俺は答えない。ゆっくりと近づきながら、刀を構える。

「きつ貴様…ワシに手を出したらどうなるか分かってるのか？ワシは此処の王だぞ！貴様は反逆罪で死刑だ！誰かおらぬか？この者を捕まえろ…」

「それがどうした？テメエの部下は誰も来ねえよ！全て始末した。残るは貴様だけなんだよ！俺の家族に手を出しあがつて！星の受けた傷はどれだけの物か分かるか？死んで償え！」

俺は刀を振り下ろし、劉璋の首を跳ねた。

一気に頭に昇った血が下がる。星は大丈夫なのか？

俺は星の方に振り向いた。星は身体を起こし、俺を見ていた。だがその目は光が無い。まるで俺が誰だか分かっていないような感じがした。

「星…大丈夫か？」

そう言いながら星に一步近づく。

星はそれにビクリと反応をして恐怖に満ちた目を向けてくる。

「嫌…来ないで…」

星から絶対の言葉。俺の心に突き刺さる。

どうすれば良いのか分から……ただこれだけは分かる。ここで俺が部屋から出ていくのは絶対にダメだ。このままにしていれば、星は一度と立ち直れない。

俺はそう思ひながらも、また一步星に近づく。

「やだ……来るな……来るな……来るな……来るな……私に近づくな！」

星はそう言いながら、辺りにある物を投げて来る。何かが俺の顔に当たる。血が吹き出しているのが分かるが俺は気にせず星に近づく。

「嫌……助けて……和喜……」

その言葉を聞いて俺は星を抱きしめていた。星は俺を求めてる。その時、星が俺の首元に噛み付いて来た。思いつ切り噛み付いていいののか血が流れて来る。星の心の傷に比べたら大した痛みじゃない。

「星。俺だ……近くにいてやれなくてごめんな……俺ずっと側にいたらこんな事にはならなかつたのにな……」

綺麗事しか言えない自分に腹が立つ。

気が付けば俺も泣いていた。星を守れなかつた自分の甘さに……

どの位たつただろ？ 時間の感覚は分からぬ。ただ星を救った
い。俺の気持ちはそれだけだった。その間もずっと星を抱きしめて
いた。

「かず…き？」

その時、星から俺の名前が聞こえた。星を見ると、無くなっていた
目の光が僅かに戻っていた。

「ああ。俺だ！ 分かるか？ 星？」

「うん… 和喜… 私… 汚れてしまつた… あの男が私の…」

「星… それ以上言つな！ お前は汚れてなんかいなー！」

涙を流しながら言つ星を俺は止める。

「だが… 私は… あの男に…」

「お前は綺麗だ！ 俺を純粋に想つてくれているんだー！ 汚れるはずが
ない！」

「…と言えばいいのか分からぬ。ただ自分を否定している星を見たくない。ただそれだけだった。

「和喜…私はこれからも和喜を愛していくいいのか?…こんな私でも和喜は受け入れてくれるのか?」

「当たり前だろ!…何回も言わせるな!…これからも俺は星を愛してるよ!…」

そう言つと星は抱き着いてきた。俺は星の頭を撫で続けた。星は安心し、落ち着いたのか、寝息を立てはじめた。とりあえず宿舎に連れていくか。

俺が立とつとした時、誰かの気配を感じ、慌てて臨戦体勢を取る。

「いやあ良い物を見せて貰いましたよ。まさか壊れた心を取り戻すなんて、感動物ですねえ…李岱臺。」

突如現れた男に緊張が走る。

「テメエは何者だ?」

「目見て分かる。コイツは危険だ…星を守りながら戦えるか?…見た感じ、俺と五分か…もしくはそれ以上だ…

「おつと。そんなに警戒しないで下さご。挨拶に来ただけですよ。私の名は千吉。以後お見知りおきを…私はただここに転がってる男の欲望を増幅させただけですよ。」の太平妖術の書で…」

そう言つて、劉璋が着ていたであるつ服の中から一冊の本を取り出した。

「これは妖力の塊でしてね…私はこれでこの世界を終わらせる使命があるのですよ。」

「今ここでそんな事言つていいのか？俺がテメHをここで切れば終わりじゃねーか！」

俺はそう言つて、千吉に切り掛かる。だが切つたのは奴の虚像だった。

「フフフまだ機は熟していません。今日はここで引かせて貰いますよ…また会いましょう。次は貴方の血を貰いますよ。では…」

そう言いながら消えて行く千吉。気配を探つても、既にここにはいない。まるで最初からいなかつたかのよつて…

28話 心の崩壊と…（後書き）

敵登場！

さてこの後どうすつかな…
星ちゃん視点書いたが良いかな？書いたらかなりヤバい表現が満載になりますが…僕は余りやんわり書けませんので…ストレートになつてしまいますが…

感想お待ちしています！

ボーズです。

前の話でこの小説を読んでいる読者の皆様にかなりの不快感を与えた事を深く反省しております。

申し訳ありませんでした。

これからもボーズをよろしくお願ひします。

星の受けた心の傷のケアにしばらく時間を費やし、ようやく復帰してきた。あの時も心を取り戻したが、やはり夜などは恐怖により怯えている時多かった。俺は関羽の時以上に必死に看病をした。星が復帰した時は心の底から泣いて喜んだ。

その時の国の運営は鳳統に任せていた。王がいなくなつたこの国を捨てるのも良かつたのだが、残された民の事を考へるとそんな事は出来なかつた。鳳統にはかなり無理をさせたかもしれない。…

星も落ち着いて来た時に鳳統が持つて来た劉璋が行つていた政事の台帳を見たのだが、出るわ出るわの不祥事の嵐！豪族からの献金でその豪族のする事を見逃すという書類や、奴隸市場の顧客リスト等々…

勿論この不正に携わっていた輩は一人残らず肅正してやつた。久々に忍しのをつての暗殺をだ。

そしてその劉璋を殺したと言つことは今この蜀には王は存在しない。生憎劉璋には世継ぎに恵まれていなく、劉璋の血筋は途絶えた。

今俺達の問題は蜀を捨て、新たな地を求める旅に出るか、それともここに残り、誰かを王にして蜀を納めるかだ。

今それを話し合つてゐる。と言つても俺は星の為にここを出て行きたく思つてゐる。嫌な記憶しかなこの地は見切りをつけないとな思つてゐるのだが、星は、何故か出て行かなくていいと言つて

るのだ…

「わつ私もここに残つたほうがいいと思ひます。誰かの下に付くより、自ら国を納めたほうが王に不満も持たないと思つので…李驥さんが蜀を納めれば安定すると想つので。」

と鳳統が言つてゐる。ちょい待ち！俺がここを納めるだと？無理なこと言つうなー経営学とか待つたく知らんぞー！？

「待つてくれ鳳統！俺は国の動かし方なんて知らないぞ！」

「それは大丈夫です！昔水鏡先生の塾で朱里ちゃんと一緒に色々学びましたから。」

「う～む…それでもなあ…俺は血の氣が多いから外交でも何かあつたらキレそうだし…どうしよう…

「いいではないか和喜。私は大歓迎だぞ！外交などは私に任せせるがよい。」

「う～ん…分かつた！出来るだけ頑張つてみるぞー！」

「ひつて俺は蜀の王として、スタートした。

「申し上げますー只今城に黄忠と名乗る者が訪ねてまいりましたー」

話し合いも終わりになる頃、軍儀中の部屋の中に兵が入って來た。

黄忠？誰だ…？えーと確かに史実では劉備の配下だったよな…关羽、張飛、馬超、趙雲、黄忠…で確かに何とか將軍つて奴だったよな…忘れた。

「分かつた。通してくれ。」

しばらくすると玉座に大人びた女性が入つて來た。

うおっ胸デカ！

俺がそんな事を思つてゐるのが解つたのか、俺の背中を思いつ切り抓つてきた。

星…あの時から嫉妬が大きくなつてないか？これは男の性だぞ…

「あら？貴方達は？劉璋様は何処に行つたのかしら？」

黄忠という女性が聞いてきた。そうか…劉璋を殺した事はまだここだけの話で、誰も知らないんだつた…

てか俺達の存在も誰にも知られて無いからな…派手に動いてたはずなんだが…

黄忠と言つ女性は俺達に警戒しながらも、中に入つて来る。流石は何とか將軍の一人、隙が無いな…

「初めまして。私は劉璋に仕えておりました兵の李飴と申します。」
「こちらは趙雲、呂布、陳宮、鳳統です。」

そう言つて皆でお辞儀をする。

「あら。『十寧』。私は黄忠と申します。先程も言いましたが、劉璋様はどちらへ？」
やはり正直に言つべきか…どうしよう…いや…

「私が劉璋の事を色々と調べて行くうちに、彼が犯していた度重なる不祥事を掴みまして…このままではこの国は滅ぶと思つた私は、関係していた豪族と共に王と言つ立場もありましたが、処刑をいたしました…」

「あら? そつなの? 私も彼の所業にはつんざりしていたのだけれども、彼はもう居ないのね? よかつたわ。」

黄忠さんは劉璋の事が嫌いだつたようだ。

まあ王という立場を利用して、国を私利私欲にする奴だし当然ちゃ
当然なんだが…

「と言う事は次の王はあなたがするのかしら？」

「はい。誠に勝手ながらそう決めました。ご不満であれば、貴女も
交えてもう一度話し合いますが？」

そう言って黄忠さんを見る。

「大丈夫よ。見た感じあなたは劉璋と違つて、民の事を優先に考え
そうだわ。周りのお仲間さんもあなたを心から慕つて いるみたいだ
し。」

「仲間じゃありませんよ。ここにいる皆は俺の大切な家族なんで…」

俺は誇らしげに黄忠さんに言った。これだけは揺るがない俺の信念。
家族は絶対に守るという事。

「ふふ。やつぱりあなたは良い人ね。蜀を任せても良いみたいね。
なら私はこれで失礼させてもらつわね。娘が待つてゐるから。」

黄忠さんはそう言つて出していく。

黄忠さん…貴女は人妻でしたか。てか子供産んでこのプロポーションは反則じゃね？確かに母さんもスタイル良かつたが、黄忠さんは別格だな…

てか、用事は良かつたの？

「なあ和喜…黄忠殿は子がいるのにあの身体は反則ではないのか？私も子を産んでもこの身体を保ちたいものだ…」

「星さん！貴女なら出来ますよ！だからさつきから背中を抓つている手を離して下さるませんか？俺は黄忠さんをそんな目で見てないから…ねつ！」

「そついや鳳統、黄忠さん以外でも、不正をしていな属城の主はいるのか？」ヒリヒリする背中をさすりながら鳳統に問い合わせる。

「はい。あとは厳顔さんだけですね…あとの人達は全て何かしらの不祥事に携わつていましたから…」

腐つてゐる…あんなに属城があつたのに無関係の人人が黄忠さんと厳顔つて人だけなんて…
やっぱ俺がどげんかせんといかんな！

それから大変だった… まずは鳳統から国の経営学を学び、鳳統のフオロー無しで出来るようになるまで囁き込まれた。

そして、高すぎる税の緩和や見よりの無い子供に対し孤児院を作つたり、商人が商売しやすいように市場的な物を作つたりなどでかなり忙しいかつた。思つた事は劉璋は無能だったと言つことだ…

少し落ち着いた所で、まだ会つた事の無い厳顔つと言う人を城に呼び出した。本当は出向く予定だったのだが、本人がこちらに来ると言つ事だ。

「ほう…お主が紫苑の言つていた新しい王の李飄か？劉璋のオヤジと違つて良い顔つきをしておるではないか！」

と言つて俺を見ている。

かなり気さくな人だな… そしてこの人も胸デカつ！

星さん冗談です… そんなに睨まないで下さい…

「ありがとうございます。黄忠さんにも言いましたが、勝手に私が

王としての力を納めると決めましたが、厳顔さんは宜しいですか？」

「なあにー。紫苑が認めたんだ僕も認めんでどうする？それに民からも評判が良いみたいだぞ！」

「おお……それは初耳だ。民達がそんな事言つてんのか……かなり嬉しいね。」

「あつがどつぱります。これからもよろしくお願いします。」

「つむ。では僕は戻るが。カワイイ弟子をみつちり鍛えんといがんのでなー。」

やつぱり出てこへん。厳顔さん。終始元気だつたな……

いつして属城の黄忠さんと厳顔さんにも認められ、正式な王として俺は蜀を納める事になつたのだ。

次はいよいよ...

30話 訪問者達（前書き）

回りない頭で書きました。せつせつ書つて矛盾している所が沢山あると感じます。

えり△...

俺が蜀の王になつてから大分国的情勢も落ち着き、安定した国になる事が出来た。そしてこの中国大陸は俺が治める蜀、曹操が治める魏、孫策が治める吳の三國で成り立つていた。

まさかこの俺が王となつて国を治めるなんて思つてもみなかつたな…父さん…母さん…見てる?俺が国を持つなんて思つてなかつただらう?

と言つてもまだ鳳統に細かい事を教えてもらひながらなんだけどな…やつぱ国を動かすのは難しいよ…

俺は背中を伸ばしながら、今は亡き両親を思つ。

「失礼します。李翻様!黄忠様から手紙が届いております!」

入つて来た兵が黄忠さんからの手紙を持つて入つて来た。
ん~?手紙とは珍しい。

でも何かしら嫌な予感がビンビンする…開けてはいけないパンドラの箱みたいだ…

そう思いながら黄忠さんからの手紙を開ける。

『李翻様へ。王としての政務お疲れ様です。李翻さんが王となつてからはこの蜀の地が潤い、民も喜んでおります。

話しさは変わりますが、先日私の城の方に軍に追われて逃げてきた人達が訪ねてまいりました。その人達は李翻様の知り合いだと名乗

つております。得に怪しい人達ではなさそうなので、厳顔と一緒に連れてまいります。追伸 この手紙が届く頃には私達も城に着く頃でしょう。』

ちよつと待てええ！黄忠さんはあんまりだよ…手紙の内容から絶対に来るのは一刀達だよな…うーむ…許可を待たずに入れる事は俺が拒否するのが分かつてて事だな。

多分、諸葛亮か何かの助言に違いない…無理矢理に訪問して面会せざるおえない状況を作る。ましては蜀の将軍である、黄忠さんと厳顔さんを引き入れて来るなんて…あいつ等こを侵略する気なのか？もしさうならさせないぜ！

俺は直ちに星、恋、音々、鳳統を呼び、簡単な軍議を開いた。

そして俺達は蜀の入口の前に陣を張り、今から来る来客を迎えようとしていた。

それから約2時間後、蜀に向かつて来る一団を確認した。やはり劉備達も確認できる。

「あら？李翻様。何故このよつた武装をしているのですか？」

黄忠さんが目の前に来て質問をしてきた。

その疑問は最もなんだが、俺達には劉備達を迎えたくない理由があるんですよ。

諸葛亮はそれが分かつていて、黄忠さん達を引き入れて蜀に来たのだろうけれども、俺達が素早く軍を展開した事は予想していな

かつただろう。

「すみません黄忠さん。俺達は劉備達を迎えたくない理由があるのですよ…」

「そうなの？詳しい事は桃香ちゃん達から余り聞いてないけれど、どうにかならないかしら？彼女達は曹操から徐州を攻められて、何処にも行く宛てがなかつたの…それで蜀を治めている李飴様が昔、桃香ちゃん達の仲間だと聞いて、受け入れてくれるだらうと思つたのだけれど…」

確かに昔は仲間だった。だが俺達は劉備の低墮落な行いに嫌気がさして出て行つたんだ。劉備以外は受け入れてもいいが、劉備はな…まず星が反対するだらう…

「黄忠さん…劉備達、將全員をここに連れて来てくださいませんか？話しかけてみたいんで。」

俺がそう言つと、黄忠さんは解りましたと言つて劉備達の所に戻つて行つた。

そして、俺達の前に懐かしい顔が並んだ。初めて見る顔もちらほらあつた。

劉備を見た時に星からただならぬ雰囲気が出ていた。

「久しぶりだな劉備。聞いた所お前達は曹操から徐州を攻められた

らしいな。」

俺が少しだけ威圧感を出しながら劉備に話しかけた。

「お久しぶりです…李驥さん…曹操さんに徐州を取られてしましました…これからみんなと沢山の笑顔を作つて行こうと思つていたんだけど…」

劉備は悔しそうな顔で俯いている。

「李驥さん達が徐州を出て行つてから、私がどれだけ甘かったか良く反省しました…私がこんなだつたから李驥さん達は出て行つたんだと思って…あの残されていた手紙を読んでから、必死で朱里ちゃんから勉強を習いました…だから李驥さん！私達をここに迎え入れてくれませんか？」

劉備は力の入つた目で俺を見てきた。

確かに変わつたような気がするな…

俺がそんな事を思つていると、俺の横を星が横切つて劉備の前まで来た。

パン！

突如鳴り響く乾いた音。

星が劉備の頬を叩いた音だった。

「劉備殿…私達がお主の所から出て行つた理由はそれだけでは無い！思い出してみるといい！連合の時にお主は曹操殿に愛紗の代わりに和喜を差し出したのだぞ！考えてみろ！本郷殿が自分の知らない所で、誰かに売られていたとしたら…お主はそれをしてたのだ！」

星が劉備に俺を曹操に売つた時の事を話していた。

劉備は今その事に気が付いたのか、目を見開いていた。

「そんな…私は…気がつかなかつた…星ちゃんごめんなさい！」

「私の真名を気安く呼ぶなあああつ！…」

そう言つて星は、劉備に向かつて龍牙を振りかざした。そこに関羽が星の攻撃を割つて止めた。

「どけ！愛紗！私はこの女を許せない！愛しい人を知らない所で売られかけたのだ！」

「落ち着け星…ここで桃香様を斬つても何も得る物は無い！」

そう言つて二人は対峙する。

関羽はかなり成長したと思う。星の本気の攻撃を止める事ができたんだからな。

そんな悠長な事考えていろの場合じゃないな…

「星。確かに劉備がした事は無意識で言つた上に立つ者として許せない事だ。だが落ち着け。」

俺がそつと、星は渋々武器を下げ、俺の横に戻ってきた。

「劉備殿…お主に預けた私の真名を返してもらおう。次私の真名を呼べば命は無いと思え。」

星はよほど劉備の事が嫌いになつていて

「李驥さん…私が何も考へないで…愛紗りちゃんの事ばかり考へて…せ、趙雲さんの気持ちも全く考へてなかつた…ごめんなさい…」

劉備が泣きながら俺にあの時の謝罪を伸べている。
何を今更…

「さてと…今お前達は俺が治めているこの蜀の侵略者だ。王としてこれは見逃す事が出来ない！従つて俺達はお前達を迎へ撃つ。ただ俺の部下達はは出ないぞ。お前達を迎へ撃つのは俺達三人だ！お前達は全員でかかるつてこい！」

そう言つて俺達は武器を構える。無論殺す氣は毛頭に無い。唯一の

不安は星が劉備を殺つてしまわないかだ…

ただいくら待つても向こうは戦闘体制には入らない。

すると一人の女が前に出て来た。髪の色が一部分だけ白い。

B「じゃね？初めて見る顔だな…劉備達の新参者か？

「私の名前は魏延！いくら桔梗様がお前の事を認めようとも桃香様を泣かせる者は王でも許さん！その首貰い受ける！」

「何故です桃香様？この男は確かに蜀の王ですが、桃香様を泣かせています！そしてこの男がそんなに強そうに思えません！」

魏延が俺に攻撃を仕掛けようとした時に劉備が止めた。

「魏延さん…あんたの目には俺はどう映つてんだよ…泣かせたのは星だからな！ん？でも俺に泣いて謝つてたから俺なのか？」

「魏延さん。私が代わりに説明します。あちらにいる三人はかつて私達が独立した時の最強部隊でした…

一人で攻めれば軍を壊滅させ、三人で攻めれば城を落とし、軍で攻めれば国を落とせるほどです。得に蜀王である李翻さんは本気になれば一人で国を落とせる程です…」

諸葛亮ちゃん。ちょっと俺達を過大評価しそぎなんじゃないのかな?
?でも言われてみれば、確かに俺達三人で出来そうだよな..
現に俺は蜀を治める事になつたし。

「更に言えば今私達の将で星さんや恋さんと対峙出来るのは、李翻さんから指導してもらつた愛紗さんしかいません…だから私達はたつた三人でも攻める事ができません…」

諸葛亮が魏延に俺達の紹介?を兼ねて説明をした。
まだ余り信じていなか、疑いの眼差しを向けていたが、劉備から本当だと言われ、構えを解いた。

向こうに戦意がないなら俺達も戦う意味がない…

「李翻さん…どうしても私達を蜀に迎える事はできませんか?」

劉備が再度受け入れの要求をしてきた。

お前以外なら俺は構わない…だが、劉備を迎えない、一刀達は絶対に来ないだろ?…全員仲間思いの良い奴ばかりなんだからな…正直俺達だけでは、国を動かすのはキツイ!こんな人材は喉から手が出るほど欲しいんだ。

「劉備…お前に聞きたい。徐州にいた民達はどうした?まさか曹操が攻めて来ると同時に見捨てて来たのか?」

お前の大儀は民の笑顔だつたはず。確かに曹操は民も大事にする者だ。むやみに殺したりいない。そんな人間だ。仕方ない事だといえ、見捨てるのは気が引ける…

「見捨ててなんかいません！私達は徐州にいた皆とここにきました！」主人様も、愛紗ちゃんも、鈴々ちゃんも朱里ちゃんも、兵士の皆もそして、ダメな私を慕つてくれた民の皆との蜀にきました！」

俺は劉備の言葉に驚いた。徐州にいた民の皆を引き連れて、蜀まで来たと言つのか？俺はてっきり自分達と兵士だけしか連れて来なかつたと思っていた。流石は劉備。人を引き付ける力はには本当に驚く…

これは受け入れないと民達が路頭に迷つてしまつ。俺も基本の考えは劉備と一緒になんだ…

「劉備、お前について来た民達は何処にいる？」

「李翻様！桃香ちゃん達が連れてきた民達は今、私の城で守つていますわー！」

黄忠さんが話しに割つて入つてくれる。

成る程…徐州の民は今黄忠さんの城にいるのか…なら安全だ…うーむ…仕方ない…

「分かつた…お前達の受け入れを認めよう。ただ勘違いするなよ！…
これはお前達の為ではない！ついて来た民達の為だ！」

「あつ！…ありがとうございます！…これで助かりました！」

俺がそう言うと劉備は嬉しそうな顔で俺に感謝の言葉を言っている。
星が少し嫌な顔をしていたな…我慢してくれ…

そして蜀は更なる人口増加と、将が増える事により更なる発展を築
ける事が出来るだろう。

次回は！

「「」の地に蔓延る悪党達よー「」の華蝶仮面が成敗してくれるー」

「「」の変態仮面は何者なのだー？」

次回もよろしくお願ひしますー！

31話 新たな仲間と華蝶仮面（前書き）

連投稿だーい！

作者は翠の存在を忘れてました…といつ事で…ここで登場します！

あと華蝶仮面も…！

変文ですがどうぞ…！

31話 新たな仲間と華蝶仮面

一刀達が蜀に入り、蜀の軍司、経済は更なる発展が見込めるだろつ。諸葛亮は鳳統と一緒に俺の勉強と補佐を頼み、关羽と張飛には軍の鍛練を、そして一刀は天の使いの肩書きがあるから、蜀の象徴として俺と同じようなポストに着かせた。オマケとして劉備がもれなく付いてきた。劉備も劉備で民から慕われているからこそ仕方がない。

「李翻様！申し上げます！先程城の方に馬と名乗る者が訪ねてまいりました！」

馬？あー西涼の馬騰さんか… 一体どうしたんだ？

「分かつた取り合えず通してちょうどいい。」

そう言って俺達は玉座に向かった。

玉座に現れたのは、ポーテールの女の子と活発な女の子だった。

「私は西涼代表の馬超だ。折り入つて蜀王の李翻臺に頼みたい事があるんだ。」

「ちょっとお姉様！相手は王様だよ？口の聞き方気をつけなきゃ殺されちゃうよーー！」

馬超という女が頼み事があると言つので聞いていたがもう一人の少女が馬超の口の聞き方について注意している。別に気にしないんだが…

「仕方ないだろ？私はこいつらのが苦手なんだよ！済まないが我慢してくれ…」

私達は故郷の西涼を追われて放浪しているんだ…良かつたらほんの少しでも良いんだ部下の皆に食事を貰えたい。無理を承知でお願いする。食べ物を分けてくれ！」

馬超が頭を下げてお願いしている。同時に隣の少女も頭を下げる。

「君達は西涼を追われたと言つたな？馬騰殿はどうしたんだ？」

噂にしか聞いていなかつたが、確かに馬騰さんはかなりの強者だったはず。よほどの事があつたに違いない…

「母様は…少し前から病氣を患つてたんだ…余り動けない体なのに、無理して攻めてきた五胡の連中に立ち向かい…私達と少しの部下を逃がしてくれたんだ…」

馬超と隣の少女の顔が曇る。

五胡つて確かにモンゴル民族か何かだつたよな…

いぐら床に伏せている馬騰さんでも余り遅れを取る事がないだろ？

「五胡の連中は変わった奴らで、得に指導者である奴は奇妙なんだ
……私も少ししか見てないが、妖術を使つんだよ……」

妖術と聞いてあの男が頭を過ぎる。いや……そんな事はないだらう……
奴が攻めるとしたら、真つ先にここを攻めるだらう……

「必死で逃げてきた私達は兵糧も汲きしそうも無かつたんだ。
そこに、民の事を優先に考える李翻殿の話を聞いてここに来たんだ
だ。」

成る程、西涼とはお隣りさんだったからな……外交を結ぼうとする前
に滅んでしまったか……

「分けてやりたいのは山々なんだが、俺もここに王になつてまだ浅
いんだ……これから始まる冬の蓄えがあるにはあるんだが何かあった
場合の事を考えたら辛い物がある。」

「そうか……邪魔したな……」

そう言って出て行こうとする一人。
その後ろ姿は本当に辛い物がある。

「ちよい待ちー馬超、お前達はー」を出てこへと、何処か行く当てはあるのか?」

呼び止める俺。

馬超と言えば劉備のなんたら將軍の一人だったな。この際ー引き入れるのも有りじやね?

「いや…何処もないんだ。」そのまま野垂れ死ぬか、何処かの軍に入れてもらうかのどっちかだ。」

これはチャンスだな。

なら蜀で働いてもらおつ。

「何処も行く当てがないなりー」で俺達と共にに行かないか?ー入るなら全員分の食事なども保障しよう。皆も良いよな?」

俺がこの案を出したが、誰も反対する者はいなかつた。

「でもよ…」んな逃げ落ちた私達だぜ?」

「何言つてんだよお姉様ーこんな良い話しあつ無いかもしれないんだよ?」

何故か乗り気の無い馬超。それを隣の少女が馬超の発言に驚いている。

「気にしないでください。過去がどうとかは俺達は気にしませんから。馬超さん達の力を俺達に貸して下さい。」

一刀が横から馬超を説得にかかりた。なんて良い顔してんのコイツ？イケメンは羨ましいなコンニヤロウ！

おっと…星さんごめんなさい！これは男に對しての嫉妬だから馬超には見向きもしませんよ！だからそんなに背中を抓らないで下さい…

「分かったよ…これから私達は李翻様の駒だな！」

「何言つてんのこの子？駒とか思わないよ俺達！」

「何言つて「何言つてんだ？君達は駒なんかじゃない！俺達の仲間だ！」

俺の発言を遮つて一刀が俺の言いたかった事を言った。

すつげー言い切つた顔してるよ！

劉備がカツコイイご主人様つて言つてほうけてるよ…良く見たら、星と恋と音々と关羽と魏延以外ウツトリした日で見てるよ？魏延は一刀の事嫌いそうだから分かるとして、关羽はなんで無関心な訳？

あんた一刀大好きじゃなかつた?

「仲間かあ……私の真名は翠つてんだ。よろしくご主人様、李翻様」

「私は馬岱、真名は蒲公英! よろしくご主人様、李翻様!」

馬超の顔も真っ赤になつてゐる。馬岱は得になつてないがかなり元気
そうだ。

それよりも俺つて何なの? 確かに一刀は俺と同じポストだよ? でも
一応蜀の王だしね……なんか肩身の狭い感じがする……

「心配するな和喜。お前がどうあらうと私はお前しか見ていないよ。

」

星の言葉で頷く恋と音々。星からのフォローで俺はなんとか落ち込
まずに済んだ。

こうして馬超と馬岱が仲間に入った。

そして一刀のハーレム化が進んで行つた。

馬超達が仲間に入つてからの最初の冬。今日は全員で城の大掃除を
する予定だ。

大掃除を指揮するのは、一刀の専属メイドの董卓こと、月だ。その
補佐に賈駆こと詠だ。この二人は名前を捨ててるので真名を呼ん

でいる。

しっかりと掃除をして、新しい年を迎えるのは日本人としての心情だ。一刀も同じ考えだ。実はこの案は俺達が出した物だつたりする。

掃除も終盤に差し掛かり、俺達は最後の掃除場所の倉庫的な所を掃除していた。その時、何やら星の様子がおかしかったが、何も無いと言われたので気にしない事にして、この大掃除は終わった。

「（じ）主人様も李翻様もお疲れ様でしたあ。」

月が俺達にお茶を入れてくれる。実はかなり美味しいんだよねこのお茶。

「ありがとうございます。月もお疲れ様。今日は助かつたよ。一人がいないとこの大掃除は効率よく終わらなかつたよ。」

一刀が月を褒めている頭を撫でちゃつて…

「そんな事はありませんよ。これは皆さんが頑張つてくれたおかげですよ。」

「それよりも李翻様。星さんはどちらに行つたのですかさつきから姿が見えませんが…？」

確かにいな…星は兵の鍛練が無いときは何時もここにいるんだが…お気に入りのメンマの壺はしつかりあるしトイレか？だが掃除の時から様子が変だつたからな…何かあったのか？

「大変だよご主人様！今中庭に仮面を被つた人が現れたんだけど、愛紗ちゃんが戦つてゐるんだけどかなり強くてこのままじゃ厳しいよ！李翻さんも来て！」

大した侵入者だな。関羽にも引けを取らないとは…
それよりも俺はやつぱり一番目かい！もう王様やめようかな…

中庭に来てみると、確かに仮面を被つた女性が関羽と戦つていた。

「なあ 一刀君。俺思うんだけどさ、侵入者つてアレかな？」

「奇遇だな和喜君。俺も同じ事を思つていたよ。」

「「あれは問題無い」」

一人で出した答えは問題無だ。

だって仮面を被つてるのは間違いなく星だつたからだ。それにしても皆は何故解らないんだ？仮面以外は何時もの服装なのに…

「貴様！一体何者だ？何処から入つて來た！？」

関羽の怒りに満ちた声が鳴り響く。粗鄙キレてるね…

「私が何者だつて？なら教えてやる！ついで…」

そつと聞いて屋根の上に飛び乗る仮面の女。何言つんだ？

「甘美な香に誘われて今一匹の蝶がこの乱世に舞い降りる… その名も華蝶仮面！」

これが特撮だつたら後ろに爆炎が舞うんだろ？と思いつながら俺は見ていた。

ん？あの仮面どつかで見た事あるぞ…………？…………思い出した！あのオカマから貰つた仮面の色違いだ！つまりあのオカマは俺にこれに悪乗りしろと言つんだな…面白い！だが今日は持つていないからまた今度だがな。あいつの事だ。また何処かで同じ事するだろ。

「ええい…鈴々はどうした？」

関羽が張飛を呼んでいる。しかし関羽さんや、その張飛は既に華蝶仮面からノックダウン喰らつてますよ…

「星はどこ行つた？」

星はまず来れないだろ？な…

「なら恋は何処だ？恋を呼んで来い！」

やつぱりこの一人は勝負は着かないな…殆ど実力が五分だからな…

「む？ 飛將軍が来れば私も厳しいな… 関羽とやりーーの勝負は預けた。ではさりばー。」

そう言つて華蝶仮面は屋根を飛び越えて姿を消した。華蝶仮面め顔がイキイキしていたぞ…

「李翻殿ーーこの城の警備を更に厳重にした方が良いと思います！ あの華蝶仮面と言つ輩がまた現れるかもしません！ 華蝶仮面め… 次こそ仕留めてやるー。」

そう言つて中庭を後にする関羽。

えつ本氣で気付いてないの？ ある意味凄いよ？

あの仮面はどんな効力あるんだ？

「まあほつといても大丈夫だろ…」

「だな…」

俺と一刀はかなり楽観的に事を楽しんでいた。
そんな一日。

31話 新たな仲間と華蝶仮面（後書き）

次は何書いつか…和喜も華蝶仮面として登場させるか？

32話 華蝶仮面 v/s 華蝶仮面（前書き）

本日3投稿目だーコンニャロウ！

今日は遊びで書きました。何故かホイホイ指が進む！
訳解らない話ですが見て下さい！

疲れた：

32話 華蝶仮面 v/s 華蝶仮面

今巷で噂になつてゐる事柄が朝の会議で議案に上がつた。

「今民の間でよく聞く噂があつます。それは華蝶仮面といつ正体不明の輩です。」

関羽が血相を変えて話してゐる。あの時中庭での出来事がよっぽど悔しかつたんだらうな…

隣に腰掛ける星を横田でみると、すつゝじに満悦な雰囲気を出していゝ。

「華蝶仮面と名乗る者が街に出た犯罪者を我々が駆け付ける前に片付けているのだ！これでは我々の面目が丸つぶれです！」

どうりで最近俺の部屋にいないのか…と言つても基本はベッタリなんだが、昼時や、夕方などは姿が見えない。俺はちょっぴり寂しかつたりする…

「でも悪いやつを懲らしめてゐるから決して悪い奴ぢやないのだーー！」

「そりだよーー！ショット現れてバツてやつけてるもんさつといい人だよーー！」

張飛と劉備がお気楽な事を言つてゐる。劉備が喋つた時に星がボソボソと何か言つていたが、余り聞き取れなかつた。物騒な事言つてんじやないよね？よつぽど劉備の事が嫌いなの？

「桃香様も鈴々も呑気な事言つてゐる場合では無いー私はその度奴と交戦してゐるがハツキリ言つて奴は強い！何せ私と互角なのだぞ！」

関羽も大変だね…毎回星と戦つてゐるなんて…

「更に最近では三人になつてゐるではないか！」

嘘？増えてんの？俺はそう思いながら星を見る。それと同時に星は反対側に顔を逸らした。誰を巻き込んだ？

振り向く時に諸葛亮の体がビクビクしてゐたのを確認した。一人は分かつた。もう一人は誰だ？この場でポーカーフェイスを出来るてるやつは？

「李驥殿どうにかなりませんか？」

俺に振るか？

「ならその華蝶仮面が出る時に皆で捕まえに行くのはどうだ？」

さて星よどんな反応するか？

と横目で見るとすつごい睨んでるよ…

心配すんな！俺も乗るから！

「賛成～！実はもつと華蝶仮面様を見たかつたんだ～！何時も一人だけだつたし、三人は見た事ないもん！」

大喜びではしゃぐ劉備。なんだろう…凄い腹立つんだけど…

「桃香様…遊びじゃありません～～氣を引き締めて下さ～～！」

こうして俺達は華蝶仮面を捕まえるべく、街に警邏出たのだ。

「和喜～別にほつといても大丈夫なんぢやないか？」

俺は一刀と一緒に護衛も無しに警邏に回つてゐる。王である俺が護衛無しなのはアレなんだが、俺＝安全らしく、兵は付けられていい。

一刀がほつとこうと言つてゐるが俺はこの時とある計画で頭が一杯で話を聞いていなかつた。

フツフツフ一刀君や君に最高のショ一を見せてやるつ。実は俺の懷には昔、貂蝉から貰つた漆黒のパピヨンマスクが入つてゐる。星よ楽しいイベントは独り占め良くないよ！俺も混ぜり！

さて何時現れるかな？

「華蝶仮面が出たぞ～！」

誰かの叫び声と共に、俺達はそこに向かう。

現場に着くと既に華蝶仮面が事件を解決していた。そこには三人のパピヨンマスクをした女がいた。

もう一人は恋だったのかあ……成る程……さて俺も遊んできますかな。俺は静にその場から去り、誰も見えない所へ行き、懐からパピヨンマスクを取り出し装着する。

さて行きますかな！

現場近くでまだ関羽が来ていない事を確認して、俺は颯爽と登場した。

「フハハハハ華蝶仮面！貴様が街を守るのも今日までだ！」

俺の声と共にギヤラリーが俺に注目する。うわっ関羽以外全員揃つてらっしゃる。逆に関羽は何処にいるんだよ……

それよりも星よ……乗つて来い！

「誰だ貴様は？」

よつしやー乗つてきた！

「知りたいか？なら教えてやるつ……私はこの世の全てよ闇に変えるべく、地獄に生まれし黒死蝶……その名も悪蝶仮面！」

うつわーすつげー恥ずかしい……自分で言つとこアレなんだけど、

イタい子だ……頼むから乗つて来て……

「悪蝶仮面だと？貴様の目的は何だ？！」

「私の目的はな……この国の飯店での無銭飲食だ！」

何言つてんの俺？目的がしょぼい……この世よ闇にするなら世界征服位言えよ！

やつぱりこの国の主だからかな……？

「そんな悪じみた事を……許せぬ……行くぞ恋華蝶！全力で成敗してくれる！」

そう言つて向かつて来る一人、目が本気だ……仕方ない……俺も本氣で相手してやる！

（Side一ノ刀）

「ねえご主人様！何か悪そうな人が出て来たよ！」

桃香が言つているが俺はそれ所ではなかつた。急に和喜がいなくなつたと思つたら、和喜も仮面を付けて出て來た。

何やつてんだよあのバカツプルは……

でも本気の趙雲さんと呂布ちゃんかあ……その二人を相手にする和喜

も本気に違いない。最強三番隊のトップが本気で戦うなんて中々見れるもんじやないぞ。街が無事ならいいけど…

「ねえねえ」主人様！あの悪蝶仮面つて人凄くないかな？だつて愛紗ちゃんと互角な星華蝶様が恋華蝶と一緒に戦つても互角なんだよ！これは新な敵の出現だね！」

桃香はかなり興奮してらつしやる…でも本当に凄いな和喜は！一人相手に互角所か、むしろ押している感じだし…やっぱ凄いや三番隊は…

（Side Ends）

（和喜）

フハハハハ楽しいなあ！星と恋相手に戦うのは！一人ともかなり成長したな！

「そこまでだ！」

俺達が楽しんでいる時に、割つて入る関羽の声。祭もここまでか…

「貴様等今日こそ縄についてもらうぞー！」

捕まる気満々ですね！

「ここまでのようだな… 悪蝶仮面とやら次の時に決着をつけよう… 行くぞ恋華蝶…」

そう言って一人は脱兎の如く去つて行った。
さて俺も逃げるかな…

「李驥殿… 何やつてゐるのですか？」

逃げよつとした時に関羽から驚きの発言が聞こえた。
「え？ 何でバレてんの？」

「何言つているのですか？ 一目見て分かれます！ それよりも交戦していた一人の正体わかりましたか？」

「これはマズイ… よし逃げよつ… やつじよつ…

「知らん…」

そう言つて俺も脱兎の如く逃げて行つた。

なんであの一人は解らないで俺は解るんだよ？ 服も髪型も変えてんだぞ？ 何でだよー？！

城についた俺は絶贊落ち込み中だ。何で俺だけバレてんのか… 一刀は絶対解つてるとして他は絶対にバレてないはず…

「おつ和喜じじにじこったか。 探したぞ！」

俺の部屋に星が入つて來た。

「和喜！今日の寸劇は中々の物だつたぞ！そして愛紗を押し付けて悪かつたな。どうした元氣がないぞ？」

「ああ…何故か俺は関羽にバレてしまつたんだよ…」

そして何回目か解らない溜息をつく。

「何？あんな完璧な変装だつたではないか？何故愛紗は解るのだ？」

それが解つたら苦労しないよ…絶対にこの後色々聞かれるんだろうな…

そしてしばらく経つた後に帰ってきた関羽に色々聞かれた。勿論そこにいた星と一緒に…

32話 華蝶仮面 v/s 華蝶仮面（後書き）

次回は星ちゃん視点です！変な内容ではありませんー！今後の話に大きく関わる話です！

では！

33話 ガールズトーク（前書き）

24時間で4話投稿…燃え尽きたよ…

それはさておき何故私がここまで投稿しているかと言ひと、一言で
言えば暇なんです…

不謹慎な言い方ですが、地震の影響で仕事が長期に渡り休みになつ
てしましました…今月は仕事無しの状態です…

出来るだけ投稿して行こうと思います。

話は変ですが…
ではどうぞ！

マジハローのアリスは可愛いよ本当に可愛いよ…マジハローあれは神台
だと思うな…

33話 ガールズトーク

私は今非常に不機嫌だ。

理由は簡単。今日は私と和喜が非番で何処か一緒に出かけようと思つていたのだが、その和喜は『今から一刀行く所があるからすまん』と言わされたのだ。おかげで今日の私の予定は空になってしまったではないか…

全く…本当に全く…和喜め…全く…

そして暇な私は城の屋根の上でメンマをつまみにやけ酒をしている所だ。こう言う時にかられる者が居ないかつい探してしまつのは私の性分だついでに愚痴も聞いてもらおう。まあ時折、紫苑に聞いてもらつてはいるがな。

ん？あそこで何やら悩んでいる者がいるではないか。よく見るとあの黒髪は愛紗ではないか。奴ほどからかいがいの有る奴はいまい…そうとなれば行くしかないな！

「おや…そこそこのは愛紗ではないか…どうした？何やら思い詰めた顔をしておるが？」

私は愛紗に後ろから声をかける。いきなり声をかけられた愛紗は驚いていたが私だと分かるとまた先程のような雰囲気になった。

「なんだ…星か…今日は季翻殿も非番なのだろう？一緒に何処かに出掛けなかつたのか？」

愛紗めそれはわざとこいつてこるのか？私がこじこじの理由は一緒に
いれなかつただからだ。

「何、たまには別々に行動するのもまた一環。」
「まあまあ、」

「わづか…

「どうもおかしい…愛紗の様子がどうもおかしい。本来の愛紗であれば、私の問い合わせに一言、二言追加して言つて来るのに一言しかないとは…きっと何かあつたに違いない。

私は好奇心でいっぱいに広がる。

「どれ何があるなら私が聞いりつではないか！何か悩みか？恋か恋の
悩みなのか？」

私がそう言つと愛紗の体がビクッとした。私はそれを逃さない。これは中々面白い事を聞けそうではないか。

「なつ？いつ一体何を言つているのだ？わつ私が恋などするはずがないではないか……得にお主には聞かれたくない…」

いやいや愛紗ちゃんよ…私の目には徐州に居た頃から本郷殿がしっかりと映っているように見えるぞ。顔を真っ赤にして可愛いな。

「何、隠す事はない！私はただの酔っ払い。言つた事も直ぐに忘れるさ。」

本当は酔つてなどはいない。愛紗の表情の変化が面白い。それに何時も控えて、何かしら我慢している愛紗の気持ちも知つておきたいからな。

「そつか…ただの酔っ払いか…なら言つても構わんなん…では聞こう！星よ桃香様もだがどうして好きな相手に素直になれるのだ？確かに私は恋している。しかし、その相手には好きな人がいるのだ…」

成る程…劉備殿と一緒ににはされたくないが確かに私は和喜にくつついでいるな…

「それは簡単だ自分の気持ちを相手に解つて欲しいからだ。自分の気持ちをぶつければ相手も答えてくれると思つておるからな。劉備殿もきっとそうであるつ…」

これは私の持論だが、私は常に好いている人から見ていてもらいたい！愛されていたいと思っておるからな。

「だがそれは互いに想い合つておるからだろ？私みたいに見向き

もじてもううなこ者せざつする。」

「愛紗め……相當悩んでおるな……本郷殿はしつかりとお主を見ておると
このへん……それに気が付いてないのか？」

「何を弱気になつておるのだ？それでも将なのか？確かに相手が悪いかもしだらぬが、それは立場的な物であるうつ恋愛は立場も関係ないのだ……愛されたいならまづ己に自信を持て！」

からかう所ではないな……やはり私も女子……恋の話は誰のを聞いても
面白い。

「愛紗……お主は好きな人からどうされ、どうしたいのだ？」

「愛し、愛されたい……正直に言えば私だけを見ていて欲しい……」

「愛紗よ……本音が出たな。ここまで言えたのだ……あつと気持ちを伝える
事が出来る。

「よく言えたな愛紗よ……」この気持ちを本郷殿に伝えてみよーあの男
の事だ。全員愛しているに違いない。」

「これで私の後押しはいいな……自分の気持ちに素直になれた愛紗だ後

は自分でやるだろ？…

「星…何を言つてゐる？私はこの主人…いや…本郷殿は愛しておらんぞ！」

愛紗から驚きの答えが返ってきた…

愛紗は何と言つた？本郷殿は愛していないだと？なら誰を…？まさか？

「この際だもう隠す事はない…私が愛しているのは李翻殿だ…確かに最初は本郷殿を好いていた。だが、連合の後、自分に足りない物を教えてもらつた李翻殿に惹かれていく自分がいたのだ…だが李翻殿は本当にお主しか見ていない…叶わない恋だからこそ辛いのだ…本郷殿であれば確かに全員愛してくれよう…」

私は耳を疑つた。愛紗は何と言つた？和喜の事が好きだと言つた？本当は私は解つていたはずだ…愛紗が和喜を好いている事をただ認めたくなかつただけなんだ…

「星…一つお主にお願いがある…一度でいい…私にこの気持ちを李翻殿に伝える機会を与えてくれぬか？勝ち田の無い事は解る…しかし私はこの気持ちを李翻殿にぶつけたいのだ…だから星…頼む…」

「すまぬ愛紗…その答えは後日でも構わぬか…？」

私はそう言い、愛紗から逃げるよつにその場から去つた。とにかく今はこの場つから離れたかつた。最後に愛紗が何か言つていたが、聞こえなかつた…

私は中庭に行き、先程の話を思い返していた。

愛紗の事は驚いた…だが何故私はこれ程動搖し、不安になつているのか？

確かに私は愛紗に自信を持てと言つた。だがそれは私は本郷殿に対して言つた。しかし、愛紗から返つてきた答えは、『和喜を愛している』『深くえぐられるよつな感覚になる…』

「あら星ちゃんどうしたのかしら？思ひ悩んだ顔をして？」

私が悩んでいる所にかけられる声、顔を上げるとよく話を聞いてもらつている紫苑がいた。

それから私はさつきまでの愛紗との会話を話した。紫苑ならいい答えを出してくれるかもしねれない…

「成る程ね…星ちゃんは他人の事だと的確になるけど自分の事だと解らなくなるのね。」

紫苑の言葉に私は理解出来なかつた。これでも私は自分の事は理解していると思つ。

「星ちゃんは愛紗ちゃんに自分に自信を持つよつに言つたのでしょ

う？そして吹っ切れた愛紗ちゃんは「主人様ではなく、星ちゃんの大好きな李翻様の事が好きだった。それを聞いた星ちゃんは不安になつてるのでしよう？愛紗ちゃんが李翻様に気持ちを伝えて李翻様が愛紗ちゃんに乗り換えるんじやないかと思つてているのでしょうか？」

紫苑の言葉で私は更に不安になつた。涙が溜まつてくる。

「星ちゃんも自分に自信を持ちなさいー今まで李翻様の事を見ていたのは星ちゃんだけだつたけど愛紗ちゃんも李翻様を見るようになつた。星ちゃんは李翻様を愛紗ちゃんにとられるのが怖いのでしあ」

私は無言で頷く。田からは涙が溢れていた。結局私も自分に自信が無かつたと言つことか…

「星ちゃん…私は星ちゃんが羨ましいのよ…」

紫苑の言葉に顔を上げる。何が羨ましいのだ？

「今、星ちゃんには気持ちを伝える事が出来る人がいるじゃない…私はね…昔、旦那が病で亡くなつて一度と声も聞けなくなつてしまつたの…私を呼んでくれる声が聞けない…私を包んでくれる暖かさがない…私を安心させる笑顔が見れない…璃々がいてくれたから私はここまで頑張れる事が出来たの…愛した彼との大切な子供…彼が存在していた唯一の証拠…だから今の星ちゃんが羨ましいのよ…受け止めてくれる人がいる事を…」

そう言つてゐる紫苑の目には涙が溜まつてゐた。… そつか紫苑は私より辛い経験をしてゐるのか… 愛している者に一度と触れる事出来ない辛さ… 確かに私は幸せかもな… 気持ちを伝える事が出来るのだからな…

「「めんね星ちゃん… 重たい話をして…」

「いや… 謝らないでくれ… 紫苑の話しさ聞いて、私は自分に自信が持てた氣がするよ… 愛紗が和喜を愛するのであれば、私はそれ以上和喜を愛する…」

私もなにか吹つ切れた感じだ。

「それにしても李翻様は凄いわね。王様と言えば、沢山女性を持っているものだけど、彼は星ちゃんだけしか見ていないもの… 本当に一途な王様ね。」

紫苑の言葉に私は更なる自信をつけた。

私はこれからもずっと和喜を愛し、側にいる誓つよ…

33話 ガールズトーク（後書き）

今回は星ちゃんの話でした。原作キャラは扱いが難しい…もうほとんどオリキャラな感じになつてますから…

34話 猫のタト（前書き）

更新…今週は2つする予定でしたが、気がつけば木曜日…マズイ…作者が手書きで書いている小説の方の話しが思い浮かんだのでそつに行つてしまつました…

あとマジハロの実機が家届いて食らい付くつにしてしまつ更新が遅れてしまつました…申し訳ありません…

アリスかわええよー！

ではじつぞー駄文ですが…

34話 舊いの日々

王としての仕事はとても大変だった…未熟な俺をここまで鍛えてくれたちびっ子軍師に感謝しないといけない。蜀も大分安定し、犯罪の件数も激減した。何よりも住みよい国をモットーにしてきたお陰で、民からの不満もなく移民の受け入れもしつかりとしているお陰か、人口も増え活気ある国に成長した。

蜀は俺が現代の知識を元に暦を作った、12ヶ月の30日で360日だ。感覚で作った為かなりの誤差があるが、そこは割り切つて欲しい。そして法律で週休2日を定め、この国には無職がいない為。全ての国民に休日を与えた。

今日は働き詰めだった俺は久しぶりの休暇だった。本当は星と居たかったのだが、俺はとある決意を胸に秘めていた為、星から出掛けようとの誘いを苦汁の気持ちで断つた。

その時の星の表情は一度と見たくなかった…「めんよ星…

一刀と合流して、俺はあるところを田指す。

つい最近、石炭が出てくる鉱脈を視察に行つた時、作業員の方々が余分な土や石を捨てる穴の中にキラキラと光る石を見つけた。

その時は時間の関係上これ以上この鉱脈には留まらず、詳しい事は聞けなかつたが、石炭の鉱脈から出てくるキラキラとした物…ダイヤモンドの可能性があると踏んだ俺は、その時一刀も同じ事を思つてたらしい、今日確認をしに行くついでの宝探しに行く事になった。仮にそれがダイヤモンドだとしたらその時は…

そして俺達はダイヤが出ている疑いの石炭の鉱脈に到着した。

「これはこれは李翻様、本郷様、わざわざこんな所まで足を運んで頂き有難うござります。」

「こここの鉱脈を任せている現場監督が俺達に声をかけてくる。深々とお辞儀をしてくる。

「いえいえ。俺達の我が儘に付き合つてもせりつてるんです。監督も頭を上げてください！」

今日この採掘場は休業だったのだが、俺達の我が儘で開けてもらっている。

一から掘りたいのだが、採掘場は危険が多く、監督から素人の採掘は許可がおりなかつた。

俺達は土壤に捨ててあるダイヤっぽい物を手に取つた。

「なあ和喜。やつぱこれ間違いないよな?」

「絶対に間違いない!石炭の採掘場から出でてくるからおかしこと思つてたんだよ!」

「「ダイヤモンドだ!」」

手に取り近くで見て核心が持てた。ダイヤは石炭が圧縮されて出来た物つて昔教科書で見たような気がするし…それにしてもこの時代はダイヤの価値が解つてないらしい…これは商業的にもかなりのプラスになるな…

俺はそう思い監督にこの鉱石が出たら買い取るという契約を結び、少量を一刀と持ち帰った。

俺と一刀は装飾品の加工場に行き、隅の方でダイヤの加工に取り掛かつた。

途中にっここの工場長的な人が、俺達にさせる訳にはいかない。後は自分達がやります!的な事を言つて來たが、これだけは自分でやりたいと直訴し諦めてもらた。すみません工場長…

「…ああ一刀君取り掛かろうか…」

俺は隣に座る一刀に声をかける。

俺達が作ろうとしているのは指輪だ。勿論さつき取りに行つたダイヤを入れた指輪だ。俺は星に一世一代の誓いを伝えようとしている。それはプロポーズだ。前世の記憶があるからこそできる現代の誓い…

「だな!和喜はプロポーズだけど俺はまだプレゼントかな…みんな好きだけど俺はまだいいかな…でもなあ…最近愛紗が俺よ呼んでた呼び方が変わったんだよな…何でだ?闇に誘つても断られるし…」

なんだ～このハーレム野郎め…関羽の事は全然わからんね！なんか俺を見る目に熱があるような気がするがな…まあぶつちやけ星だけ妻とするだけで俺は十分に満足だ！言つちや悪いが、他の女の子は一端の将軍としか見ていない…恋愛感情も勿論持ち合わせていい。

俺達はダイヤの加工も自分でしているのだが、それがかなり難しく、ダリアを削つたりするのはかなり苦労した…

俺の作る指輪は星に合わせて、戦闘などの邪魔にならないように、入れるダイヤを指輪に合わせて小さめに加工した。

それから一刀と没頭してようやく完成した指輪。気付けばもう夕方になっていた。

俺は城に帰り、星を探した。今日は絶対にこの思いを伝える…さて星は何処にいるかな？

俺は城を探し回った。少し探した所で屋根の上にいた星を見つけた。顔を埋めている。何かあったのか？

「おーい星ー探したぞー！」つちかーいー…

俺は星を呼んだ。俺の声に少し驚いた星は顔を上げ、目を袖で拭い俺の側に降りてきた。

「どうした和喜？私に何か用か？」

星が俯きながら俺に向つ。何かあったのか？

「星…何かあつたのか？」

「な、何も無い！ただ紫苑と話して色々とスッキリとしただけだ！」

「…」
「うか…黄忠さんと色々話してたのか…何があつたかは詳しくは聞かない。女の話に男が首を突つ込むのは野暮つて物だな。」

「星…ちょっと一緒に来てくれないか？」

俺はそう言い星の前に手を出す。

星は普段俺がしない行動に驚いたのか、顔を朱くして俺の手をとる。そして目的地に向けて足を進めた。

「…」

「どうだ綺麗だろ？」「ま、俺が仕事で悩んだり気分転換をした
りする時に良く来るんだ。」

星を連れて来た所は蜀の町並みが一望できる丘だった。沈む夕日をバックに見える蜀はとても綺麗で心がスッキリするようだ。

「綺麗

星も気に入ったようだ。

俺も決めるか…
やべえ緊張してきた…

「星…大切な話しがあるんだ…」

俺はそう言い星を見つめる。

俺が星を真剣に見つめているのが珍しいのか、また顔を紅潮させ、俺を見つめ返す。

暫く流れる沈黙…俺が緊張して中々言い出せない…
ここで言えなくてどうするんだ俺？言つと決めたんだろう？怖じけついてどうする？

心の中で自問自答を繰り返す。よし！決まった！

「星…お前をここに連れてきたのは俺の気持ちを伝えたくて来たんだ…

お前と最初に出会つてから幾月のも時間が流れたよな…？最初は幽州の義勇兵の徴兵がキッカケだったな…それから色々あつてここま

で来たよ……環境も変わったり立場も変わったりした。だけど変わらないものが一つだけあるんだ……」

俺は今までの思い出を思い出しながら言つ。

星は黙つて俺の話に耳を傾けている。

「それはな……星だけはずつと変わらず俺の中心にいたんだ……だから星……俺の妻になつてこれからを一緒に歩んでくれ！」

言いながら俺が作った指輪を箱から出す。

俺は自分の気持ちを伝えた。これからも星と一緒にいたい一緒に笑い合いたい。

しかし星からは何も聞こえない……まさかダメだつたのか？

一気に不安感が俺を支配する……泣きそうだ……

ぐすつ……ひつく……

俺が落ち込みかけている時に星から泣き声が聞こえてくる……

「やつと……やつと言つてくれた……私はその言葉をどれ程待つっていた事か……」

星が涙を流しながら答える。

「和喜…喜んでその申し入れを受け入れるよ…」

そう言って星は指を差し出す。

俺は星の左手の薬指にその指輪をはめた。

星は指にはめられた指輪を満足げな表情で見ている。

「和喜… ありがとう…」

夕日をバックにしたその時の星の笑顔は今まで見た笑顔の中で一番綺麗で一番絵になっていた。

34話 薔薇のタリ（後書き）

プロポーズしました！

ちなみに作者も昨年婚約しましたが年末に破棄になってしまい、軽
いつつ病になつていきましたが…

和喜には幸せになつて欲しいです！

35話 今日は何の日か知ってるかい？盛大に嘘をつこうつい日だよー 企み館

アンケート協力ありがとうございます！

皆さんの意見を聞いて考えた結果、迂回しながらまつたりと行こう
と思います！

これからもボーズをよろしくお願ひします。

35話 今日は何の日か知ってるかい？盛大に嘘をつこう！日だよー企み館

「暇だ…暇過ぎて死にやつだ…」

政務も終わり、今から昼食を取り午後から星と出かけようと考えていた昼頃。何故か俺の政務室に入り浸る一刀から発せられた言葉。星がここに居るのははわかるぞ？だが何でお前もここにいるんだ？自分の仕事は自分の部屋でやれよ！

「一刀君や…なんでお前は自分の仕事を何時もここにしているんだ？」

ホントにコイツは何を思つてここにいるんだよ…一刀がいるせいで星も結構機嫌悪いぞ…

「ふん！あれだらう？他の者が自分の部屋にいると直ぐに甘いひと時になり政務に身が入らず、和喜との契約が守れんのだらう？」

と言つて部屋に入つて来たのは最近コスプレにはまつている俺の妻の星。薬指に輝く指輪も絵になつてますなあ…

今日のコスはネコミミのメイド服か。最高です！

ん？まさか一刀は星のコスプレ目的でここにいるんじゃないだらうな？だがメイドは月と詠がいるだろ？

ちなみに星のコスプレシリーズは俺の手作りだつたりする。

「ん~否定できない自分がいるのが辛いけどそれは違いますよ。契約もそうんですけど、和喜は俺の親友だし、腹を割つて話せるのはコイツだけですから。」

いい事言つてくれるじゃねーかコノヤロウ!

確かにコイツが自室で仕事して他の女が来たら必ずヤフーな時間になるだろ?からな…この絶倫め!それと昔から思つてたが、何故か一刀は星に敬語を使つている。なんでだろ?…

俺と交わした契約は過去のみんなから仕事を溜めて私情ばかりに走ると容赦なく追い出すもしくは斬首と言つ契約を血印で押させた。それからは徐州にいた頃とは人が変わったような仕事ぶりだつた。

「どうだか…」

星は今だに一刀の事が気に入らないそうだ。理由を聞くと、視線がいやらしいの事…確かに星が一番美人なのは認めるよ。星は人妻だよ。確かに響きはいやらしいが、手を出したら俺が許さん!それ以前に星にボッコボコにされるだろ?が…

そう思いながらカレンダーを見る。すると今日の日付は4月1日だつた。現代だと新学期か…そう思いながら外を見る。

「おい和喜ー今日は4月1日じゃん！エーピリルフールだ！」

一刀が騒いでいる。そうだったな！現代ではそんな日だつたな…嘘の祭典？な日。まあ現代は365日嘘が飛び交っていたが…

「えいぶつるふうる？」

星が頭にハテナを浮かべている。ネコミミを付けて頭を傾ける仕草に俺は悶絶しそうになつた。

「エーピリルフールはですね、この日は大いに嘘をついても許される日なんですよ。」

一刀が説明する。

説明を受けた星の目がギランと光つたのは俺は見逃さなかつた。何か閃いたな…良からぬ事ならいいが…

「なるほど…良くわかつた。今日は盛大に嘘ついてもいいのだな？ふふふふ…和喜、本郷殿つき合つてはくれぬか？私が盛大な嘘を用意しよう…」

星が黒い笑いを浮かべる。

星はこういうイベント大好きだからな…笑顔が怖い…あとそのブンブン動いている尻尾はどういう仕組みなの?ネコだよね?なんで犬みたいになつてんのさ?

こつして星プロデュースの嘘つき祭が始まった。略して星P!

まさかこれが蜀を巻き込んだ大事になるなんてその時の俺は知るよ
しもなかつた…

35話 今日は何の日か知ってるかい?盛大に嘘をつこう!いい日だよー。企み縛

なんか大いに書いてるけど正直話の内容考えていません…ヤバい…

誰か案を下さい…

36話 今日は何の日が知ってるかい？盛大に嘘ついてもいい日だよ… 疑い編

エーフリルフルの話しさは4部作で行きたいと思います！

企み編、疑い編、騒動編、解決編という風にしていきます。

なんか一日位かかりそうですが… そして三人称で行つてみたいとおもいます！

36話 今日は何の日が知ってるかい？盛大に嘘ついてもいい日だよ… 疑い紹

昼食も終わり、昼からの仕事に向けてのひと時、この口蜀の女性陣は食後の「ザートタイム」をしていた。

その時部屋に顔面蒼白で現れた星…女性陣がどうしたものかとかけよる。

「星さん一体どうしたんですか？な、何か見てはいけない者を見たよつた顔をしますけど…？」

朱里の言葉に女性陣が息を飲む。

「か和喜が本郷殿が…男と男の睦月…」

その言葉を残して星は氣を失つた。

その言葉にいち早く反応したのは一人の軍師だった。

「しゅしゅしゅ朱里ちゃん！聞いた？」主人様と李蘿さんがもにやらりりりりー。

「おっ落ち着いて離里ちゃん！言葉になつてないよーでもあの一人

「... せめて せめて せめて が

一人して目を光らす。早く見に行きたいのが山々なのだが、まず気絶している星を寝台に連れていかないといけない。しかし早くしないと二人の甘い時間を見逃してしまつ。

「みんなは星さんを寝台に連れていくてくだしゃい！私達は一人に注意してきましゅ！」

そつとつてダッシュで出ていく朱里と、~~難里~~。

「朱里ちゃん、ご主人様が攻めかな？」

「雛里ちゃん。私は李黼さんが攻めだと思つよ！ だつて、」主人様は李黼さんに頭上がらないんだよ！」

ちびっ子軍師達が一人がいる部屋に向かう中で論議が開かれている。そして一人の部屋に着くと少しだけ開いているドアから覗こうとする。

「あれ? なんで一人もいるんでしゅか?」

朱里達が覗こうとしたとき後ろから桃香と愛紗がやって来た。

「だつて本当にご主人様が…男の子も好きだなんて信じられないよ

…私じゃ満足できないのかな…愛紗ちゃんもそうでしょう？」

星ほどではないが桃香もショックを受けているようだつた。

「いや…私はただ事の真相を…」

桃香の問いに少し困惑して答える愛紗。

4人はそつと少し開いたドアから中を覗く。そこには一刀の顔を少し手で持ち上げ今にもキスをしようとしている和喜がいた。

「はわわ…やつぱり李靄さんが攻めだつたよ…見てみて雛里ちゃん！一人のお口が直ぐそこにいいいい！」

「あわわ…朱里ちゃん！一人の口が口があああ！」

もはや一人のテンションはMAXになつていてる。

一人のキスを心待ちにしている。

二人の口があと数センチに迫つた時…

「だめええ！目を覚ましてご主人様！」

突如部屋に入る桃香。男二人はいきなり入つて来た桃香に驚いてい

る。

桃香の後ろで、いい所を邪魔されたと残念がつて いる軍師の一人、なんとも言えない表情の関羽。

「何してんの？4人とも…」

一刀の言葉で固まな女性4人なんとも言えなし空氣が流れていた……

時は少々遡り4人が入つてくる直前の野郎一人がいる部屋。

「はあ……いくらエープリルフールでも何で一刀とホモりやないかんの……？」

はあゝとため息をつくのは蜀王の和喜。

「仕方ないよ…趙雲さんの思いつきなんだよ…」いつの時の趙雲さんは止められないって和喜が一番知ってるだろ?」

こちらもテンションが低い天の使いである本郷 一刀。二人は星の発案でエープリルフールの大きいなる嘘芝居をしている所だ。

— T_s T_s T_s T_s T_s

外からの足音に気がつく和喜。彼は文武共に優秀だからこそ相手の

気配に敏感である。

「おい 一刀！ 来たぞ 準備しろ！」

そう言い一人は準備にかかる。一人とも衣類をはだけさせ、和喜は一刀の顔を少し持ち上げ、キスが出来る角度に持つていく。4人が覗いていることを確認して自分の口を一刀の口に近づけていく。頬を紅潮させる一刀。和喜は紅潮させた一刀を気持ち悪いと思つていた。残り数センチと迫つた時、

「ダメえええ！」主人様目を覚ましてえ！」

そう叫びながら乱入してくる桃香。目には涙を溜め込んでいる。

この桃香の乱入により近かつた一人の顔は離された。男一人は内心乱入してきた桃香に感謝している。言っておくが一人はいたつてノーマルだ。そんな趣味はない。一刀の紅潮は謎だが…

「何してんの？ 4人とも…」

なにぐわぬ顔で問う一刀さつきまでの行動がなかつた事みたいな雰囲気を出している。

「だつてさつき趙雲さんがご主人様と李飄さんが男の子どうしでふ

「ちひりひつて言つてたんだよー。」

桃香は後半口を濁しながら言つてゐる。どうやら恥ずかしいようだ。

「はは。何言つてるんだ桃香？俺達は男だぜ？男同士でそんなことするわけないじゃないか！なあ和喜！」

「さうだぞ劉備！俺達は普通に女の子が好きなんだ。男同士なんて糞くらえだ！」

そう言つて一人は肩を組むその時の一人の顔の近さをちびつ子軍師達は見逃さなかつた。

「さうだよね！まさか男の子が好きなんてありえないよねー私はご主人様を信じるよー！」

二人の口車に簡単に乗る桃香。愛紗は呆れたのか、ついて行けないのかその場で固まつてゐる。

「さあ一刀。小腹が空いたな… そう言えれば俺の行きつけの飲茶店があるんだが行くか？」

「おーーーいいなーちょっと俺も腹減つてたんだよ行こうじゃないかー！」

そう言って一人は部屋を出ていく。その時互いの腕は腰に回っていたのを軍師達はしつかり確認した。

36話 今日は何の日か知ってるかい？盛大に嘘ついてもいい日だよ… 疑い紹

散々悩んだ結果この路線で行きたいと思います！
実は殺人事件編か、BL編で行くか迷いました…

もつと文才があれば…

ちなみに作者は男ですよ！

377話 今日は何の日か知ってるかい？盛大に嘘ついてもいい日だよ… 驚動

「いつも一日はとっくに過ぎましたがまだエーピールフルネタだす
…」

意味解らない話しだすがお付き合いくださー。

ではどうやー。

ここは薄暗い会議室、蠟燭が揺れている。集まっているのは蜀の女性陣だ。主催はちびつ子軍師の朱里と雛里だ。

「皆さん… 本田はお集まり頂きありがとうございます。ここに集まつてもらつた理由は、ご主人様と李飴さんの一人の関係性が本物なのかと私達が今後ご主人様に愛されるかどうかです…」

朱里が今一番の問題を言つ。これは先程、朱里が目撃した和喜と一刀の関係が本物かどうかを議論するためだ。

「議長は私、諸葛亮がつとめさせてもらいます。書記は雛里ちゃんにしてもらいます。異議はありませんか？」

辺りを見渡すが、反対の意見は無いようだ。この会議に参加しているのは星と愛紗以外の全員だ。愛紗は氣を失っている星の看病のため参加していない。音々と恋も一緒に付き添つている。

「朱里ー お兄ちゃん達が一体どうしたのだ？ 鈴々は仲良くな飯を食べに行つてるよう見えたのだ。あと鈴々には何で星が氣を失つてるか解らないのだ！」

鈴々が城から出でていく一人を目撃したようだつた。星が氣を失う前

の言葉はどうやら鈴々には理解出来なかつたらしく頭にハテナを浮かべている。

「あら……」主人様つたら男の子もいけちゃうクチだつたのかしら？
？凄いわね……」

紫苑は一刀の性癖に感動しているようだ。ちよつと紫苑は星が倒れた時は娘と外に出ていたようで事の真相は掴めてはこない。「現在お一人は飲茶店で食事をしています！警邏の名田で皆さんの田で確認し、判断を下してください！」

朱里の言葉に集まつた女性陣が部屋を出る。

その頃、野郎一人は……

「外に来たのはいいが、これはマズインじゃね？外でもこんな事してたら民のみんなから変な田で見られるぞ？そうだな……号外で王の李翻は男色家つてな！」

一刀が冗談混じりの皮肉を言つ。和喜はその言葉で外に来た事を後悔していた。実は本人はかなりの悪乗りをしていた。確かに外でこんな事は今後に關わる。

「まあ城の連中もここまで来ないだろ？？とりあえず何か食おう。

食つたら帰るぞ。」

和喜はそう言い店の中に一刀を連れていく。そして食事をしている一人。王と御使いのプライベートな食事の為、護衛もない。そして顔立ちが綺麗な一人だからこそ自然と周りには女性が集まつてくる。

食事の最中に和喜は近づいてくる気配を察知した。

「おい一刀…マズイ…城の連中がここに向かつてきてる…」

その言葉に青ざめる一刀。ここでも男同士の深い友情をしないといけないのかと思うとテンションが下がる。ならしなくて良いじゃないかと言いたい所なのだが、少し離れた席には変装した星達が見張つていてる為、何もできない。音々にいたつては今にも泣きそうな顔をしている。恋は目の前にある料理を片付けている。

「何で趙雲さんがいるんだよ？城で愛紗と一緒にしあつたのか？」
「知らねーよ！多分関羽を眠らせたんじゃないのか？星ならやりかねん…」

小声で話している為に自然と顔が近づく。その時周りにいる女性達から黄色い声が響く。

「何で歓声が…？まさか俺達の今日の行動が噂になつてんのか？」

青い顔をした一刀が言つ。そう..彼らの予想は大当たりである。和喜と一刀が外に出る時も肩を組んでいた為にそれを見た女性の兵士が友人などに喋つていたのだ。彼女は俗に言う腐女子というものだ。彼女は女性男性愛俱乐部の会員である。余談だがその俱乐部の会長は朱里だつたりする。和喜達を囲んでいる女性達もその俱乐部の会員である。

彼女達は田頃の妄想でのカップリングが目の前で起きているので彼女達のテンションもハイになつてている。隅の方に座つていたムツチリとした男性達が一人に向かつて上着を広げて鍛え上げた大胸筋をアピールしている。

「なんかヤバくね……？」

一刀の言葉に全力で首を縦に振る和喜。これ以上ここにいたら色々と危ない事になりそうな気がしてままならないようだ。
そしていそと店の外に出る一人。しかしその後を追いかけるようになって来るムツチリした男性達。

なるべく避けようと出て行く一人なのだが、ずっと目立つてゐる為に無駄な努力だった。

「ねえねえ君達中がいいんだね！だうだいこれから僕達と一緒に男の祭と一緒にや・ら・な・い・か？大丈夫だよ痛いのは最初だけだから！」

とうとう捕まつてしまつた一人。血の気が一気に引いていく。男の

発言に周りにいた女性達から歓声が上がる。

「「けけけけ結構です!」ほほほ僕達はそんな趣味はありませんからあああー!」

そう言つて逃げ出す一人。

「はっはっは! そんなに照れて可愛いなあ君達は! 僕達と追いかけっこかい? 喜んで受けようじやないか! 君達を捕まえた時には…ぐふふふ…」

涎をだしながら追いかける男達。その後ろからはキラキラした目で後をついて来る女性達。凄い勢いで逃げている和喜達を追いかける男達も凄いが一番凄いのはそれに付いていく女性達だはないだろうか…? 趣味に対する執着心は計り知れない…

「なんで俺達こんなになつてんだよ? ただ城の中だけで良かつたじやねーか! 誰だよ外に行こうつて言つたのは?」

逃げながら文句を言つてゐる和喜。

「お前だろ? がバ力野郎! 俺達が変な趣味持ちだつて勘違いされてるじゃねーか! 特に直ぐ後ろの方々は本当に危険だつて!」

そう言つてお尻を抑える一刀。だが足は止めない。ここで捕まつたら確実に明日が無いと思っているのだろう。

二人が繁華街を曲がる時にとある一人とすれ違う。桃色ビキニのガチャムチ。

「あらん？ あれは季麿ちゃんじゃないかしらん？ その横にいるのは……ひょおとしてご主人様かしらん？ 見つけたわああん！ 待つてえ！」主人様！

偶然にも蜀に来ていた貂蝉もこの追いかけっこに参加した。貂蝉が走っている所は和喜達と男達のちょうど間位だ。

「うわああまた何か増えたあああ！ 僕を『ご主人様とか言うなああ！』

泣きながら走る一刀。その隣で走っている和喜はアレが自分の叔父だと思うと一刀に申し訳ない気持ちになっていた。

「（ご）主人様達見つけました！ はわわ？ この後ろの人達は何ですか？」

そこに兵の馬の後ろに乗つた朱里が一刀に問い合わせる。

「『めん朱里！話しさ後にするか今この人達をビリビリか巻く策を考えてくれないかな？』

全力で朱里に頼み込む一刀。状況がイマイチ掴めていない朱里は何か良い策はないかと考え出す。

「会長じゃないですか？会長もこの傑作な男愛を見に来たのですか？」

後ろを走っていた女性達から朱里に声をかける。それに気付いた朱里はそこに馬を近づけ、事の状況を聞き出す。

「ですから李巍様と御使い様が××でそれを聞いていた男の人達が××になつて私達が追い掛けている所です！」

会員の女性が説明した時に朱里の目が光る。

「はわわ！それは是非見たいですね！私も参加しましゅ！」

朱里参戦！

こつして街中を巻き込んだ追いかけっこが繰り広げられていた。

「俺達はノーマルだあー！」

王と御使いの悲痛な叫びは誰にも届かず空にこだました。

37 話 今日は何の日か知ってるかい？盛大に嘘ついてもいい日だよー 騒動

ようやく完結編が書けるな…あと一回くだらない話しお付き合いください。

38話 今日は何の日か知ってるかい?盛大に嘘ついてもいい日だよ... 完結編

すみません...長らく時間がかかってしまいました...

いつまでこのネタしてんだよ...

やつつけなので話しが面白くないです...

38話 今日は何の日か知ってるかい？盛大に嘘ついてもいい日だよ… 完結編

街中を逃げ回った俺達は、やつとの事城へと逃げ帰った。

俺は街中を走り回り、追い掛けてくる男の方々を巻く為に街を田茶苦茶にしてしまった。街の人達には申し訳ない事をしてしまったと思つ…

一刀は途中で貂蝉に捕まってしまい、連れ去られようとしていた。

俺は助けてくれと言つてはいる一刀の視線を無視して立ち去った。一刀…俺はお前の事を忘れない…お前の分まで強く生きるよ…

「和喜…お前よくも俺を置いて行つたな…」

ボロボロになつた一刀が俺を睨んでいた。

生きていたか…よくあのむさい集団から生き延びた君は戦士だ！

「おかえり…よく無事で帰つてこられたな…？」

一刀の身体をよく見ると、至る所にキスマーケを付けていた。そして一刀の目は死んだ魚のよつた目になつていた。

「一刀…お前身体が…」

「壱つ…思い出したくない…」

そう言つた一刀は震え出してしまつた。よつぼじ辛い事があつたのだな…

まさか？お前は男として何かを失つてしまつたんじゃないのか？

「いや…何とか俺の後ろは死守できたよ…」

俺がそんな目で見ているのが解つたのかそう答えてくれた。

「お一人とも何処に行つていたのですか？途中で見失つてしまつて男の園が…じやなかつた！何故こうなつたかの理由が聞けなかつたじゃないですか！」

庭でくたばつていた俺達に諸葛亮が声をかけてきた。男の園つて…

「朱里…俺達は決してそんな趣味じやないからな…」

一刀が全力で俺達の疑いを否定している。

「だったらあのお二人のくつつき様は何だつたのですか？私はどれだけ嬉しかつた事か…」

「どうやら諸葛亮は絶賛勘違い中らしい…すつごいキラキラした顔で俺達を見ている。

諸葛亮さん……貴女はやつぱりそつちの趣味でしたか……

「諸葛亮……その満ちた期待を裏切るんだがな、俺達にはそんな趣味は一切ないぞ。」

取り合えず諸葛亮の誤解は解いておかないと……目がすつゝ怖い……

俺達はこの訳の解らない騒動の原因を説明するべく、城の皆を集め説明した。

諸葛亮と鳳統はすつゝい残念がつっていたのはきのせいだと信じたい。

発端の星は関羽にどこかへ連れていかれてしまった。
まあこれでいいかな……訳の解らない嘘から始まり、街を巻き込み、
男としてナニかを失いそうになつたりと散々な目にあつた。嘘も程
々だな……

「ねえご主人様。さつきから後ろにいるおつきな人は誰?」

劉備の言葉で後ろを向く俺と一刀。

「あんらあ～見つかっちゃたわあん。」

そこにはクネクネしている貂蟬がいた……

38話 今日は何の日か知ってるかい？盛大に嘘ついてもいい日だよ！ 完結編

どうにか出来たが話しが回収しきれてない…

39話 結婚式…（前書き）

お久しぶりです！更新しました。

本編に戻りました。

変になつていると 思いますが、 よろしくおねがいします。

街にかなりの迷惑をかけたあの騒動から早数ヶ月、國もかなり安定して自分でもかなりの良い國になつたのではないかと思つてゐる。

俺は星にプロポーズしてからは今まで特に何もしていなかつた。

そこで俺は結婚式を開く事にした。一刀と一緒に現代の結婚式をしようと計画を立て、腕利きの呉服店に俺達の考えたウエディングドレスとタキシードを発注した。

ウエディングドレスを考えている時の俺と一刀はデザインの方向性に多少揉めたが、互いの意見を採用、却下する事により、双方満足が行く物が完成した。

一つは純白のスタンダードなウエディングドレス、もう一つは星の好きな蝶をイメージしたドレスだ。絶対に似合つに違ひない！今から楽しみである。

俺としては城の中で控えめな式をしたかったのだが、一刀を筆頭に蜀王とその妃のめでたい晴れ舞台を蜀の民に見せないでどうする！と言わされたため國を上げての一大イベントになつた。

そして式の事はすぐに国内に通達され、民からも歓喜の声が上がつてゐるとの報告もあつた。

民が喜んでくれる事に俺はかなりの感動をしてしまつた。民から認めてもらつてゐるという実感が湧く。

しばらくして、呉服店から発注していたドレスとタキシードが完成したとの報告が入り、一刀と一緒に受け取りに行つた。

「李驥様。こちらがご注文の品でござります。初めて作りましたゆえ、お望みの形に完成しているかは解りませんが、私はかなりの自信作でござります。」

呉服店の店長が完成した品を持って来る。俺は思わず目を見開いたやー。

その品は俺のイメージをそのまま再現したような品だつたからだ！初めて作つてこれとは…こここの職人は本当に良い仕事をしている…職人GJ！絶対星に似合つた！

「本当にありがとうございます！俺の我が儘を聞いてくれて…これで良い式が挙げれそうです！」

俺はここまで仕立て上げてくれた職人たちと我が儘を聞いてくれた人達に感謝を込めてお礼をした。

呉服店の人達は気まずそうな表情をしていたが、俺がこれは王とか関係なく一人の人間としてお礼を言つていいと言つたら、快く受け取つてくれた。

さて、後はドレスを星に渡すだけなのだが、妄想だけで俺の感情がヤバい事になつていてるのに現実で見てしまつたらどうなる事やら…全く恐ろしい物だよ…

さて…ドレスも揃つたし日取りも決まった。後は式の日を待つだけ

だ。ドレス姿の星は式当日まで見ない予定だ。星本人には試着してもらひうけどな。スリーサイズを聞いた時はジト目で見られていたのは傷付いた…

城に帰つた俺はドレスを渡すべく星を探した。兵に聞くと星は女性の方々とお茶会をしているようだつた。

庭の方では女性の方々がお茶を飲んでいるのが確認できた。邪魔をするのは良くないと思い俺は遠くで見ていたのだが、お茶会の会場に近付いて行く者がいた。

一刀である。

「コイツはなんだよ? どれだけ空氣読めないやつなの? 女子会に踏み込むとは…」コイツの頭の中はどうなつてんだよ? どれだけ女好きなのさ?

一刀が入る事により回りの空氣が少し変わつた。いくら他の女性がお前の事を好きでも女子会に踏み込むとお前は幸せかもしれんが、女性はかなり不快感になるぞ? しかしそこは流石な女性。嫌な空気は一瞬で瞬時に受け入れの空氣に早変わりだ。

一刀…俺は君の空氣の読めなさに脱帽だよ…

だが、一刀の乱入によりあの場所に入りやすくなつたのは間違いない。

どひじょひつか…

「あら? 李翻様こんな所で何をしているのかしり?」

黄忠さんが声をかけてきた。どひじょひつか…娘さんと璃々ちゃんトイレ

に連れていっていたようだ。

「いやあ庭で開かれていた女性のお茶会に一刀が乗り込んだ事を見ましたよ。あいつの空氣の読めなさには脱帽ですよ。」

「確かに『主人様は空気が読めない所があるわね。でも話しの内容は星ちゃんと李翻様の式の事だから別に入つても良いんじやないかしら? それに手に持つて『いるそれを星ちゃんに渡したいの』でしょう?』

黄忠さん…貴女はどれだけ大人なのですか? 尊敬します。
俺は黄忠さんとお茶会の会場に向かつた。

「和喜いつたい何処に行つっていたのだ? 探したぞ!」

会場に着くなり星から何故か怒られてしまった。
丁度いいから渡しておこう。

「今度の式の時に星に着てほしい服が完成したからなそれを取りに行つていたんだ。星…式の時は是非コレを着てほしいんだ!」

俺はそう言ひ、星に蝶をイメージしたドレスを渡した。純白のドレスはスカートなどが長く型崩れを防ぐ為別の部屋にマネキンに着せている。

「コレは… ー? なんと美しいー。」

星はかなり嬉しそうだ。気に入つて貰えて俺は嬉しい。ならば純白のドレスもきっと気に入ってくれるだろう。

「実はもう一着あるんだが見てくれるか?」

俺がそつまつと星と他の女性達も見たいと言ふ、全員で純白のドレスを置いてある部屋に向かつた。

「凄い… 先程の服もかなり美しいが、コレは何とも… 言葉にならぬな… 和喜… 本当にこの服を私が着ても良いのか?」

「ああ。星に着て欲しくて作つたんだ。絶対に着てくれ。」

星も喜んでゐみたいだ。本当に作つて良かつたよ。

式まで残り一週間となり、蜀の街も城の中も慌ただしくなつてきた。

ドレスの試着を一緒に見ていた黄忠さんからドレスを着た星はとても輝いていたと聞いた。その時女として嫉妬心を抱いたそうだ。どれだけ綺麗なんだよ… 本当に楽しみだ。

式まで残り一週間となり、国が祝い事一色になつていた。早く式の

田にならないうかと首を搔くしている俺がいる。

そして今日は式の内容にある俺達が街の大通りをパレードするに当たつての警備をどうするかの会議をしていた。

「ではこれで式の警備を行いたいと思っています。異論のある方はいませんか？」

諸葛亮のまとめに誰も異論を唱える者はいない。

「ではこれで今日の会議を終了したいと思っています。」

「会議中の所申し訳ありませんー緊急事態ですー！」

突如入つて来た兵からは緊迫した表情が読み取れる。よほどこの事態だとそこにいる全員が息を飲んだ。

「どうしたー何があった？」

関羽が兵に聞く。

「はー！北方から蜀に向け、何者かが進軍していると証し報告がございました！」

「何つ！？それは何処の旗だ？」

兵の報告に關羽が問う。全員に更なる緊張が走る。

「旗はあつません……しかし、敵は全て奇妙な格好をしてあつました！」

「多分そいつ等は五胡だ……私達の国を滅ぼし、母様まで……于吉……私の仇……」

馬超は怒りと憎しみで肩を震わせている。余程なのだらつ。握つて
いる拳からは血が滲んでいる。
確かにアソツはかなり危険だ……

「敵はいつ頃来るのだ？」

星が兵に問う。

状況からして式の場合じゃない。

「はつ！進行状況からして、一週間後に蜀に侵入して来るの事！」

なつ？！俺達は息を飲んだ。

次回は対五胡です。

40話 対 五胡決戦前（前書き）

“ひつむー！

更新します。いよいよちよつとした山場を迎へようとしています。

短いですが、おやめ合戦でトドい。

40話 対 五胡決戦前

五胡が攻めてきた。その知らせを聞いた俺達は式を延期にし、五胡を討つべく直ぐに軍議を開いた。

「現在、五胡の人達は北方から真っ直ぐこちらに向かって来ています。幸いそちら方面には村もありませんから、民や畠などには被害が出ていません。なるべく蜀から離れた所で敵を討ちたいのでこの軍議が終わり次第出発したいと思いますが、李飴さん許可をおねがいします。」

諸葛亮が五胡の進軍状況などを説明し、これから俺達も行くべきだと唱える。俺も端からそのつもりだったので異論も何もない。周りもその様子だ。得に星からは凄い怒りのオーラが出ていた。式を潰されたんだ。俺も頭に来てるんだよ！

「俺にも異論はない！ではこれより五胡を討つ！一番隊、二番隊、四番隊は歩兵の指揮を！五番隊は弓兵の指揮を！七番隊は騎馬隊の指揮を頼む！諸葛亮と鳳統は兵糧の準備をお願いする！劉備と一刀は救護班の補佐に回ってくれ！これより一刻半後に城門に集合する！解散！」

「御意！」

「了解なのだー！」

「わかりました。」

上から関羽、張飛、魏延。そう書いて会議室から出ていく。

「わかったわ。」

「ふん！腕がなりあるわい！」

黄忠さんと厳顔さんも出ていく。厳顔さんは『気合』に十分のよつだ。

「よつしゃー！生まれ変わった西涼の騎馬隊の恐ろしさを見せてやるぜー！行くぞお！蒲公英！」

「ちょっと待つてよお姉様！」

『気合』に十分な馬超とそれを追つていいく馬岱。

「頑張るつね。じ主人様！」

「そうだね桃香。ありがとう和喜。特に役に立たない俺達に救護の仕事を回してくれて。全力で頑張るよー！」

一刀はそう言い出していく。

残つたのは俺を含む三番隊の星と恋と音々だ。久し振りに三番隊として戦うな……

「よし！俺達も行くか。三番隊の連中が暴れたがってる。久し振りにの戦だ派手に行こうか！」

俺の言葉に二人が頷く。

俺達は二番隊と隊舎へと向かつた。

そして一刻半後。城門へ来ると、準備を終えた各隊長からの報告を受け、出発に入る。

「今から俺達は我が国に攻め込んで来ている五胡と言う者達を討ちに行く！田頃の訓練を思いだせ！俺達の国を守る為に一緒に戦おう！」

俺の言葉に兵の皆が答える。士気も十一分だ！

「では出陣！」

そして俺達は蜀を出た。

蜀を出て五日、蜀の領地の最北端まで俺達は来た。ここは崖になつていて、おれが有り、その下は激しく流れゐる三がある。

「着いたな……ここで俺達は五胡と戦う。なるべく被害を最小限にしたいのだが、相手はあの于吉だ……」

簡単に事が進むとは考えられない……」

于吉……奴の実力は計り知れない。あの時の重圧が本当であればやはり俺と同等かそれ以上……これはもしもの時の事を考えとかないといけないな……

「和喜……ここにいたか……」

俺は一人まだ現れぬ敵の方角を見ながら考えていたのだが、星が来た事により考えるのを止めた。

「和喜。やはりお主は前線に出るのか?」

星が真剣な顔で俺に聞いてくる。確かに王はなるべく安全な所にいるのが基本だ。前線に行き、直ぐに討ち死になどすれば、兵全ての士氣に関わってしまう。まあ星の事だそれよりも別の事を考えてるに違いない。

しかし、今回の敵はそんな事を言つている場合ではないのだ。

「当たり前だ。今から来る敵は正直言つて強い、俺と同等かそれ以上なんだ……俺が行かないといけない……」

俺はそう言いながら星を見る。星は顔をうつむかせたまま何も言わない。于吉の事を前に話した事を覚えているのだろう……どんな奴なのかは分かつてているはずだ。

「相手がどんな奴なのかは分かつてている!だが私は和喜に戦つて欲しくない!この戦はとても嫌な予感がするのだ!和喜が……和喜がい

なくなると感じてしまうのだ…私は和喜を失いたくない！」

星はそう言いながら、俺の胸に顔を埋める。俺は星を優しく抱きしめる。抱きしめた星はいつもより小さく感じた。

そこまで俺の事を思つてくれているのか…ありがとうな星。

「星。俺を誰だと思つてるんだ？俺はそう簡単には死にはしない！絶対に生き残つてみせるさ！お前のその嫌な予感？そんな物はクソ食らえだ！心配するな、俺は大丈夫だよ。」

俺は飛び切りの笑顔でそう答える。星もその言葉が聞いたのか、俺に笑顔を向けてくる。
その笑顔で俺は千人力だよ。

「和喜…約束してくれ。この戦絶対に生き残る事を。」

「ああ…約束する。この戦を無事に終わらして次こそ式を挙げような！」

俺たちは沈み始めた夕日に約束を立てた。

そして一人を裂く歯車は静かに回り始めたのだつた…

40話 対 五胡決戦前（後書き）

次は気合い入れて書くかな…入るかな…頑張りますのでよろしくおねがいします。

感想お待ちしています！

4-1話 五胡との決戦前2（前書き）

すみません…いよいよ戦に入らうと思つたら、まだ入れませんでした。

まだ決戦前です…お許しください…

41話 五胡との決戦前2

星と約束をしたその日の夜。俺達は軍議を開いた。

「様子を見に行かせていた密偵の報告では敵の数はおよそ30万です。こちらは20万ですが、こちらには地の利がある上に、三番隊の皆さんも勢揃いしています。数には多少不利ですが、問題は無いと思います。」

鳳統の言葉に俺以外の将達が安堵する。

「すまない…この戦は三番隊がいるからと安心されでは困る。普段の戦から相手に頼る事は油断を意味する。その油断が敗北へと繋がるんだ。それを忘れないでくれ。」

俺の言葉に全員の表情が固まる。考え方直してくれたようだ。

「今まで三番隊は戦でも最小限の人員でやって来た。しかし今回の戦は三番隊全総力を持って来た。それ程の相手なんだ…。」

俺の言葉に全員が息を呑む。三国最強と言われる三番隊が全てこの戦に参加しているとなると、それだけで相手がどれ程な者なのかが分かつて貰えたようだ。」

「李翻さん。今から戦う相手を『存知なんですか?』

諸葛亮が質問していく。

「ああ……会つたこともある。奴の名は子吉。」

「李翻様! 奴と会つたことあるのか?」

馬超が興奮気味に俺に聞いてくる。親の仇らしく、顔からは怨みが滲み出ている。

「落ち着け馬超。俺が奴と会つたのは俺達が蜀に来てしじばらくだ。前王の劉璋を俺が殺した時に現れたんだ。はつきりと言つべ。馬超仇討ちならやめておけ。お前じや奴には敵わない。」

「でもアイツはお母様の仇なんだ! 私も蒲公英も……お願いだ! 私に仇を取らせてくれ!」

俺の忠告に馬超は一切聞く耳持つていない。悔しいのは分かる。俺も昔両親を殺されたのだから……

「馬超……お前の気持ちは分かる。俺も昔両親を賊に殺されたからな……だが今回の相手は賊ではない。奴の実力は俺と同等かそれ以上な

んだ。奴に対しての仇は俺が受け持つ。それでも行くと言つのであれば俺がここで前を切るぞ！」

その言葉が聞いたのか、馬超は大人しくなり椅子に座つた。ただ表情は今だに納得していないようだつたが…

「「」の戦は俺も皆と同じく先頭に立ち、一緒に戦う。王とかは関係ない。正直この戦は魏や呉を相手するより大変な戦いになるだろう…俺はなるべく蜀の被害を最小限に押さえたいんだ…だから許してくれ！」

「それには私は反対です…いくら李翻さんが蜀で一番強いとしても王様なんです。王がもし倒れたら「」の国はどうするんですか？」

「諸葛亮が俺の言葉に反対する。普通はその考えが正解なのだろうが、俺もこれは譲れない。相手も相手だからな…

「諸葛亮…すまないがこれは譲れない。この戦は相手が悪すぎるんだ…俺が出ないとここにいる皆を失う可能性があるんだ。心配するな！俺はそう簡単には死にはしない。」

俺の言葉に諸葛亮は納得言つていなうだが、引き下がつてくれた。

「よし。ならばこれで軍議を終了する。いよいよ五胡との戦が始まる。明日は戦に備えてゆっくりと休んでくれ。あと一刀は後で俺の天幕まで来てくれ。」

そう言つて皆は各自の天幕に引き上げて行く。

軍議も終了してしばらくして俺の天幕には一刀が来ていた。星には少しの間天幕から出てもらつている。

「で話しさ何なんだ？俺にしか話せない事なのか？」

一刀が聞いてくる。

「一刀…相手の兵は皆でどうにか出来るだろう。だが敵の大将の妖術使いの于吉は本当にヤバい奴なんだ…奴と俺が対峙すればどちらかが必ず死ぬだろう…だからもし俺が死ぬ事になつたら蜀の事を頼みたい…やつてくれるか？一刀。」

俺の話を一刀は黙つて聞いてくれていた。後は一刀の返事を待つだけだ。

すると一刀は急に立ち上がり、俺を思いつ切り殴ってきた。

「和喜…その話しさ断る！お前は馬鹿なのか？何が俺が死んだら後

の事は任せるだ！ふざけるな！お前は趙雲さんと約束したんじゃないのか？この戦で必ず生き残ると！今から諦めてどうする？死ぬ事を考えるな！生き抜く事を考えろよ。」

一刀の言葉が俺の心に響く。俺は何を考えていたんだと我に返った。星と約束したじやないか。俺は必ず生き残ると。目が覚めたよ。

「サンキューな一刀。何最初から諦めていたんだろうな俺は。おかげで目が覚めたよ！お前と話せて良かつた。」

「それなら良いんだだから、一度とそんな事は言つなよ？お前がいなくなれば俺達も悲しいが一番悲しむのは趙雲さんなんだからな。」

一刀の言葉で俺は絶対にこの戦に勝ち、絶対に生き残ると心に誓つた。

一刀は俺の表情に満足したのか、天幕から出て行つた。やっぱり親友と話せて良かつたよ…

「和喜、北郷殿と話して何かすつきりとした顔になつたな。何かあつたのか？」

一刀を入れ代わりで星が天幕に入ってきた。

俺はそんなに思い悩んでいた顔をしていたのか？

「まあ持つべき物は親友だなと感じていたかな…」

「まう…まあ私にひとては愛紗みたいな感じか。しかし北郷殿には感謝しないといけないな…」

確かに最近は星は関羽とかなり仲が良いみたいだつたからな。俺といない時はよく関羽と一緒にいるみたいだからな。良い事だ。

「今日はもう寝ようか。戦前にゆっくり寝れるのは今日で最後なんだ。明日はゆっくりして鋭気を養おう。」

俺はそう良い、星と眠りに入った。

4-1話 五胡との決戦前2（後書き）

次は本当に五胡戦を書きます。一応気合を入れて書く予定なので投稿に時間がかかるかもしません…

その時は申し訳ありませんがお待ちください…なるべく早く仕上げるよかったです…

では！

42話 五胡との死闘そして…（前書き）

お久しぶりです。

一ヶ月以上更新が止まつていて申し訳ありませんでした。

楽しみにしていた方々に大変ご迷惑をかけてしまいました。

ではどうぞーおかしな所がかなり有ると思いますが…

42話 五胡との死闘そして…

五胡が到着するであるかつと予想されたいた早朝、俺達は陣を引き迎え撃つ準備をしていた。

「報告します！これより5里先にこちらに向かつて進軍して来る者有りとの密偵によりありました！間違いなく五胡かと…」

「いよいよやつて来るな…全員無事に生き残ればいいのだが…

しばらくすると地平線から動く集団が見えてきた。いよいよ決戦の火蓋が切られようとしている。

やって来る五胡の兵士達に守られるようにそびえ立つ櫓。どうやらあの中に于吉はいるようだ。

体に力が入るのが分かる。

周りを見ると、仲間達にも気合いが入っているのが分かる。

「敵は来た！俺達は国を守る為、民を守る為に戦おう！敵は強大だが俺達は絶対に負けない！今こそ蜀の底力を見せるのだ！」

『ウオオオオオオツ…』

俺の号令で一気に士気が上がっていく。さあ始めよつ戦いを…于吉よ…俺達に喧嘩売った事を後悔させてやるつ…

五胡の連中は進軍してくる勢いをそのままに俺達に突っ込んで来る。

俺達はまず、黄忠さんと嚴顥さん率いる弓兵の五番隊に弓での先制をした。

俺達から射られる弓の雨に五胡の兵士達の歩みも遅くなつていぐ。だがこれは一時の攻撃に過ぎない…

奴らは弓に倒れた仲間を盾にこちらに進んで来ているのだ。誰ひとりとして気遣う者はいなかつた。倒れた者を踏み付け、盾にし進んで来る五胡。弓で減らせた人数も少数のようだつた。

ここから馬超と馬岱が率いる七番隊に右翼と左翼から攻めてもらひ敵を撹乱させながら、正面から関羽が率いる一番隊、張飛が率いる一番隊、魏延が率いる四番隊と星が率いる三番隊で攻め込む。俺は勿論三番隊だ。

互いの勢力がぶつかり合つ。そして命のやり取りが行われる。

しかし、五胡の連中は何かがおかしい…やはり倒れていく仲間を気遣う事は一切しないのだ。いくら戦場とはいえ、仲間がやられ行く所は彼らかの情や焦りが表れるはずなのだが、そんな事には一切目を向けない。

俺は向かつて来る敵を切り捨てながらある事に気が付いた。五胡の兵士を良く見ると、心ここに有らずのようで田が虚ろだつたのだ。まるで何者かに操られているようだつたのだ…そんな事を出来るのは奴しかいない…妖術使いの干吉だ。

操られている兵士の顔は悲しみの表情だつた。まるで無理矢理この戦場に連れてこられたような感じだつたのだ。

俺は刀を逆刃に持ち替え、気絶させようとしたのだが、操られてい

る為意識は無くとも体は勝手に動き俺に向かって来る。俺は切りた
くないが、切るしかない…最悪の悪循環である…

更に敵の殆どは俺を狙っている事に気が付いた。他の仲間達にと戦
っているのは7割ほど、俺に向かって来ているのは残りだ。

俺の周りは既に切り殺した五胡の兵士で広がっていた。辺りに漂う
血の臭い。敵は屍を踏み付け俺に向かって来る。精神的にも少し辛
くなつてきているのが分かる。

「ふふふ流石は李岱臺と言つた所ですねえ…私が用意した駒が半分
以上潰されてしましましたよ。」

俺達が五胡の兵士を半数ほど減らした頃、不気味な笑みを浮かべな
がら俺の田の前に音も無く于吉は現れた。

俺は慌てて于吉から距離を取る。体から嫌な汗が出てくるのがわか
る…

あの時は直ぐにいなくなつたから少ししか分からなかつたが、戦場
で感じる于吉の不気味さはハンパじゃない…それに殺氣が感じられ
ない…だからこそ俺に気付かれずに田の前に現れたんだろうが…
やはりコイツはここで止めておかないと、とんでもない事になる…
大陸どころか、世界規模での問題に発展するだろ…

「于吉… テメの目的はなんだ!-?」

俺は刀を抜き、何時でも切り掛かれるような体勢で于吉に問う。

「目的ですか？そんな物は簡単ですよ…私は貴方…李岱臺が欲しい…貴方を私の物にしたいのですよ。まあ正確には貴方の中に流れるその血ですけどね…」

俺の血だと…？一体何の為だ？

于吉の言葉に対して、俺の血が必要な理由が見当たらない。

「一体何の為に俺の血が必要なんだ！？」

「いえ…私はまだ未熟な術士でしてね…連れてきた30万の駒を操るので精一杯なんですよ。もつと多くの駒を使える為には武人として最強である貴方の血をこの太平妖術に飲ませ、太平妖術を私の身体に取り込めば私は最強の術士になる事が出来るのですよ…無論貴方もまだ私同様に更なる力を手に入れる事が出来ますが、その源を見つける事が出来ない限り無理でしょう…まあその前に私がここで始末しますが…」

「イツはやっぱり危険すぎる…」」で差し違えてでも止めるしかない…

「良い目ですねえ…李岱臺。流石は武人最強なだけはありますねえ…ですが貴方は私に勝つ事は無いでしょう…何せ私には守る物が何一つないのですから…私は術士…駒を思い通りに出来るのですよ…例えばこのように駒を爆破する事もできるのですよ…」

于吉が言つと同時に、俺から少し離れた五胡の兵士が爆発した。肉片も残らず爆発した兵士。

俺はこの意味が一瞬で分かつた。

「もし貴方の仲間と戦つてゐる兵士が爆破したらどうなりますかねえ…クツクツク…面白いとは思いませんか？」

「テメエ…！」于吉の言葉は俺を追い詰めるのに苦労しなかつた。これだけしか言えない自分が情けない…俺は最初から仲間全てを人質に取られていたのだった…

俺は急いで全員を避難させる為に于吉から離れた。何故か于吉はその場から離れる俺を不気味な笑みで見過ごしていた。于吉の目的は俺一人、俺が向こうに行けば、仲間と戦つてゐる五胡の兵士は俺に向かつてくるはずだ！

「全員今すぐここから離れろ！」

俺は仲間達に聞こえるように自分が出せる最大の声で叫んだ。

「だが和樹！引いてどうする？いやつ等はただ切るだけでは直ぐに立ち上がる。首を切り落とさない限り奴らは向かつて来るのだぞ？」

星の言つことに仲間達が頷く。かなり苦戦していたように見える。

「ここからは俺が受け持つ！全員ここからは下がり、体勢を整えて

また来てくれ……

「何を言つてゐるのだ和喜！？相手はまだ何万といふのだぞ？一人で相手をするなど死ぬ氣ではないであろうな？！」

俺の言葉に星が食らい付く。星の言葉に近くにいる仲間達が頷く。

「俺が馬鹿な事言つてゐるのは良く解る！この際だから正直に話す。敵の狙いは蜀なんかじゃない！俺が狙いなんだ！俺が残ればみんなや部下、民に被害は出ないはずなんだ！」これは俺を残して引いてくれ……

「だからといって和喜を一人には出来ぬ！私も残るぞ！」

星の目は絶対に動かないと言つてゐるようだった……

「仕方ない……すまないが星以外は一度引いて体勢を整えて戻つてきて来てくれ……恋、三番隊のみんなの指揮を任せた。あと諸葛亮にはここから全ての指揮を任せせる。」

「……分かった……お兄ちゃんとお姉ちゃんも無事にいて……」

「わ、わかりましたー星さんも季麿さんもおきをつけてー！」

俺の言葉に答える恋と諸葛亮。

そして蜀の戦力は俺と星を残して戦略的撤退をしていった。

残った俺と星はまだ迫って来る敵を少しづつ減らして行つた。

だが数が圧倒的に不利な為に星の攻撃が若干だが落ちてきていた。
俺は星の動きにフォローを入れながら敵を切つていく。敵は強制的に動かされているためそれを切つていく俺達もかなり辛い物がある…

「おやおや…たつた一人で私が用意した駒が大分減らされてしまいましたねえ…やはり李岱臺の相手は雑魚には無理でしたか…ではここからは私がお相手致しましょう…体力も落ちている貴方には私に敵う訳がないでしようが、死ぬ前に私を少しでも楽しませてくださいね…」

敵を大分減らした所に千吉がやつってきた。俺も大分体力が消耗している為に正直相手をするのは辛い所がかなりあつた。

だが、ここで奴を止める事が出来なければ、世界が終わる。

残った体力でどこまで持つかは分からぬが意地でも止めてやる…
俺は思いつきり千吉を睨む。

「全く良い目ですよ…その目はそそりますねえ…でもその前に、そこの小娘に動かれては目障りです。ふふふ…良い事を思い付きましたよ。小娘には李岱臺の死に様を見てもらいましょう…貴女は思いい人を目の前で殺されるのですよ！貴女はここでおとなしくして下さい。」

「

于吉が星に向かつて何やら呟きだしたと思つたら、星の足元から、木の根らしき物が出て来て星の動きを封じた。

星は必死に抵抗するが、星の身体に巻き付いた根はびくともしない。近付こうとしても周りを五胡の兵士に固められ簡単には近付けない。

「于吉！星に何をした？」

「クックク…何もしていませんよ。彼女には貴方の死に様を見せたいと思いましてね、動きを封じさせてもらいました。愛する男が目の前で死ぬ様を見せられるとどうなりますかね？思つただけでも楽しみですよ。」

頭に一気に血が昇る。俺は今まで以上に怒りが溢れているのが分かる。人を人として見ない人間。持つている刀に力がこもる。

「于吉…俺はテメエをここで始末する…」

「出来ますかねえ？貴方ごときに…良いでしょ？…相手になりますよー私の力の源になるがいい！」

「うして俺と于吉の死合が始まった。

最強の武人と最強の術士。最強同士がぶつかれば、当たりの地形も次第に変わっていく。俺は捕まっている星を巻き込まないように于

吉と戦っている。仮に隙が出れば星を助けだし、逃がす予定だ。

だが流石は干吉…隙といつ隙が無いのだ…更に干吉は五胡の兵士も使って来る。俺が干吉に近付けば、兵士が盾になる。盾になると同時に干吉の妖術が俺に向かってくるのだ。完全に干吉の有利である。

だが逆に、懷に入れば俺のペースに持つて行けると言つことだ。相手は術士。接近戦も出来るだらうが術がメインだらうから、隙は必ず生まれる。それまでは干吉の妖術を避け切るしかない…

干吉に一瞬の隙が見えた。俺は迷う事なく懷に入り込み斬ろうとするが、俺の刃は干吉には届かなかつた。

「流石は李岱臺。一瞬の隙を見逃さず飛び込んでくるとは…ですが残念ですね。私は術士ですが接近戦での戦いも心得ていますから。」

そう言つて俺の刀は奴の持つていた扇子によつて止められたのだ…俺は少し距離を置き、奴との間合いを計る。奴の扇子はただの扇子なんかじゃない。明らかに金属類で出来ている。更に奴は術士、扇子に乗せて妖術を使ってくるかもしれない…

色々な憶測が頭を駆け巡る。はつきりとしないから迂闊に攻撃も出来ない…

どうすればいい…?

「来ないのであれば」ちらから行きますよ!」

そう言つて千吉は扇子に風見たいな物を纏いこちらに撃つてきた。その斬撃は辺りにいた五胡の兵士を切り裂きながら向かつてくる。

俺は刀で受け流しながら千吉との距離を詰め、接近戦に持ち込むが俺の刀は止められてしまう。

俺の刀は止められてしまう。

俺は紙一重で避けていく。

「避けてばかりでは私を止める事は出来ませんよ？風の刃を撃つているのですよ？良いのですか？後ろにいる貴方の恋人が切り刻まれても？」

千吉の言葉に俺は後ろを見る。風の刃が一直線に星に向かつて行く。俺は星を助けるべく、風の刃を打ち落とし千吉に向かつて振り向いたその時、俺の目の前には風の刃が迫つていた。

間に合わない…

俺はその斬撃をモロに受けてしまつた…

42話 五胡との死闘そして…（後書き）

于吉をかなり悪役に書いたつもりです。未熟ですが…

次回は星視点です。これは直ぐに投稿出来ると思います。

では次回！

これ興新一

今回お屋の親切でござる事す。

黙文でわがお主を貰ひ下さる。

大量の血を流しながら倒れていく男性その人は私の良く知る人物だ。私の恋人は他の誰よりも強いはず…倒れていく人はきっと別の人なんだ。意識ではそう思おうとしても目の前で起きている事は紛れもない事実。

認めたくない…

和喜が…あの最強の武人である和喜が負けるはずなんて…

「ハハハハ！良い様ですよ李岱薹。愛しき人の目の前で倒れる姿。傑作です！見てください！趙子龍の顔を…おつと…見れるはずあります…なら近くで見れるようにしてあげましょう。」

そう言って和喜を私に向かって蹴り飛ばしてきた。乱暴に私の目の前に送ってきた子吉。私はここを戦場だと忘れ和喜を抱え込む。辛うじて息はあるようだが直ぐに手当をしないと危ない状態だった。

「せ……」

和喜はどうにかして喋りつとすると、声にならない。私は和喜を抱きしめる。目には大量の涙が溜まっている。早く治療を！

「お別れは出来ましたか趙子龍？貴女も可哀相な女性ですね。恋人がこんなになるとは……まあ貴女も……いや、この大陸にいる人間は時期が来れば全て私の手により始末されるのですから……ただ李岱臺は今ですが……それまではこの男とはお別れです。」

于吉がそう言つと、和喜の身体は于吉の妖術により浮かび上がつた。私は渡すまいと手を伸ばそうとしたが、届かない。離れていく和喜……追い掛けようとも追いつけない……

「では李岱臺……さようなら。」

于吉はそう言つて和喜を激流の川へと放り投げた。

・・・・・

・・・・・

「……」

五胡との決戦から二月がたつた。あれから私は自室から全く出なくなってしまった。あの日の光景は脳裏に焼き付き、夢に出て来る…見たくないから寝ないようにしてるのだが、寝てしまった場合は必ず見てしまつ…食事も殆ど口にしていない…職務も何もかも手に付かず、ただひたすら寝台に座つてている日々を過ごす…今まで隣で寝息を立てていた恋人の姿は無い…

この二月の間、何回も命を絶とうとしたのだが、私の中の和喜がその気持ちを止めているような気がしている。今は私の中の和喜が心の支えになつていて。何処かで生きているのではないかと思つてしまつほどに…

しばらくして私の私室の扉を叩く音が聞こえた。入つて来たのは瀬紗だった。私が籠つてから毎日やって来る。

「星…皆心配しているんだ。ここから出て顔をだしたらどうだ？」

愛紗の言葉に私はただ首を横に振る。今は誰とも話したくない…ここを出たくない…和喜がいた空間に少しでも長くいたい…愛紗はそんな私を見ながら話し出す。

「星…確かにお前が一番辛いかも知れない…」

「つむさい…

「だがここでもう少し込んでいいですか？」

黙れ…

「お前がここしていると李翻殿も悲しむのではないか？」

「…愛する人が血を流しながら倒れていく姿を見たことあるのか？見ただことがないからそのような事が言えるのである？…もう私に構わ

ないでくれ！－私を一人にしてくれ！－

「私に構うな！誰にも会いたくない！話したくない！
私は愛紗に思つている事を全て話した。これでもうここには来ない
だろ？…」

パンツ

乾いた音が部屋に鳴り響く。愛紗が私の頬を叩いた音だ…

「貴様の事などわかるはずないだろ？－私は星ではないのだ！
だが大切な人を失う悲しみは分かる…私も昔に兄を目の前で賊に殺
された…そして前に話しただろ？私も李翻殿の事を好いていると
言つことを知つていいだろ？私の気持ちを伝え切れずにいなくな
ってしまったのだ…」

「うるさい…うるさい…うるさい…うるさい…

私は愛紗以上に辛くて悲しいんだ…

「星…悲しんでいるのはお前だけではないのだぞ…私だつて悲しい。
蜀にいる仲間も民も皆が悲しんでいたのだ。それは皆がまともに職
務が出来ぬほどにな…」

特に恋と音々も最初は星みたいに部屋に閉じこもり、誰とも関わら

うとしなかつた…だが暫くして一人は部屋から出た。理由を聞くと恋と音々は何と言つたと思つ?」

愛紗の言葉に私は首を横に振る。

今の私では考える事が出来ない…

「一人はな…『…残つた人達でお兄ちゃんの作った国を終わらせないようにする…お兄ちゃんもきっと望んでいるはず…』『…そういうのです…』ぱぱ上も音々達を応援してくれるのです! まま上もその事にきっと気が付くのです!』

……と言つていたのだ…その言葉を聞いて私達はここに落ち込んでいるのは間違いだと気が付いた。この国を絶対に絶やさないようになり…一人は進み出したのだ。李翻殿の近くにいる者として。星! お前が一番李翻殿の側にいたのではないか?』

恋と音々の言つた言葉で私は気が付いた。一人は答えを見つけだし、行動した…私は何だ? ずっと部屋に籠り、ただ泣いていただけ…一番近くにいる私がこんなでどうする…?

私は左手の指輪を眺める。指輪の輝きは色褪せる事はない。

「ありがとう…愛紗。いろいろと迷惑をかけてすまぬな…」

「うむ…ふさぎ込むお主は見たくない。」

残つた私は和喜の残した国を守つて行く。妻として、一人の武人として…こうして私は久しぶりに外に出た。外はいつもと代わらない風景が広がっていた。

「星、皆に顔見せしてはどうだ？ ちょうど今から軍議があるので、何やら吳より手紙が届いたらしくその対策かなにかをするらしいのだが？」

軍議までは出る気がしなかつたのだが、何やらこの軍議には出た方が良いと感じる… 皆と久しぶりに会うのだ、別に良いだろ？

私は領き愛紗と一緒に軍議室に向かつた。

部屋に入ると皆は私が出て来た事に大いに喜んでいた。特に恋と音々の一人は大いに泣いて喜んでいた。

私も席に着き、朱里が読んでいる吳からの手紙に耳を傾ける。内容は簡単にする、魏がかなりの軍勢を用意して、戦の準備をしているという事。それに伴い蜀と吳が同盟を組もうという提案書だった。そして手紙の終盤に差し掛かる時、朱里の話しが止まる。

「嘘つ？ 星さん！ 喜んで下さい！ 李翻さんは生きています！ 孫策さんが瀕死だった李翻さんを助けたようです。良かつたですね！」

和喜が生きている。私は耳を疑つた。だが朱里の顔は嘘を言つていいような顔ではない。私は朱里の持つている手紙を読む。そこには

確かに和喜が生きている。今は吳で預かっていると言つ。

「ではこれより吳に向けて使者を送りたいと思います。一人は星さんで決定です。もう一人はご主人様に行つて貰いたいです。本当はご主人様は行くような事は無いのですが、私達の立場は弱いですから…上の者が行かなくては示しが付きません…無論護衛は沢山付けてますね。」

こうして私と北郷殿は吳に向けて出発した。和喜が生きている。こんなに嬉しい事はない。

出発して七日ほどで私達は吳に到着した。門番に話し、城の中に入り、玉座にて孫策殿を待つ。しばらくして孫策殿とその他武将が入つて来た。

「久しぶりね北郷一刀。連合軍以来かしら?ここに来たつて事は同盟の話しさを受けると言つ事で良いのかしら?あなたを送つてきただ言つ」とで答えは見えているけど。」

「お久しぶりです孫策さん。同盟の話しさを快く受けたいと思い蜀王代行として趙子龍と共にやつて参りました。」

北郷殿の言葉と同時に私達は頭を下げる。

本当に和喜は生きているのだろうか…?吳からの手紙ではそう書い

てあつたが、事の真相は自分の目で見ないと分からん……

「すまぬ孫策殿。一つ聞きたい事があるのだが良いであろうか？蜀に送られてきた手紙には李岱臺は生きているとあつたのだが、真なのか？」

「……確かに生きているわ……蜀からここまで流されて来たのよ、優秀な医者がたまたま呉にいたから、助かつたけど……でも趙雲、李岱臺と会うのは構わないわ……でもどんな事があつても動じない覚悟がないと正直辛いわよ……特に貴女には……」

良かつた……和喜は無事のようだ。だが孫策殿の言つた意味は一体何なのだ？

「李岱臺は一応客間にいると思つわ。大喬、小喬、案内してあげなさい。そこには妹の孫權がいると思うからいたら私の所に来るよう言つてちょうだい。」

「私達」一人は玉座から出て、二人の案内役に連れられて、和喜がいるであろう部屋に向かつている。

部屋に着くと案内役の二人は戻つて行つた。私達は扉を叩き中に入つた。

中には寝台に座つてている久しぶりに見る最愛の人の顔があつた。

私は和喜を見た瞬間涙が溢れてきた。生きていた。和喜は生きていた。

私は心から喜んだ。隣にいる孫策殿の妹らしき人は北郷殿に任せよ

う。

私は一目散に和喜に駆け寄り和喜に抱き着く。

「和喜…良かつた…生きていてくれたのだな…」

和喜の胸に顔を埋めて再会を喜ぶ。だが和喜からは何も聞こえない。どうしたのだ？早く私の名を呼んでくれ。

だが私の期待とは裏腹に和喜からは思いがけない言葉が聞こえてきた。

「申し訳ありません…どなたでしょうか…？」

えつ
……
?

43話 乙女の苦悩（後書き）

呉の方々の喋り方がわからんねえ…

次回は主人公視点に戻ります。

感想お待ちしております。ではまた次回！

44話 稲葉田景のむ（漫畫化）

今日は非常に短いです。

でまあいいやー。

44話 和喜田覚める

「 いじは…？」

目を覚ますとそこは知らない天井だった。

頭がぼーっとする。思考回路がまだ正常ではないらしい。頭痛も少ししている。

一旦整理しよう。まずは自分の名前からだ。

…………えつ？

いくら考えても自分の名前が出てこない。僕は？俺は？一体誰なんだ？

何も思い出せない。目覚める前の記憶が何一つ残ってはいなかつた

…急に不安感が襲つてくる…どうすればいい？

僕は体を抱え込んで震え出す。

怖い…

僕を支配している不安と恐怖心。気分が悪くなる。

記憶が一切無い。

僕を壊していくには時間がかかるだろ？…

親の顔も分からない…今まで交友を持った人物達の事も忘れている…

ふと自分の身体に目が行った。

僕の上半身はかなりの傷跡があった。一目見ただけで分かる。かなり致命傷だったと言うことも…

こんな事になるなら死にたかった…
記憶をなくす前の僕は一体何をしていたんだ？普通にしていればこんな傷を負う事もないだろう…僕は一体何者なのだ？

疑問ばかりが浮かんでくる。

手を見ると、左手の薬指には指輪がはまっていた。何故かこの指輪はとても大切な物だと僕の直感が言っているように感じた。
指輪を外して裏側を見てみると、『和喜、星よ永遠に』と書いてあつた。おそらく和喜とは僕の名前だと思う。だがあまり実感がなかつた…それに、星つて一体誰なんだ？そして永遠にとか結婚していみたみたいだ…ならば星つて人は僕の奥さんなのだろうか…
僕は指輪を元の指に付け直し、一息入れる。考える事が多過ぎて不安感も何もかもが飛んで行つてしまつたようだつた。

しばらくすると褐色の女性とカツコイイ青年と隠す布が以上に少ないムキムキのおじさん達が部屋に入つて來た。

「李翻ひやーん！良かつたわーん！起きてくれたのね！」

起きている僕を見て、一目散に抱き着いて來た三つ編みのムキムキなおじさん。近付いて來る瞬間に体が逃げろと信号を送つてきただ間に合わず、豊満な大胸筋の餌食になつてしまつた…
全身に鳥肌が立つ。

「こりゃ貂蝉！患者は起きたばかりなんだぞ。嬉しいのは分かるがそんな乱暴にするんじゃない！」

カツコイイ青年が貂蝉と言う筋肉、ダルマを制する。

貂蝉は渋々離れたが僕の体に着いた涙や鼻水をビリビリかしてほしい…

「李翻よ…一つ質問をしたい…起きる前の事を覚えていいか？」

青年の質問に僕は首を振る。

僕の名前は李翻と言つみたいだ。ならさつきの和喜は誰なんだ？

「そりいえば自己紹介がまだだったな！俺は華陀。大陸を旅してい
る医者だ。たまたま俺達が廻にいた時に君が流れて來たんだ。君は
目覚める前は瀕死の状態でそこにいる孫権に助けられたんだ。それ
は本当に危ない状態だった…」

そうやつてこれまでの事を話しあじめた。

44話 和喜田覚める（後書き）

次回は華陀が貂蟬の視点で1話書きます。どうぞお楽しみに。

45話 急患の患者（前書き）

今回も短いです……申し訳ありませんでした。

あとがなつの「都合主義になつておつまますので」「注意ください…

45話 急患の患者

俺達は今、孫権の治療の為にとある山に住んでいた龍の肝を取り、呪に持ち帰っている途中だ。あの龍は中々のものだったな。

「孫権ちゃんのお皿のモノの痛みは私にも分かるわーん」

「そりだのお貂蝉…あの痛みは尋常なる物ではないからな。」

一人はあるはずのない月経の話で盛り上がっている。まあこれで孫権の病も無事に完治するだろう。あとは気を送り込んで荒れた肌も治療しておくか…

俺がそんな事を考えていると、前方に何やら人だかりが出来ていた。近くにいた人に聞いてみると、どうやら大怪我を負った人が流されきたらしい。辛うじて息があるようで、医者の到着を待っているようだった。

これは放つておけない…

「貂蝉、卑弥呼。済まないが急用ができた。あそこに大怪我を負つた人が流されきたらしい。治療を施すがいいか？」

「何言つてゐるのよん。華陀ちゃんはダメだつて言つても行くでしょ？私達も手伝つてあ・げ・る！」

「「つむーだーりんはそんなオノコだから。異論は無い。」

俺は良い仲間と出会つたな。

俺はそう感じながらその患者の所へ向かつた。

「すまないが通してくれ。俺は医者だ。患者を見せてもらいたい。」

道を空けてもらひ患者へと近付く。患者を見ると、胸にはかなり深い傷を被つていた。更に川を流れて来たとなると、普通なら即死か溺死のどちらかと思う位だつた。この男の生命力が強い。だがそれも消えかかっている…

クソッ…医者である以上この命を救いたい…だがそれには龍の宝玉と血が必要だ…今から取りに行くのは時間がかかりすぎる…

貂蟬達に取つてきてもらひうか?俺はそう思い、貂蟬達を見る。だが二人の様子がかなりおかしい…一体どうしたのだ?

「華陀ちゃん…」の子助かるの…?」

あの貂蟬とは思えないほど弱々しい声だつた。顔も俯いてよく見えない。ここは正直に言つたほうが良いか…

「正直俺にはビリijoりもない……俺の力不足だ……」

俺は苦虫を噛んだような悔しさが滲み出る……」今まで生きよつとしている命を救えないなんて……

「華陀ちゃん！お願いだから……お願いだからこの子の命を……どうか……どうにか救つてあげて！この子は私の甥なの！死んだ弟の息子であるこの子が成長するのを見守るのが私の役目……お願い……華陀ちゃん……助けてあげて……」

貂蝉の言葉に俺は驚いた。この少年が貂蝉が言つていた甥だったとは……ならば意地でも命を救つてやりたい！だが必要な物はない……取りに行つてもらつて、その間は俺の五斗米道で命を繋ぐ！

「すまない……この少年を救うにあたつて頼みたい事がある……倒した龍の所まで行つて、龍の宝玉と血を取つてきてはくれないか？」

貂蝉にはここに残つていてもらいたいのだが、本人は肉親を救う為に凄い勢いで行こうとしている。

「だーりんよ。宝玉とは「れか？なんだか綺麗だつたからの、持ち帰つてきたわ！ついでに血もあるぞ！ガッハハハ！」

何たる偶然……卑弥呼が必要な物を持つていたとは……

これで直ぐに治療ができる。

俺は昔読んだ書物にあつた治療法を思い出す。だがそこに一つだけ問題があつた。

「貂蝉…これでこの少年は間違いなく助かる…命が助かる代わりにこの少年は対価を払わないとけなくなる…その対価はこの少年のこれまでの記憶だ…殆どの確率で記憶は無くなる…だが、限りなく少ない可能性で戻る事もあるが、あまり期待出来ない…それでも良いか?」

俺は貂蝉に肉親として同意を取る。助かつても何も覚えていないんだ…本人はかなり辛いだろう…

「いいわ…私達や、弟夫婦の事を忘れるのは辛いけど、この子には生きていて欲しいもの…記憶は…李翻ちゃんのお嫁さんがきっと戻してくれるはずよ!」

貂蝉の同意が得れた事を確認して治療に入る。この治療は俺の五斗米道最大の治療になるだろう…俺は全神経を研ぎ澄まし、黄金の針に気を送り込む。

「我が身針一つなり!…全速全開!全力回復!…ぐえんきにぬうわあああれえええつ!!!!!!」

俺は少年に針を差し込む。かなりの精神力が持つていかかる。だがここで倒れたら医者として心残りになる。俺は力を振り絞り、体中から気を集め。宝玉が少年の体内に取り込まれる。傷口が塞がり、少年の血色も良くなつた事を確認する。

「貂蝉……これで…大丈夫だ…」

俺はそう言って意識を失つた。気を失う前に見た貂蝉の顔は子を心配する親のようだった…

45話 急患の患者（後書き）

華陀視点にしてみました。
いかがだったでしょうか？

次回から主人公視点に戻ります。

感想お待ちしております。

46話 不安（前書き）

眠たさMAXです…中途半端ですがどうぞ…

「と言つ事だ…」

僕は華陀さんから助けられた経緯を聞いた。それは驚く事だつた。どうやら何処かで戦つていたらしく、僕は今にも死にそうな状態だつたらしい。

でも、貂蝉つて人が僕の叔父さんだなんてあまり認めたくはなかつた事実…残された僕の肉親だから仕方ないか…将来はあんなにはなりたくないな…

それについても本当に僕は結婚していたみたいだ。

名前は趙雲 子龍で真名は星らしい。星つて呼んでいたけど本当は星と呼ぶみたいだつた。

僕のお嫁さんか…一体どんな娘なんだろう…？一度会つてみたいため星さんには悲しい思いをさせてしまふのかな？複雑だな…

あと真名つて言つのあるらしい。僕の名前は李翻 岱臺で、真名を和喜と言つらしい。更に真名は預け合つた人としか呼んではいけないといつ。勝手に呼べば切り殺されても仕方が無いようだ。僕は別に誰からも呼ばれても良いかなつて思つている。

僕は本当に全ての記憶を無くしたんだと実感した。得に僕の心を痛め付けたのはお嫁さんの事も忘れている事だった…

他の記憶は戻らなくてもいい…せめて僕のお嫁さんの事だけは思い出したい…

「あの…華陀さん。僕の記憶は戻るのでしょうか…？」

僕は華陀さんに不安ながら聞いてみる。出来る事なら記憶を取り戻したい。

だが華陀さんから言われた言葉は僕の希望をあきらめと壊されてしまつた…

「俺個人としては言いたくは無いのだが、医者としてはせつと記憶を戻させてもらひ…記憶が戻る可能性は限りなく零に等しい…」

華陀さんの言葉で僕は落胆した…限りなく零に等しい。僕の記憶は戻らない…期待していた僕が馬鹿だつた…

「李翻ちゃん…大丈夫よ…きっと趙雲ちゃんがあなたの記憶を取り戻してくれるから！」

貂蝉さんが何か言つているようだったが、僕の耳には届いていなかつた。

僕の頭の中は戻らないと言われた言葉だけがこだましていた。こんな事ならいつその事死んでしまいたい…

趙雲さんには悪いけどこんな僕を見たらきっと落胆するはずだ…

「李翻…もし死のうとか馬鹿な考えを起こすなよ…お前の体はその傷を負いながら、蜀の地から吳までの長い距離を生き抜いた。お前の命が懸命に生きようとしてたんだ。それを無駄にするな!」

「でも記憶は戻らないのでしょう?今までの思いでも知り合いで顔も忘れてしまつた僕にこれからどう生きろつて言つんですか?」

僕が死のうと考えていた所に華陀さんが止めに入る言葉を言つてきた。僕はすかさず反論をする。

このまま生きても僕は僕じゃないんだ…周りの人達にきつと迷惑をかけてしまつ…
自虐的な考えになるほど僕は落ち込んでいた…

「失礼するわよ…さつきの話は外で聞かせもらつたわ。死ぬのは勝手だけど、貴方にはまだ利用価値があるわ。せめてそれが終わるまで待つてちょうだい。あとここで死なれたらはつきり言つて迷惑よ…」

扉の外から褐色の肌の美人な女性が入つてきた。孫權さんのお姉さんかな?

利用価値か…こんな僕が役に立つか判らないけど、役に立つなら何でもいいか…

「あつ…自己紹介がまだだつたわね。私は孫策。そこにいる孫權の姉で吳の王よ。」

お、お、王様？王様つて偉い人でしょ？こんな僕の所に来なくて
も…ならそこにはいる孫權さんは次期の王様？僕はかなり失礼な事し
てた…

「別に畏まらなくていいのよ。貴方も蜀の王だつたんだし。」

僕は更に驚いた。

僕が蜀つて所の王様？記憶を無くす前の僕は本当に何者なんだ…？

「それにしても貴方ほどの武人が敗れるなんてね…相手はどれほど
の強者だつたのかしら？一度手合わせしてみたいわ…」

孫策さんに聞いてみた。

「僕つてそんなに強かつたんですか？」

「ええ。強いわよ！私は貴方と戦つた事はないけれど、他の誰よりも
強いわよ！貴方個人で国を落とす力を持つていたって言われてる
位なんだから。全く妬けちゃうわね。」

記憶を無くす前の僕は本当に強かつたみたいだ。
でも今は何も出来ないかな…

「そうだ！もし良かつたら手合わせしてみない？何らかの衝撃で記

憶が蘇るかもしないわよ!」

孫策さんは目を輝かせながら僕に聞いて来る。

ハツキリ言つて無理だと思います。剣なんてどう振れば良いのかも分からぬ状態だから…

僕は苦笑いでごまかすしかなかつた。

あと何らかの衝撃つて…

確実に僕は怪我するでしょう…

「ほう…雪蓮は蜀との交渉材料を使い物にならなくなるのだな…せつかく優位に立てると言つのに…」

僕が苦笑いしてると、孫策さんの後ろに眼鏡をかけた知的な女性が立っていた。顔がスッゴく怖いです…
孫策さんも顔が引き攣つてるよ…

「め、め冥淋…いたの?」

「全く…仕事を放り出して何処かに行つたと思えばこんな所にいたか…ここは蓮華様が引き受けると行つたのだ…すぐに戻つて仕事しろ…」

そう言いながら孫策さんを掴んで引きずりながら部屋から出でいった。

何て名前だろ?…?わたくしの呼び名は多分真名がもうから呼ばないようにしないとな。

「「めんなさい… 起きたばかりなのにお姉様が騒がしくて…」

孫権さんが申し訳なさげな顔で俺に謝つてくれる。

「大丈夫ですよ。面白いお姉さんですね。」

僕は笑いながら孫権さんに行つた。

何やら孫権さんの顔が赤いがどうしたのだろうか？

「こら李翻ちゃん！ 浮気は駄目よん！ 貴方には立派なお嫁さんがいるのだから！ 孫権ちゃんもオイタしちゃ駄目よん！」

「ち、違つ！ 私はそんなんじゃ……ない……」

貂蝉さんの言葉を全力で否定している孫権さん。最後の方は良く聞き取れなかつたが一体一人のやり取りは何だつたのだろう？

チリーン…

と鈴の音が部屋に響いた。

僕が首を捻つていると突然首元に剣が突き付けられていた。

「貴様… いくら蜀の王であつとも、蓮華様を口説くのであれば容赦はしない…」

「ひょっと思春！彼とは何もないからーだから剣を引きなさいー。」

孫権さんの声とともに突き付けられた剣が引いていった。
凄く焦つた。

「こきなりじごめんね…。紹介しておくれ。彼女は甘寧って言ひの。」

甘寧さんか…わざわざ僕をずっと睨んでるし…怖い人だな…

「よし、李翻も田覓めた事だし、皆話したい事は沢山あると思うが、
そろそろ患者の安静を取りたい。今日はここまでにしてもらえるか
？では李翻。後の事は俺に任せてお前はゆっくりと寝ていてくれ。
また明日診察に来るからな。」

華陀さんがそう言つて皆を部屋から出やうとしている。

だが僕は一人にはなりたくない…今は誰かが一緒に居てほし…
れませんか…？

「華陀さん…すみません…今は一人は嫌です…誰か一緒にいてく
れませんか…？」

「あら〜ん？全く李翻ちゃんは寂しがりなのかしら？なら私が一緒
に「私が残ります！」てあげる？」

貂蝉さんが残ると言つていたが横から孫權さんが入つて來た。
正直嬉しい。貂蝉さんと一人でいるのはちょっと…色々と聞けるだ
らうけど、遠慮したい…

「えつと…孫權さんお願ひします…」

そして孫權さんと僕を残して後のは出でいった。貂蝉さんは何か
ぶつぶつ言つていたようで、よっぽど僕といたかったのかな?って
思つてしまつた。

46話 不安（後書き）

蓮華の視点も書いたがいいかな……？

次回は王様とお墓参りするかな……？

ではまた！

47話 前王の墓と毒矢と龍（前書き）

更新です。

なんかグダグダになつてゐる…

ではじうぞ！

47話 前王の墓と毒矢と龍

僕が目を覚まして半月程経つた時、僕は自由に城の中や、街を歩けるようになった。

一応捕虜と言う形なんだけど、自由にさせすぎではないかと思つてしまつ今田この頃。

孫権さんと一緒にいる時が殆どだから、自由ではないのかな…？
孫権さんと一緒にいれば楽しいけど、僕の中にかなりの罪悪感がある。多分忘れてしまつてお嫁さんに対する罪悪感だらつ…
この感じは絶対に無くしてはいけない。

最近、孫権さんの専属の軍師である呂蒙さんを紹介してもらつた。
恥ずかしがり屋の眼鏡っ子。時々僕を見る目がかなりキツイ…僕は
何かしたのかな？

そして常に僕を見張つている甘寧さん。本当に目付きが怖いです…
殺気がバンバン飛んで来ます…いつか甘寧さんの眼力で僕に穴があきそうです…

孫権さんの周りは目付きが怖い人ばかりだ…

ここに来てから孫権さんは一緒にいる事が多い為、大分仲良くなり、色々と話すようになった。まあ捕虜だから見張りが大部分だとおもうけど。

僕が起きてから一月ほど経つたある日、僕は孫権さん達と山に川魚を釣りに来たのだが、何故か今僕は一人で森をうろついてる…

つまり逸れてしまいました…

ただですらこの辺りの地理が解らないのに、逸れてしまつたら僕はどうなるんだ？このままではとにかく危険だ…仮に叫んで助けを呼んでも、熊とか出来たら僕はどうしようもない…

僕はとにかく道に出れる事を祈りながら道無き道を進んでいた。森の中をしばらく歩いていると、ようやく開けた道に出た。

これで戻れると思ったが、どちらに進んで良いのか解らない…

開けた道なんだ。どちらかに進めば人がいる所に出るだろ？と思い僕は進みだしたのだが、中々人里に辿り着かない…それどころか、また森が深くなってきていた。

川を見つけた僕は、孫権さん達に会えるかもしれないと思い川沿いを歩いていた。

歩いていると、ある場所でしゃがんでいる孫策さんを見つけた。いつも一緒にいる周瑜さん姿が無いようだ。
また仕事を放り出して出かけているのか？

と思つたが、孫策さんの様子がいつもと違う。何か悲しげな雰囲気を出していた。

悲しそうな孫策さんを僕はしばらく眺めていた。

一体何があつたのだろうか…？

少し立つて、孫策さんが立ち上がり、一いつ礼を振り向いた。少し後ろに立つていた僕と目が合ひ。

「あら？ 李翻じやない。こんな所でどうしたの？ たしか蓮華達と魚を釣りに行つっていたんじやなかつたかしら？」

「いや……そうなんですが、孫權さん達と逸れてしまつて森をも迷つてゐたり、いつの間にかここに着いてしまいました。」

僕は苦笑いしながら孫策さんに答える。

「それよりも孫策さん。さつき悲しげでしたが、何かあつたのですか？」

僕は氣になつていたため、孫策さんに聞いてみる事にした。

「……」

「……」

そう言つて孫策さんは僕に墓が見えるように移動した。

そこにはひつそつと小さな墓が立つていた。

「先代の墓にしてはかなり小さこですね。もつと大きな墓だと思つ

てました…」

「お母様はね、民の前や城の中では派手にしてたり、良く騒いでいたけども、私や妹達の前では、物静かな女性だったのよ。そうね…蓮華みたいな性格って言つたら解りやすいかしら。」

孫策さんと孫權さんの性格は反対だと思つていた僕はある意味納得した。

「良くお母様は言つてたわ…私が死んだ時はひつそりとした小さな墓だけでいいって、だからこいつしてお母様と良く出かけていた川の辺に墓を立てたのよ。

ついでだから李讎も祈つてあげて。」

僕は孫策さんに言われて墓を参る事にした。孫策さんは僕の隣に腰を下ろし、もう一度祈りをしていた。

「よし！城に帰りましょうか。貴方ちゃんと着いて来なさいよ！また迷子になつたらこっちが困るわ。」

僕は頭をかいだ。反論の一つも出来やしない。そう思い孫策さんを見ると僕の視界には恐ろしい物が飛び込んで来た。

茂みの中から孫策さんに向けて矢を構えている兵士が一人いた。

「孫策さん危ない！」

僕はとっさに孫策さんを突き飛ばした。
それと同時に僕に矢が刺さるのが分かる。

孫策さんは何があつたのか解らないようだつたが、僕に刺さつた矢
を見ると、何があつたか理解したのか、矢を放つた方角に向けて走
つて行つた。

僕の身体に激痛が走る。矢が刺さつた所が燃えるように熱い…
それはジワジワと身体の中に広がつて行く。

意識が朦朧としてくる…どうやら矢に毒が塗られていたみたいだつ
た。

意識を失う前に、孫權さんがこつちに向かつて走つて来ているのが
見えたが、僕はそこで意識が途切れた。

気が付けば僕は白い所にいた。そこは辺りが霧みたいな物が充満し
ていて辺りが全く見えない。
「こ」は何処だ？確かに僕は…

「そつか…矢に撃たれて死んだのか…」

そう独り言を漏らしながら下を見る。

僕の右足には鎖が巻き付いていた。

その鎖は先があるようで、僕は鎖に沿つて足を進める。

暫くすると、何やら檻みたいな所に到着した。

鎖はまだ続いているようだが、檻によつて僕はこれ以上進む事が出来ない。

檻の中も霧が濃ため中が見えない。

中を見よつと檻に手を触れた瞬間、一気に霧が晴れていった。

霧が晴れて中が良く見えるよつてなつた。

僕は驚いた。

檻の中には、体中を鎖に縛られ、身動き一つ出来ないよつてなつている僕がいたのだ。

間違いない。胸には同じ傷があるし、指にはあの指輪もしている。

僕の足に巻き付いている鎖も檻の中の僕に巻き付いていた。

それとは別にもう一本鎖が檻の中の僕に巻き付いていた。僕に巻き付いている鎖とは違い、赤い色をしていた。その鎖は檻の外に果てしなく続いていたが、その存在感は凄い物だと感じていた。一体何と繋がっているのだろう……？

僕は暫く檻の中の僕を眺めていた。

檻の中の僕は意識が無いのか顔を上げない。

「「Jの僕は一体…？」

「これは貴様の無くした記憶だ。」

突然後ろからかけられた声にビックリしながら後ろを振り向く。そこには、大きな龍が佇んでいた。

僕は驚きそこから逃げようとしたのだが、龍の足に捕まってしまい、身動きが取れない…食われる?

「貴様を食うつても儂には意味が無い…貴様は儂の宝玉で助かつたであらうこ…」

龍の言葉で僕は暴れるのを止めた。この龍が華陀さん達が言つていた龍…

「貴様の中から聞いておつたが、あの華陀といつ医者は無謀な事をしたな…奴が読んでいた蘇生の後遺症は間違いだと言つのに…」

龍は笑いながら華陀さんの治療の事を言つ。

「あの治療の後遺症はな…記憶を無くすのではなく、記憶を食われ

るのだ……儂達によつてな。」

僕は黙つて龍の話に耳を向ける。

「大体、龍の力と人間では釣り合いが取れんのだ……宝玉により蘇生した人間は儂等に記憶と人格をじわじわと食われ、数年後に憎悪と破壊を生き甲斐とした人間になつていくのだよ。」

僕はそこである事に気が付いた。僕も龍の宝玉によつて蘇生した人間……記憶も無くしている……なら僕は数年後には龍は言つていたように破壊を繰り返すようになるのか？

「小僧……怯えているようだな……貴様が数年後にはそうなるという事に……だが安心しろ……貴様はそうはならん……見てみろ。この赤の鎖を。」

「

龍がそう言ひながら、赤い鎖を切ろうとするが、その鎖は切れる所か、傷一つついていない。

「儂等は蘇生した人間の繋がりを断ち切る事により記憶と人格を食うのだが、貴様とこの鎖の繋がりは切る事も傷をつける事も出来ぬ……それに……貴様の身体は儂と適合した。時が来れば記憶も戻るだろう。」

記憶が戻る。龍の言葉に安堵した僕はある事を思い出した。

「そう言えば僕は毒矢に撃たれて死んだんだった…記憶が戻るつて分かっても意味がないや…」

「小僧…何馬鹿な事言つておる?仮にも貴様は龍の力に適合したのだぞ?龍の力を得る前から生命力が強い貴様に龍の力が宿つた。たかが毒矢位で死ぬような命、じやない。」

僕は死ない…龍の言葉で更に安堵した。確かに僕の生命力は異常だつて華陀さんが言つていたからな…

「小僧…そろそろ起きるみたいだぞ。まあ起きたらこの事は忘れているだらうがな言つておくぞ…宇吉を止められるのは貴様だけだ!」

宇吉?誰だらう…聞こひと思つても、消えていく身体から声も出せない…

消えていく意識の中では僕の中の僕が顔を上げたような気がした。

そして僕は目覚めた。

47話 前王の墓と毒矢と龍（後書き）

次はいよいよ記憶を取り戻す話になりそうです。

星の活躍には作者も期待しています。

また次回！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9027o/>

恋姫転生伝

2011年6月19日14時28分発行